からさう云ふか。古い船唄にも「きさらぎ山」といふ語がある。岩手山麓では之に對して、年中山といふ名稱も有るさうである(山の生活)。

モリヤ　山小屋の名。土佐檮原あたりでお茶小屋ともいふ。モリは「山田守る」のモルに同じく、燒畑などを見張をする意かと思ふ。

ノヂゴヤ　切替畑をするときの作業小屋を、遠州磐田郡の奥で斯ういふ。

ナギゴヤ　山の燒畑に稗・蕎麥などを作るとき又は秋の收穫の時期に宿泊食事に充てらるゝを、飛驒の山々でナギゴヤといふ。薙は燒畑作りのことである。だから猪の襲來の時期には夜守をするにも此小屋は殊に缺くことが出來ない。山の植物を採るにも薙小屋が根據となるが、近年はこれも減じつゝある。

ヨウゴヤ　ノヤキ卽ち燒畑を荒す猪のための番小屋を、以前豊前伊良原の山村ではヨウゴヤと呼んだ。猪追ひ小屋の意かと思はれる。

ヤラヒゴヤ　猪追小屋。紀伊上山路ではこの小屋にゐてシシヤラヒ卽ち猪追ひをする。その掛ごゑはホウ〳〵といふ。卷狩にもこの聲は用ゐられる。

タホイヤ　猪追小屋を駿河安倍郡でさういふ。タホイは猪を追ふ掛聲であらう。

ハタマキゴヤ　山中に燒畑を作る爲に設けた小屋。羽後ではそれが地名となつた村も十六貫山の傍にあつた(しげき山本)。ハタマクとは燒畑に種を播くことを意味する。

ホウカムリゴヤ　柚一人だけで出作りなどをするに作る小屋、之を美濃德山ではホウカムリゴヤと謂ふ。合掌を作り、棟木を山にわたすのみで股木の柱もないもの、いはゆる蒲鉾小屋のことである。猪番小屋や田圃小屋にも頰冠り小屋がある。飛驒にも頰冠り小屋の名はあるが、爰ではもつと廣範圍の山小屋をいふやうである。

キヂゴヤ　東北藏王山の麓など、遠刈田あたりの木地屋は別に家をもつてゐるので、山の木地小屋は男ばかりで數ケ月もこもるが、それにも兩小屋とか片小屋などゝいふ構造上の名稱がある。何れも澤に直角には建てゝはならぬなどゝいふ作法があることは、岩手山などの例とよく似てゐる(旅と傳說一二卷五號)。濃州揖斐郡の奥にも木地小屋をかけてゐるものが尠くない。必ず竹簀を張つたツシを作り、玆に木地をあげて乾かす。戸口は山小屋同樣に二つあるやうである。

スバヒゴヤ　炭燒小屋の脇に一段と低く設けた小屋の名稱。豊前京都郡の山中では、竈から出した炭に「すばひ」をかける場所である。「すばひ」は泥と粉炭とを混じたもの、乃ち之を用ゐて火を消すのである(豊前六號)。

クラレ　炭燒竈から木炭を出し、之をそこに置き或は作業をなす小屋、伯耆の西境阿毘縁の山村では之をクラレといふ（因伯民談一卷二號）。

カマイホ　炭竈の小屋を南河内の瀧畑でかう謂つて居る（河内國瀧畑左近熊太翁舊事談）。この地方ではまだ庵（いほ）といふ語を聽くやうである。

牛ゴヤ　炭燒小屋（上州大間々）。佐渡島の內海府あたりでは、炭竈のある小屋をカマ小屋といふのに對して、山で食事を攝り、休憩をする爲、炭竈の傍に作つた小屋をさう謂つて居る。

ハチゴヤ　新しく拓かれた北海道中部へ炭燒どもの持つて行つた用語らしい。炭窯の雨除け小屋をハチゴヤと謂ふ（林業辭典）。

ショウエンゴヤ　松をもやして出來た煤をショウエンといふことは、之を生產してゐる山村には廣くいふことである。紀州などでは根松を用ゐ、之を採る業をする小屋を松煙小屋とよんでをり、このわざに從ふものを松煙たきといふ。蟷螂を松煙焚きといふのもその擧動に通じた點があつたのであらう。松煙の用途は主として墨の原料であつたが、墨の異名でもあつた。

コゴメゴヤ　コゴメは曲つた木の方言、越後の北魚沼郡湯之谷では、之を棟で合せて屋根にする故にコゴメ小屋の名がある。羚羊狩や熊の穴見の際につくる。センダツの柱に棟木をわたし、之に二三尺おきにコゴメをわたす。センダツの柱といふのは先達柱の意であらうか。ヲダツ小屋よりは費用はかゝるが永くもつ。ヲダツ小屋といふのは熊狩の小屋のこと。この外、ぜんまい採り小屋・こしき割り小屋などゝいふのがある（熊狩雜記）。

ケタゴヤ　越後の三面の布部々落では山小屋に二種あり、ケタゴヤがその一つ、いま一つはノマ小屋とよんで居る。後者には合掌小屋とか頰被り小屋などの名がある。ケタ小屋にはダン柱が二本ある。ケタは東北で山小屋を謂ふケトの語と關係があるかと思ふ。

カタダレ　信州の安曇村大野川では、山小屋をマタ小屋といふのに對して、ヒラ卽ち傾斜地に作るものをカタダレといふのは、「片垂れ」であらう。地形に因つてさうなるのである。

ミゴヤ　山小屋の作り方も無雜作にみえて實は作法が傳へられてゐる地がまだ有る。會津の檜枝岐の山小屋の大さはミゴヤヨヘイ、ゲンクワニヘイといふのが最も大きい。ヘイは屋根板のこと、長さ三尺である。まづウダツ二本、これは棟木を支へる中央の柱であるが、これから奧をミゴヤ、外をゲンクワといふ。次にゲンクワ又といふ柱を立て、ウダツとの間を二本のオーヂサホで結ふ。のち始めて屋根をふく（熊狩雜記）。

ヤナカ　又はムヤゲタ。どんな小さな山小屋でも必ずこの屋中を入れねばならぬと云ふ。木が

ない時は竹でもよいといひ、屋中のない小屋には泊られぬとさへいふ信仰が、遠州氣多の山地にある。だから他人の小屋などに入るときは、先づ屋中を見あげるものだといはれる。

サカマタ　美濃德山の山小屋作りでいふ語。之は柱ではなく、屋根にのせる木のこと、ナルギに當るものである。柱を股にする故に此名がある。作り方としては棟木をのせて最後にサカマタをのせるのであるが、最初は先づ合掌起し、それから假のつゝぱり、合掌の下に柱を立てゝから桁をゆひ、また木をかひ、向ふさずをはり棟木をのせるといふ段取りである。

ハゲト　甲州でも武州の奥多摩あたりでもいふ爐の方言。

トモカ　山小屋の爐縁の木の枠を、會津檜枝岐の山中ではトモカといひ、之より中へは足を出させない風がある。

フサンマクラ　飛驒の材木山でいふ詞。もとは圍爐裏を枕にして寢るのが普通であつたが、病人や怪我人だけが反對に足を爐に出してねる。之を不參枕と謂つて居た。今では一樣に壁の方に向き、足を爐で溫め乍らねるやうになつてゐるのは變遷である（ひだびと五卷四號）。

ウヂハシラ　山小屋で神の座所とする柱。大隅の百引の山人はウヂ柱と名づけてゐる。

ヲサメギ　會津檜枝岐あたりの山小屋では山小屋の外にこの名の木があつて、小屋をたゝむ時は山の神祭りの幣束などは必ずこのヲサメギに祀つてから山を引上げて來る（熊狩雜記）。

ホドムシリ　秋田のマタギ詞でいふ火箸のこと。煙管をコマガリなどゝいふをみれば金物の本名を忌むのかとも考へられるが確かではない。

イシ　山小屋の炊事場。土佐郡の山地でいふ（林業辭典）。

コヤヤブシ　木挽工場の事業終了式祝宴をコヤヤブシ、對之、始業式の方にはコヤエリといふ名がある。コヤヤブシは「小屋壞し」、コヤエリは「小屋入り」の意であらう。

ヌカヅメ　山小屋に於ける穀物貯藏法の一種。濃州德山では出作り生活を切上げて、ヂゲに還る前、山小屋の眞中に食料以外の雜穀類を圍つておくのに、下に「どろた」を置いて臺とし、その上にノギヌカ（稗粟の毛）を一ぱい詰め、其上に貯藏せんとする種物などをのせ、簀を以て被ふ。この簀と穀物との間にもノギヌカをつめ、簀を繩でしばつて置く。ノギヌカは鼠の口にさゝる故、鼠きらひて害はずといふ。

ブガキ　檜枝岐の山中にて必要なる食料を地中（雪中）に貯藏する際、鳥獸の害をうけぬやう、諸神に祈るが、大將（頭）は槍にて雪に大なる圓を描いて、その線内に埋めてある糧食に害の及ばぬことを祈念する（旅と傳說、一一卷三號）。また別の報告に依れば、同地の山小屋でブンジの行ふ祭の

謂ひで、之を戸祭あるひは戸じめの祭ともいひ、フチカリ(貂)が來て荒さぬやう小屋安全の祈だといふ。乃ち神々の供物の外に、此山のフチカリにあげますとて供へをなすといふ(熊狩雜記)。つまりは食料或は小屋などの安全を禱む祈願を意味する語であらう。

ヨリシヤクシ　南部恐山などの雪中の山小屋で、杣山賤などの用ゐた食器の一。飯は炊いで、鶯やうの飯匙で盛り、柾の折杓子といふものに汁を盛りわけたのを、山折敷にのせて旅人の訪れたものにさし出したといふ(奥の手風俗)。

ヤマ：ヤゲ　秋、出作りから歸るときは、粟餅に小豆をいれた黍團子を拵へて地下に戻り、近親に配る風がある(美濃德山)。古語にいふ山苞にあたる語である。

二一　杣職・山師

ヤマゴ　木樵其他山に入つて働く者を、東北は弘く之をヤマゴといひ、薪を採りにゆくをヤマゴスルといふ。狩人だけはこの外であるらしい。中國で謂ふヤマゴは鑛山勞働者だけに限つてゐた樣子である(長門風土記)。乃ち、ヤマゴはその作業團の一人々々を意味するのであらう。日向の一部ではこれに相當する語をヤマシといひ、山仕事をする意と說いてゐる。狩人には別にヤマトといふ稱呼があつた。山人の意である。

ヤマウド　樵夫を山人といふ語は今も弘く東北に行はれて居る。紀州でも山へ薪をとりに行くことをヤモドと謂ふ(和歌山縣方言集)。

ヤマンダ　近江湖東の平野では、薪柴を賣りに來る山村の人々をヤマンダと謂ふ。恐らくヤマウドの古語を稍粗末に發音したのが元であらう。或は又ヤマガダイフもしくは木の中に住むといふ所からハトとも謂つた。いづれ遠慮深い人々だといふことを知つて、多少輕しめた物の言ひ方である。

ヤマサ　樵夫。喜界島の昔話にみえてゐる(島一卷五號)。

ヤマチヤチヤ　山の勞働者をやゝ輕侮していふ語、隱岐の中村でヤマチャチャと謂ふ。チャチャは父を意味する下級な語。普通、伐採した木を適宜に切斷して木材とする職人にはヤマトといふ詞が別に用意されてゐる。

オガ　オガサンともいふ。肥前藤津郡の一部で、樵夫の意。おもふにオガは大ガガリ卽ち大鋸のこと、之を使ふ人を稱するかと考へられる。

ハツリ　紀州上山路で杣職人の謂ひ。ソマハツリともいふ。ソマとハツリとは別々のものであらう。すなはちハツルとは木取りすることかとおもはれる。

キリゴ　山子といふうちにも、玉切や節拂ひを專門にする人夫を、岩手山の附近でキリゴと謂つて居る（林業辭典）。

モトヤマ　伐木造材の作業に從ふ者を、肥後の五木邊でモトヤマ又はモトヤマシと稱する。越後三面の山村では、山で角材を削る者の稱呼（越後三面村布部鄕土誌）、常陸の北相馬・稻敷などの諸郡で杣職といふが、ほゞ同じ作業に從ふものゝやうである。

サキヤマ　現在は山で働く伐木造材の人夫を總稱する語の如く用ゐられるやうになつてゐるが、本來は山子の頭のことであつたと思ふ。隱州中村でも木挽の頭梁のことと說いてゐるが、狩の頭目をいふヤマサキなどと同じ詞かと思ふ。吉野あたりではアトヤマの對語と解してゐる。つまり後から行つて仕事をするものがアトヤマだといふ。乃ちサキヤマが先達・先行者を指すことは自ら明らかで、猿のサキヤマなどと、信州遠山の山中でいふのが、一群の首領のことである（山鄕風物誌）のも、同じ語である事が推測し得られる。駿河・遠江では伐採作業をするに先だつて、木の根に斧を入れ又は鋸をあてる役を今もさういふから、以前は多分是に伴ふ祭式があり、サキヤマは卽ち之を掌つて居たのであらう。此仕事を周智郡では根切りと謂ひ、三河の北設樂ではイカリヲヨルと謂ふ。大隅百引のサキヤマは、伐木の切株に椎の枝をさすを常習としたといふからまだ一部には古風のみるべきものが遺つてゐるのである。吉野では樽丸職人に、美濃揖斐の奥では段木・水車・木地などにもサキヤマがあるが、大和の奥で相互にする火葬の燒き役までサキヤマとよぶのは甚しい轉用であつた。播磨宍栗郡の山村で立木を倒すキリサキに對して、材木を角にする者をサキヤマと謂ふが、キリサキは伐先山であらう。北九州の炭坑地では採掘夫をサキヤマ、之に對して運搬の役をアトヤマと謂ひ、後者は女又は見習ひ靑少年の任務であつたといふのは、杣職の役割を移したものである。既にこの種の弛やかな土地ではサキヤマが單に伐木作業の名とまでなつてゐるのは零落といふの外はない。

ヤマサキ　越後の三面などで、狩の組の頭を山サキ又は山親方と謂ふ。山詞もこの者の統制によつて、里にあつては口外を戒められてゐる（民俗學五卷六號）。杣稼ぎの團體にもサキヤマといふ語は弘く行はれてゐるが、現在その特殊の任務が認められてゐる處は極めて少い。最初はこれにも先達のやうな意味のあつたことは猿のサキヤマからも推量し得られる。山サキは卽ち山先達で山神を祭るのが主たる役目であつたらう。羽州小國鄕の獵師の首領にもヤマサキ或はヤマモトの

名があつて、山の神祭りのヒマチはこの者の家で行つたやうである。

センヅ　南九州の山々で山子の頭をセンヅといひ、ナバ山にもこの語を用ゐて居る。隱岐の中村の椎葉製造の支配人も亦センドであつた。沖縄の神事にいふ勢頭や山伏の先達などといふ語ともとは同じかと思ふ。

サキタテ　二月山の山小屋の小屋頭（陸中稗貫郡）。ここも秋田マタギの狩小屋の作法と似て、山の神を祀り、數々の禁忌があり、里へ歸るとサキタテの家で祝宴がある。山伏などのセンダツといふ語もこの先立であらう。行者と樵夫・狩人とは作法がよく似てゐる。

シチクロ　イタヤマ・サキヤマの山小屋の指揮者を、大隅の百引ではシチクロともセンヅともよんでゐるが、この下に在つて燃料や食料の心配をするものがシチクロであつた（山村生活の研究）。イタヤマはサキヤマの對語、卽ち木挽の方言である。

ヨコ　紀州は一圓に山仕事の人夫頭を庄屋といひ、次席をヨコといふ。時としてコショウヤを以てヨコの上席とする所も日高川の上流などにはある。ヨコは職人を使ふといひ（有田郡）或は記帳方と解說するもある（熊野地方）が、ひとしく人夫のことをヒョウといふことは同樣である。

テイソウ　山小屋の飯炊當番。陸中雫石などでは、各員順番に之を勤め、其折には自分の米の

みを使ふのが例であるといふ。土地によつては特に專務の少年などをつれてゆく小屋もあるが、是には又別の名稱があるやうである。

コガシキ　山小屋または和船の食事係をカシキといふことは弘い。美濃揖斐郡の杣小屋や川狩の日傭小屋でもさういふが、宿で飯を炊き辨當をつくるものはオヤガシキ、小屋から仕事場まで飯をはこぶものはコガシキなどと謂つて居る。

ハガラシ　常陸の各地で材木商、下總では山林の賣買をするものをさういふ。印旛郡では之をボッカヤともいつてをり、モギッ木（生木）千本伐れば人一人殺すにあたるとも謂つてゐる（方言八卷二號）。ハガラシは葉枯しと解せられるが、隱語かも知れない。

シロキシ　白木は杉檜などの建築用材。之をひさぐ商人を今も白木師といふ地方がある。白木屋も信州南部では材木屋のことを意味するが、クロキ卽ち薪に對する語であらう。木屋町といふのはこれのゐた處である。

モクロウ　播磨の越智谷などで、山村に入つて材木を買ひあるく者をさう謂ふ。多分馬商人のバクロウを擬した、新たなる戲語であらうと思ふ。

モンギリ　山から木を出す者をモンギリと謂つてゐる（小豆島方言集）。

センバ　熊野の木ノ本あたりでは、山で働く番頭をセンバといふ。木綿包みに米一升と餅とを持つてオヤカタの家へ挨拶に來る風がある。小作人も同樣である（山と民俗）。尾鷲ではセンバシが材木業者の稱呼であつた。船場と關係の多い人々の意であらうかと思ふが確かではない。

二二　特殊の山仕事

ヤマハゲミ　山に茸類を採りに行くなどの山わざを、羽後の南部ではハゲミ又は山ハゲミと謂つて居た。栞を路々に挿して行く風習が殘つて居たといふ（駒形日記）。

ヤマカジ　山に入つてナバ（茸）などをさがすことを、吉野十津川の境でヤマカジといふ。

トリクサ　吉野の奥でトリクサといふのは、土用中の藥草採りのことであつたが、信州下伊那の山地では藥草がトリクサであつた。

トウヤクトリ　トウヤクトリと、常陸の新治郡あたりで謂つて居るのは、七月中特に土用の丑の日に採つたものは殊によく利くといつて、山へ藥草をとりにゆくことであつた。腹痛の折など煎じてのませる風がある。當藥は上方でいふセンブリのことである。土用の丑の日、藥草を採りに出るといふ習ひは西日本の各地にも稀ではない。かく民間療法で特定の日に採取されたものが珍重されることはこのトウヤクのみに限らないやうである。

サルワタリ　吉野の四郷村などでは杉の實採りのことをサルワタリといふ。木から木に傳はるからであらう。手木を用ゐることは他と同じである。

ハラ　松煙の材料として主に松などの立木の幹を掻き削る部分を、紀伊上山路の松煙焚きはハラと呼んでゐる。「ハラを作る」といへば樹脂をふかす事で、春秋の二度をその時期とした。

ハヒヤマ　山仕事の一つ。木を燒いて紺屋灰を作ることを灰燒きと謂ひ、之を紺屋に渡す者の仕事を灰山といふことは、製炭以前はかなり弘く山間の村に盛んに行はれたらしい。大隅の肝屬郡には灰山といふ部落があり、今も伊集院あたりからきてこの業に從ふ者が尠くない。攝津の歌垣などでは、以前これにシャシャブといふ木を用ゐたといふ（近畿民俗一卷一號）。燃した燠を崩して灰とするのに木の杁を用ゐ、まだ熱いうちに集めて水で濕すことをシトといふが、これをせぬとアクが利かない。中々むづかしいわざであつた。多くは三十貫を一駄としたやうである（伊勢飯南郡）。陸中にはこれを毎年秋の彼岸入の日の翌日、奥山に入りやいた灰を俵に入れて持運び、麥まきの肥料とすることをもハヒヤマといふ例があつた（衣川村誌）。

ドドウ　橡の古木のウトウ（空洞、アバケともいふ）の內部の腐つた木片卽ちドドウを削つて灰を作ると、非常にあくの强い灰汁が出來る。美濃の德山ではこれを紙の製造に用ゐ、或は柝の實などをさわす爲に入れる。「さわす」は中部地方の方言で果實などの澁をぬくことである。

モチハギ　黐の木の鬼皮を削りとる者の稱呼。伊勢飯南郡の奧ではこの皮を水に浸けて晒し、唐臼で舂いて黐を作る山仕事が以前はあつたが、今はもう泯びた（山村生活の研究）。

ネリグマ　土用の丑の日にキワダを剝ぐ。備中阿哲郡の山あひの村では之を買ひとつてネリグマといふ藥を作る。ネリグマは練熊膽の下略、幾分隱語の趣意もあるかと思はれる。

シブキ　澁木。出雲では「ひさかき」をシブキと呼んでゐるが、必ずしもこの植物には限らなかつた。楊桃の皮を煎じたエキスも、又車輪梅の皮も同じ用途に供せられる。何れも染料になる故に澁木である（山林五九八號）。

センガキ　越後東蒲原郡の東川で、半夏から彼岸までの間に漆を搔く一つの方法をセンガキ又は養生ガキと謂つて居る。幹に一尺五寸位あけてグノメに切る。これだと木の實が却つてよく實る位であるといふ。殊に「土用セン」とて、土用に搔いたものは高價である。このあと、木をぐるりと切まはして、秋霜のふるまで搔くのをトメガキまたはカキコロシといふ。この漆は値が安い。次のは「枝ガキ」で、尤も廉く、あとはシシメと呼ぶ。

エダカキ　越後東川の漆搔きの方法の二。センガキのあとをトメガキといふことは別に誌したが、「枝搔き」はこのトメ搔き後、大きな枝を二尺五六寸乃至三尺の長さに切り割り、一月位水につけておいてから漆を採る手法で、霜が降り寒くなつてから、家の中の作業とする。この漆は價が安い。

シシメ　漆の種類。越後東蒲原の奧地で枝カキにとつて來た枝のウラから採つた漆をかういふ。書きものに使ふのは是でなくてはならぬとされ、土用センと同樣に高價である。辭書などにはセシメウルシとしてみえ、石漆の漢字を充てゝあるのがこれであるが、何も奧羽ばかりの產とは限らない。大和の南部あたりでもセシメと呼んで、一年中の最後にとつた漆の名、繼ぎ目をつぐに用うと說いてゐる（南大和方言集）。

ワタリコ　山から山へと渡りあるいて居る生業は存外種類が多い。陸中雫石などでは、彼等を一々の職業によつて、ドヤ・炭燒き・ガハシなどゝ呼んで居るが、蔭では之を總括して渡りこと謂つて居た（旅と傳說七卷一號）。渡りこのコは山こなどゝ共に、個々の勞働者を意味する。

イタワリ　信州南佐久などで、屋根板とする薄き板片を作るを業とする者。杣などゝ同じく、

小屋を掛けて山に住む（山岳二〇卷一號）。

オエ　山中で板をひく者などの用語。津輕地方で針葉樹の板面によく割れることを、オエがきくとか利かぬといふ。またオエに代へてオツといふ詞を用ゐもする（林業辭典）。

トツカ　杉・松・澤胡桃などの皮、之を岩手郡の山人たちはトツカと謂ふ。

ヤツマキ　杉皮の計算法。豊前京都郡の山村では、杉皮を二尺六寸平方に八枚積あげることをかう謂ふ。九枚重ぬるを九ツマキ、之を一坪といひ、二十坪が一人前の仕事とされる。荷造には幅一尺二寸に折つて針金で締めるといひ、一本の杉から一坪採るのが普通である（豊前六號）。ヤツマキは八枚で一坪をなすのかも知れない。

クハヘラ　鍬の木造の部分、飛驒は一圓にクハヘラと謂ふ。楢の枝の都合のよいのを伐る。山の少い村の者はこの鍬へらを買つて自分で適宜に加工した（ひだびと五卷一號）。ヘラは古く延喜式などにみえた語である。

クハノダイカキ　岩手山の麓あたりの村々で、鍬の柄を採ることを斯う謂ふ。樫や厚朴などを使ふが、枝をそのまゝ柄とするから、その見立はなかなか難しい。幹からの角度の眞直なものでなければならぬとされてゐる（山の生活）。

ヒラキ　屋根を葺く板を鹿兒島縣ではヒラキといふ。枚木卽ち薄くした木といふことか。ソギと謂ひ、枌といふ字を用ゐる土地もあるが、此方が古いのかと思ふ。

ヤグレ　屋根を葺く板を東北は普通マサ、中部ではコケラ又は誤つてカキ板、四國九州はソギといふ古語をも傳へて居るが、飛驒の益田郡などではヤグレと謂ふ。材は栗で長さ二尺二三寸幅五六分、厚さ二三分にへいだもので、一坪を葺くのに凡そ三百枚を要する（益田郡誌）。又寸法によつて別に三五と呼ぶソギ板もある。關東などの山村などにも稀にこの栗の板を葺いた舊家を散見するやうである。ヤグレは屋樽であつて、以前クレといふ語の範圍の今よりも廣かつたことを思はしめる。

ヘギヤ　檜物師又は檜物屋のことを佐渡ではヘギヤといふ。杉・檜の材を薄くそいだ板をヘギ板にヘギ、折敷などを作るものゝことである（佐渡方言集）。

マゲシ　曲げ物作りのことを東北にて曲師といふ。曲師澤・曲師小屋などの地名の殘つて居ることは、中部以西の木地山や六呂谷も同樣である。越後糸魚川では之をマゲシヤといひ、横メンツ卽ちヒツワッパなどを越中魚津あたりから買ふといふ（民具問答集）。

ヘリシ　奥秩父の山中琴川の上流などで、箕や篩のヘリを作る材料を採る人々をいふ（山岳二

○巻一號)。東北ではガハシ、又はマゲシとも謂ふ。木を火にあぶつて曲げるもの。檜物の需要多かつた時代には、是は我邦では大きな工業であつた。桶からバケツになつて、今は大いに衰へて居る。

ガハシ　曲物師をさう謂つて居る地方は廣い。篩や綴桶の胴がガハだからである。林業辭典にガハを直ちに樽のことゝ解說してゐるのは當を得ない。樽からガハを作るのである。三河北部のガハ師は木曾から來るといふ。信州は佐久にも伊那にも住んでゐる。北設樂郡本郷町などではガハヤと呼び、ヲンケなどの檜の曲物を今も作つてゐるやうである(民具問答集)。

マルコシラヘ　四斗樽の樽を拵へる山仕事の名、吉野の四郷の山地で耳にする。マルは樽丸の意である。

マルシ　樽丸の製造職人を土佐安藝郡などで丸師といふ(林業辭典)。

ワカシド　山中に於て臨時に設ける石の竈をワカシドといふ所が、多分伊那であらうと思ふが、行はれてゐる(山郷風物誌)。

ヤマヂョカ　井に弦のついた一種の陶器、之を山へ携へて飯を炊ぐ。大隅の百引ではヤマヂョカといひ、かゞりの中へ入れてゆく由。

エノサシ　山中で辨當を鼠に喰はれぬやうに、枝にさしておく法は、アイヌから傳はれりとして、エノサシとよぶ。エノサシはアイヌサシの音訛であるといふ(野邊地方言集)。

ヨギリ　山行きの水入れ、日向の椎葉山や七つ山あたりでかう呼ぶ。竹筒を四分位の幅の樺皮で、きりきりと卷いたもの、このまゝ火にかけて溫められるといふ。

コシカハ　又尻皮といふ。木曾・飛驒から三河の奥など、廣く行はれて居る。山で働く人が腰にぶらさげて、手を使はずに尻に敷けるやうにしたもの。三河では猪や「いはしか」の皮を用ゐ、木曾駒ケ嶽の麓ではニクの皮がよいといふ(蕗原二巻三號)。「いはしか」がニクと同じものをいふか否かはよく判らない。九州の阿蘇では尻當ては主として狸の皮である。以前は武家も是を利用し腰當てと謂つて居たらしい。太平記巻三十五に、

はたけ山狐の皮の腰あてに
ばけの程こそ顯はれにけれ

山伏修驗の徒は之をヒッシキと謂つた。卽ち引敷きである。腰當のことは、鷹飼の裝束に攝腰、樂家秦王の具、腰當。東鑑・庭訓往來等に腰當といふは籔を着る帶なり、今昔に見えたるコシ當も同じものか云々、太平記に見ゆる猿皮の腰當は今いふ引敷か、鎌倉年中行事に虎皮の引敷とも

見ゆ、今甲冑の上に刀をさすべき料にこしらへしものも腰當といふ(春湊浪話、下)とある。腰皮・腰當ともに、もとは一つのもので、弘く用ゐられたのであらう。

シリカハ　木挽や山師が腰につける皮の尻當。日向・肥後の境で弘くシリカハと呼ぶ。肥後の五木では犬の皮を用ゐ、歩くと是がひらひら動くのをだてにする風があり、日向の鞍岡のシリカハにはむじな卽ち穴熊の皮をよいとして、ニクは使用しない。

シツコ　北秋田などの鑛山で、坑夫が必ず腰につけてゐる藁製の袋、鑛石は之に容れて運び出すが、掘る時には之を腰に敷いて居る(民俗學四卷六號)。多分は敷きこの意で、山方・杣夫の敷皮と起りは一つのものであらう。

アテシカ　尻當て。羽後の雄勝郡の鑛夫の用ゐるもの。シカは尻皮であらう。武藏西多摩の小河内では尻皮のことをシッシキ、駿州富士郡の山でシキッカハ、越後北魚沼の奥ではケツカハなど多くの稱呼が各地にある。

五　禽　獸

二三　鳥獸名

クマノシシ　熊を會津から日光にかけては、わざ〳〵熊のシシと呼んで居る。シシは要するに肉を取る獸の總名であつた。但し、檜枝岐などの山詞ではナビレといつてゐる。

ミツグマ　熊は一產二仔、その仔熊を三年の間は連れあるき、四年目の春、穴を出ると別れる。上伊那では之を三つ熊と謂ふ。之に對して一つ熊といふ語もある。これは仔熊をつれぬ牡の方である(蕗原二卷二號)。この三つ熊をとると荒れるといひ(上伊那郡川島村鄕土誌、二)、或は南に接した遠州門桁あたりでは、七つ鹿と三熊には鐵砲をむけぬなどゝ謂ひ、之を避ける風がある。

ワカゴヒキ　親熊が當才の仔をつれて徘徊するのを、上越信の國境地方では若子引きと謂ふ。

サツピキゴ　南會津などの山村で、熊がヤラヒゴ卽ち前年の仔をまだ振棄てぬうちに、再び姙んで生んだ弟妹の仔熊をいふ。

フルコモチ　二歳以上の仔をつれた熊を、越後の北魚沼などでさう呼び、ヤラヒモチともいふ。若子持ち卽ち春生れた許りの二匹をつれた親熊に對する語のやうである。若子持ちの仔は多くは牡牝である。仔は寒あけに生れるものだといはれる。

ヤラヒダシ　乳呑み熊をつれた熊を若子持ち、仔が二歳になると親が嚙みついたりなどして苛めて離す。之を南會津でヤラヒダシといふ。やらはれても仔熊は幾度となく戻り、一年位は親熊の附近にゐるものだといふ(旅と傳說一一卷二號)。

ヤラヒゴ　熊の仔の二年目の春を迎へたものを、越後・會津に跨る山岳地方で、ヤラヒゴ又はヤレゴ、或は單にヤラヒと謂ふ。ヤラフは追拂ふことで、母熊が次の蕃殖の爲に、昨年の仔を追ひはらふからの名である。信・遠の境には仔熊を三年目まで連れて居る母熊のあることは、三つ熊の條に述べておいた。必ず一年毎に仔を持つものとも決つて居なかつたのであらう。

イコ　日光附近から南會津の山口村などで、當歳の熊の仔のことである。多分はキコで野猪の子をさう呼んだのが元であらう。

ウゲヅキ　二歳の仔熊を、秋田荒瀨のマタギはかう謂ふ。六月頃親からはなれる。

トロクスン　熊狩用語。會津檜枝岐の熊狩では熊の大きさをロクスンで測る。拇指と食指とを一ぱいに張つたのをロクスン、十ロクスンは卽ち六尺あるものゝことである(旅と傳說九卷六號)。

ロクスン　熊など狩の獲物をはかる單位、拇指と食指とを張つて測る。ほゞ六寸にあたる故といふ。十二ロクスンなどいふ語もある(會津檜枝岐)。

イヌグマ　信州上伊那の山村では、熊に二種あり、頸に輪のあるを月の輪熊、無きを犬熊といふが、同種類のものらしい。月輪熊で犬熊をつれて歩いて居るのもある。また「八の字」といはれるのは、八の字形に白毛のあるもの、性質は兩者差がない(山郵二卷一號)。

ノグマ　野熊。因幡の八頭郡の山地で謂ふ語、穴熊には發見者二分、獵師一分、野熊には分前はその反對に一分と二分、之が古くからの不文律だといふ。野熊は穴の外で見つけた熊のことであらう。

スジシ　放れ熊を、南會津の伊北でさう呼ぶ。

ソラグチ　北秋田のマタギの使ふ語。大木の根に熊が入つて住んで居る處をさう云ふ(東奥異聞)。

タカス　大木の朽木の洞に、熊が入つて隱れて居るものを秋田などでさういふ(東奥異聞)。高巢の意かと思はれる。前にあげたソラグチはその一つの場合である。

タカヒグチ　南會津の檜枝岐の獵人は、熊が冬眠のために入り込む大木の空洞の、入口が高い處に在るものを高樋口と謂ふ。ソラグチの條參照。

ノダレ　初雪の來た頃、なほ熊が出動する事が往々ある。是をノダレといふ。ノはノザレの訛かといふ(飛驒の白川村)。

クマノミボシ　穴に入る前、熊がその附近に假寢屋を拵へ、二三日又は旬日休養する。晩秋に熊の歩くのを見るのは、多くはこの身ぼし熊である(山鄕風物誌)。

ツチミボシ　熊が樹上に寢所を作ることを、北蒲原の赤谷あたりの獵師は、之を身乾しと謂ひ地面に柴などを集めてつくつた休み場を土身乾しといつて居る。

ケボシ　熊は秋初雪の頃、穴に入る前に大木などの上にあがり、毛を乾す習性がある。信州下高井郡などでは之をケボシと謂ひ、狩人は之を見つける。「雷除け」といふ赤い實をその時に糞止めとしてよく食べるから、それを喰つて居れば近くに居ることが判る。上野利根郡の水上などのケボシはたゞ秋の頃の熊の日向ぼつこだと說いてゐるが、是も同じ生態をいふものと思はれる。

カミゾメ　冬眠の爲に穴にこもる前に熊が柴を咬むこと、美濃揖斐郡德山)。咬み留めの音訛であらう。

クヒドメ　熊の出かぢり・入嚙りを、美濃德山あたりの山地で斯う云ふ。穴にこもつて冬眠する前後に、木を嚙ぢるこの習性がある爲に、却つて狩人にその在處を知られるのである。

イヅミカキ　熊が穴に入る前、木のしばを折あつめてイヅミを作り、二週間ばかりその中に入ることを、秋田の仙北檜木内でイヅミカキといふ。他地方で謂ふカルモに相當する。雪がこれにつもるとまた別に作るといふ。子供を入れるイヅミとよく似てゐるからの命名であらう。

ヤニガタメ　上州・越後の境の山で聽く語。熊が冬眠近くなつて松の樹皮を剝いで食ふことをさう謂ふ。本來は樹脂で身を固めることであつたらうが、現在は熊が冬眠中の糞をためることのやうに解して居る。

デボコリ　熊が三月の末ころ、所謂あたりをつけて徘徊する。デボコリは出て盛んに活躍する意。その間、檜などの皮を剝ぎ、それを敷いて休むのをヒトヨネといふ。このデボコリのあひだ、山毛欅の木に攀ぢ登り、盛んにその若芽を食ひ、往々にして晝寢をしてゐるものといはれる(飛驒の白川村)。

デカヂリ　冬蟄の前と後とに、熊は穴の附近の樹木を咬んで齒の痕をつける習性がある。羽後などでは出かぢり・入りかぢりと謂つて居る。狩人には便利な、熊の爲には不利益な癖であるが、

其理由はまだ不明である。或は配偶者に所在を知らせる爲といふ者もあるが信じ難い。熊は此場合に限らず、時には食用以外にも樹をかぢる。入りかぢりには只齒の型を附けるのみだが、出かぢりには樹の皮を剝ぎ取つたものもあるといふから、或は食物習性から變化して來たものかも知れぬ。

ニバベリ　熊が冬眠から覺めて穴を出て後、再び雪が降つて進退が困難になるや、又もとの穴へ戻つて來ることを、會津檜枝岐ではニバベリと呼んで居る。二番ばいりである。利根郡では反響をニバナリ、二番といふ漢語が日本化して用ゐられて居る。

クマノアタリ　飛驒の山の狩人のいふ語。秋が更けるにつれ、熊は冬山に入る前、檜・ねづなどの幹に爪を以て大きなしるしを附ける。或は齒型をつけてゆくのだともいふ。之を狩人は熊のあたりと呼ぶ。仲間の熊に占有を知らせる目的かと思はれる。春の三月末にもあたりをつけ歩き、稀には八月頃にも附けることがあるといふ(飛驒の白川村。山林五八七號)。狩人はこのあたりを二三ケ所實驗して、熊の行衞や大きさまで推測するのである。陸前でもこの事實を說いて居るがそれをアタリといふか否かは確かでない。熊はかうして穴に入る前、二三日は附近に假寢してから、愈々最後の脫糞をして、冬眠のネヤに入る習性がある。それをこゝでも熊のミボシといふさうである。

ハイアタリ　熊が穴に入る前に其附近の木を嚙み爪跡をつけることを、會津檜枝岐でさう呼び、春穴から出る時のアタリをデアタリと謂ふから、ハイアタリは入リアタリの意である。

ヂゴリ　春さき熊の穴の口の周圍に、三十間ばかりの間、雪が踏み固めてあるのを、信州上伊那の獵人は地凝りと呼んで居る。此邊の熊は四月末頃穴から出て、まはりの雪の上を踏みあるいて足固めをする。その足固めをする前に遁げる熊は、すぐアカギレになつて雪の上に血の痕を遺すから繫ぎやすいが、之に反して地ごりのある穴の熊は、よほど手早く支度をせぬと遁がしてしまふ虞がある(蕗原二卷二號)。下高井郡あたりでは、春の出熊はクロフをみてアタリを搜す。クロフは黑生、栂・樅などの林のこと。また、フキをみる。雪の上に何處からか、黑く埃の線が引かれてゐるのがフキである。犬がこのフキを嗅いで知らせるのである(熊狩雜記)。

ハイロ　上州利根郡片品村附近では、冬眠中の熊の息拔き口をハイロと謂つて居る。積雪面上に仄かに其痕が見出される。

ドウヲヒク　熊が春さき雪の上をあるくあとが、溝のやうに洞をつけるので、因幡若櫻の獵師は之を洞を引くと謂ふ。これを見つけたらもうしめたものだといふさうである。洞は實は宛字で

足跡を謂ふトウのことゝ思はれる。

カノシシ　鹿をカノシシといふ處は東北と九州を始め、かなり弘い。肥後は一圓にさう謂ひ、或は單にシシとも、カンチョ・カンニョウなどゝも呼ぶ(方言五卷三號)。五島でカシシといふのも同語で、助詞を省略したゞけである。入江に面した一方を開いて、舟で待伏して生捕にするといふ(五島民俗圖誌)。沖繩もカノシシの區域で、カウノシシとも謂つてゐる。此獸の肉に一種のカ、卽ち臭氣のある所から出た名らしい。

カハジシ　中國山脈の兩側の山々、みな鹿をさう呼んで居る。藝州の奥では鹿は河に逃げこむからだと說く人もあつた。或はカワジシと書く方が正しいのかも知れぬ。

メガ　攝津の山村では牡鹿のみをシカ、牝鹿はメガといふ。是を總稱する場合にはカノシシ又はカノといふが、播州ではたゞ鹿の意味に、メガといふ語を用ゐる者もあつた。

シシ　野猪の棲息せぬ東北地方は勿論、他にも岡山縣などは鹿・猪ともにシシで、區別をするときは猪はヰノコ、鹿はカハジシ又はメガといふ。長崎縣には牛を田ジシといふ例もある。シシは宍であつて食用獸類の總名であつたことが是でわかる。越中でシシ、陸中の一郡でススといふのは羚羊であつた。越後三面では熊をシシと謂つて居る(山岳二〇卷三號)。

シシジマ　薩摩の東長島村の獅子島は、もと鹿が多かつた故の名である。此地方では鹿をシシと呼んでゐる(出水郡誌)。

ヤマジシ　野猪、沖繩本島の山地でさう謂ふ。鹿も羚羊も此島には居らぬから、是は單にタジシ卽ち牛と區別する爲であつたと思はれる。但し鹿は小さな屬島には少し居り、之をカウノシシと呼んで居る。シシはもと肉用獸の總名、ヰノシシのヰはその鳴聲から出たものと思はれる。從うて山に住む猪に之を用ゐるのは誤りであつたと言へる(海南小記)。

イバイシカ　秋の頃、毛の擦切れた鹿を、大菩薩連嶺などで謂ふ(山岳語彙)。

ヒキシカ　夜の間に麓近くへ出てあさつた鹿の群が、日の出前に山奥へ引揚げるのを、三河の奥でさう謂ふ。入梅あけの綠の野によく見られるが、毛替りがして此頃は殊に美しい(猪鹿狸)。

タカヅワ　大和大臺ヶ原山などで、鹿の一本角のことをいふ。ツワはツワルといふ動詞と同原で、芽生えすること。タカは竹であつて、筍に譬へた名かと思はれる。

ズワイ　鹿の一本角を伊豫の鹿島などでいふ。三年目頃からズワイを出し、又一二年を經て二岐になる。京都附近で是をソロといふ。草書の候の字と似て居るからである。

マナバス　岐の無い角を持つ若鹿を、豐後の山村ではマナバスといふ。日向霧島地方のマノバ

スと何れがより古い形であるかを知らぬ。マナバスの角は落ちぬもの〻如く考へられて居る。少くとも今までこの一本角を拾つた者は無いといふ。阿波の三好郡の山中で、鹿の一年仔をマロバシといふのも、この角の名に出たものであらう。爰では二歳鹿を二ノマタ、三歳鹿を三ノマタ、大鹿をオホザンと呼んでゐることからも推測される。

キノバス　枝角のない稚鹿の稱呼。爪の痕の尖つたものはキノバスであるが、丸みのあるものは老鹿だといふ(山郷風物誌)。信州の話かと思ふ。

ソロッポウ　鹿は生れて四年目まで、四五寸位の角がのびる。之を遠州門桁あたりの獵師はハリ角といふ。六七年經つて七八寸になつた時に、はじめてソロッポウと名づける。それまでは一本角、二又になるのは八九歳、三又角はどうしても十二年はかゝるといふ。鹿のさかるのは八月から九月乃至十月、ソロッポウは十月まで啼く(設樂一四號)。下毛野上の山中ではショロッポを熱さましとして藥用する。

ソウロウヅノ　吉野の奥の入三波あたりでも、若い鹿の角の片方は一本角で、他の一方が岐になつたのをソウロウヅノと謂ふ。艸書の候に似てゐるからである。

ソロ　二歳鹿の角の岐の無いものを、三河の北設樂でもやはりソロまたソロッポウといふ(猪鹿狸)。仆の字形の聯想からの命名である。

スロ　因幡八頭郡の那岐でいふ語。一年兒の雄鹿の角、長さは四五寸なるを謂つてゐる。之も亦、候と似たればいふのであらう。

ナガソロ　若い牡鹿の角のまだ岐れないものを、仙臺地方ではナガソロと謂つてゐた(濱荻)。

ミクサレアガリ　角の三枝になつて居る大きな鹿をさう謂ふ。四岐のをヨクサリノシカとよぶ詞はあるが、未だ獲られないといふ(因幡八頭郡那岐)。

ロクタイジ　日向の鞍岡では、鹿の孕子をさういふのみならず、生れた仔の小さいのをも、さう呼んで居る。鹿胎兒といふ輸入語が、今は意味を離れて用ゐられて居るのである。

ミヅブセ　水伏せである。カジシ卽ち鹿は弱ると谷へ下つてミヅブセをすると、直に元氣になるなど〻、伊豫御槇村などの獵人は語つて居る。

ウイノシシ　野猪を陸中雫石などで斯ういふ。現在はもう居らぬが、昔は此邊にも生息し、山から野原へ田圃をめあてに通りぬけることがま〻有つたといふ(山村民俗誌)。

牛ドモ　母猪に仔猪があまた伴なうて行くものを九州椎葉山で猪伴。それに牡の大猪のついて居るのをツキヰと謂ふ(後狩詞記)。

トモジ　熊野の山中では猪の群をさう謂ふ。多分ヰドモと同じくトモジシといふ語から變化して居るのであらう。以前は二三十頭の伴猪を見かけることも稀でなかつた。

ハア　牝猪を、上伊那の仙丈岳の狩人の語にハアといふ由（山邨二卷一號）。母といふ意味なのかも知れない。

ウナトモ　仔をつれた猪、武藏西多摩の奥でさう呼ぶ。牝が先頭に牡が最後にゆく習性がある。

ヲナド　仙臺あたりでは、以前牝猪のことをヲナドと謂つて居た。これは牙が無いから、怒ると人を嚙むといはれた（濱荻）。

ウナ　牡鹿のことゝいふ（下伊那方言集）。牛ではウノは牝のことをいふのが弘い。

シオヰ　「濱荻」には野猪の牡と註してある。シオヰは男猪で、シは助字であらうか、又はシシノヲといふ心か。牝をばヲナドといひ、牡は牙にて人をすくひ倒し、牝は人を咬むとある（仙臺地方）。

ツキヰ　ヰドモ卽ち仔をつれた牝猪に、なほ牡の巨猪が伴なふものを南九州の山地で附猪といひ、優れた狩人は之を索める。附猪を仕留めると、あとの猪伴は必ず其附近で獲られるからである（山鄕風物誌）。日向の西米良のツキヰは必ずしも猪伴を說かないやうである。

スブヰノコ　當歲の猪のことゝいふ（大隅百引）。

マツクワジシ　野猪の一年仔を、吉野から大臺原山にかけてさう謂ふのは、形や毛の色がマツクワ卽ち甜瓜に似て居るからである。猪は舊の五月に生れ、二年目にならぬと親のやうな毛色にならぬ。ウリンボウの條參照。

ウリンボウ　猪の仔のこと。毛皮に縞があり、形が稍瓜と似てゐる。三河邊でさういふと物類稱呼に出てゐるが、百五十年後の今日も其通りである。

モモゴ　肥前下五島では、野猪に椎兒・栗兒・樫兒・桃兒等の名がある。各々其樹實の熟した頃に身ごもつた仔をいふらしい。桃兒のモモは楊梅（ヤマモモ）のことである。

コンコロコ　猪の仔のことを、伊勢の度會郡でかう云ふ。東國は一般にウリボウと謂ふ。

コブリコ　攝津の能勢地方で、猪の子をコブリコ。三ゾク以下の小猪だとある。同川邊郡多田のあたりでマツカといふのは、眞桑瓜に似てゐるとみての名である。

カタグロ　上伊那仙丈ヶ岳附近の狩人の用語。猪は當歲はウリンボウ、黑白と縱縞が背にとほる。それから大きくなつて、三才位までを肩黑といふ。肩のあたりが黑くなつて來るからの名、

大抵七八貫はある(山村二卷一號)。

ヨツヰ　三才猪をミツヰ、四才猪をヨツヰなどゝ、大隅半島の山々では呼び、それ以上の大猪をヅナシといふ。

ヨントメ　四貫目の猪を因幡でさういふ(八頭郡落折)。もともと重さでなく、代物のことをいふものとすると、四斗目であるかも知れない。

ゴネンゲイ　野猪の最も大きなものゝ異名。「五年かへり」で五歳の意であるといふ(大隅高山)。

ナナヲジシ　尾の長さに據つて猪の大小をはかる詞。阿波の三好郡の山あひでは、尾七寸あるものがナヽヲ猪、目方は三十貫に及ぶといふ。ムヲ猪・イツヲ猪などの名もある。

ロウソク　大きな猪をロウソクといふのは、攝津・河内あたりから紀・和の山々に及んでゐる。これで沓の皮十二枚分取れる故に、六足物といふのである。これより小さいものを五足もの・三足ものなどゝよぶ名もある。何れもヰノグツ(猪皮靴)の取れる數である。仙臺地方でも野猪の大きさを謂ふのに、七足切・六足切などの名があつた。一頭の野猪から猪皮沓が何足分出るといふ心だつたといふ(濱荻)から、もと雪靴などに、南北ともに猪革を用ゐたことがわかる。

オホロクソクモノ　大六足物である。紀州上山路の獵師の口にする詞、猪の最大のもの、つまりロウソクモノより大きなものを謂ふ。ツラヌキを作れる數からきた言葉。南河内の山村で、猪は七足といふが最大であると說いてゐるものに相當する。爰ではこの大きさを鐵砲を以て測るといふ。鐵砲は三尺三寸、頭から尾の根まで、銃身一ぱいあれば五足、三尺五寸で六足、三尺八寸あれば七足採れるといふ(南河内瀧畑左近熊太翁舊事談)。

ゴソクモノ　猪の大きさ、六足に亞ぐものを、南紀山路鄕で斯ういふ。四足ものといふ名目もある。

イタヰ　肥前五島の福江で、野猪の樹脂を身に塗つて固くなつて居るもの。別種に非ず、老猪なるべしといふ(五島民俗圖誌)。猪が鐵砲の彈を受けぬやう、かうするのだといひ、同じ呼名を以てよんでゐる例が總州龜山にもあるのは、遠方の一致といふべく、たゞの偶然ではあるまい。

カガミジシ　肩に鏡の如き型があり、彈丸これに命中するも、些かも應へぬシシありといふ。大隅百引の山民はこれをカガミジシと呼んでゐる。

ミズヰ　野猪には明盲のものが稀にあり、土地によつては之を見ず猪と呼んで居る。彼等は主として夜分に活動する習性を持つてゐるので、斯ういふ視覺の極度に鈍つたものも居たらしい(山鄕風物誌)。

ゴイシ　土佐の西部山地に、普通の猪の外に爪の白い一種の猪があり、之をゴイシといふ。肉硬く味劣るといふ。香美郡物部川の上流でも、是を碁石の猪と謂つて居る。

モグラジシ　またブタジシともいふ。九州椎葉山で野猪の臭氣あつて食用とし難きもの。古語はクサヰ。百頭のうち二三は是である。腹ふくれ、足短く、仰臥させて見ると形やゝ鼹鼠と似て居る故に此名がある（後狩詞記）。隣村西米良では之に似たものをムジナ、食ひにくゝ脂が強いと謂つてゐる。九州では猪をいふムジナの語は未だ聞かぬから、椎葉の例と同じかも知れぬ。

カメ牛　阿波三好郡の山でさう謂ふのは、アイゴジシと同じく、肉の腐つた猪だといふ（民間傳承三卷十二號）。アイゴ猪はワイゴジシの轉訛なるべく、すればカメルも腐ることかも知れぬ。伊豫御槇の山里では、その形並の猪より大きく、二年位で二十貫に達するものをさしてゐる。射とめて刄物を入れたあとから、すぐ腐り出すといひ、爪の薄く長いこと鹿ノシシに似てゐると謂ふ。

ワイゴジシ　阿波那賀川の上流などで、臭猪のこと。ワイゴは腋臭（わきが）の方言で弘く行はれてゐる。

ブンゴジシ　豐後猪は九州南部で廣く用ゐらるる語。薩摩伊佐郡で一種の野猪に此名を付して居る。ヂシシ卽ち土地の產と比べて、肉の味も異なつて居り、住民はすぐにこれを識別するといふ。大隅半島の百引あたりでは細く痩せた赤毛の猪と說いてゐるから、少くとも外から入つて來る猪の食物に不自由してゐるもののことかと　はれる。

シラミジシ　三河の奧で體一面に虱がゐて肉は臭く、食ふに堪へぬものに、この名があつた（猪鹿狸）。

ケカチジシ　楢の實さへならず、蕨の根までも掘り盡すやうなケカヂ卽ち飢饉の年には猪がふえるなどと、陸中九戸の山村ではいふ（山村生活の研究）。恐らく山中でも食物乏しきが爲に姿をあらはすのかと思ふ。

アマス　信州の伊那地方の山々から、關東の北部、會津などにかけて、猪が青草などを積んでその中に眠る處をアマス、常陸ではアマセと謂ふ村もある。上伊那あたりでは、猪が畑を荒したのち、土を掘つた上へ青草をかみ切つて掛け、一寸人目につかぬやうにして眠つてゐることがあるなどといふ。家猪にもこの習性のあることは稍知られてゐる。南會津の川衣では猪の產する所（旅と傳說一一卷二號）、常陸の高岡村では蚊や虻を避けるためと說いて居る。他地方でいふカルモのことである。

カルマ　猪の伏處、南九州の山間でカリマなどともいふ。近畿・四國の山鄕にはまだ古歌にい

ふカルモといふ古語はそのまま遺つてゐる。美濃の奥でいふカムロも明らかにこの訛であつた。下毛の山でイネバ、三河振草でネヤなどいふのも同じく猪の寢たあとであるが、南設樂の一部ではこれを猪がカリに行くといふ。夏から秋の初にかけて、萱場や茱萸・あけび・山葡萄などの茂つた稍々平坦な地を擇んで、地面を長方形に掘り、その中にゴ(落葉)や枯草を敷き、上にはやゝ長い萱の類を橋渡しに蔽ひ、出入は一方の端からする習性がある(猪鹿狸)。それも時として十間四方位にも及ぶのを見かけることがある。人の萬年床を戯れにカルモと謂ふのも、亦この猪の寢た跡からの聯想であつた(紀州上山路)。

カモ　カイマ卽ち猪の床を、日向の椎葉ではカモといふ。猪は此中で仔を育てる。カモを作る笹草は、如何に生茂つた山の中でも、決して一處から取らず、遠方のそちこちから點々と採つて來て形跡を晦まし、仔を育てる場所を知らせぬやうにするといふ(後狩詞記)。

カイマ　猪のカルモ卽ち寢床のことを、九州でも薩摩の出水郡などはR子音を落してカイマと謂ふ。これに仔カイマと雪カイマとの二種がある。前者は四月上旬頃から、小枝や眞萱を短く咬切つたものを、三尺ばかりも厚く積上げ、その下にもぐり込む。下の方には徑二寸長さ四尺もある木の枝を折つて數いて居る。雪カイマは冬中一匹が一カイマに居る。伊佐地方などは是のみをカルマと謂つて居る。カルマの上だけは雪が少いので判るともいふ。

シシノヒガンバラ　猪は春の彼岸頃にさかりがつき、梅雨頃に生む。これを伊豫御槇村あたりではさう謂ふ。仔は同十月頃には一貫五百匁、年末には三貫目、滿三歳で十貫以上、五年たつと二十貫になる。稀には冬腹ごもりしてゐるのが見られる。

キノシシガミ　肥前の下五島で、物を輪切りに嚙みきることを猪咬みといふ。猪は山の芋又は椎の實を好んで食ふ。外の生類ならば縱に咬み割る所を、猪のみは横にぶつりと食切つて居るので其の所爲だといふことがわかる。

ハコヲサス　猪などが雪の上へ深く通過の跡をつけること、之を下伊那の山地で斯ういふ。

ホラカク　夜陰山腹などの濕地に來り、猪がその泥水中に轉々して、泥を全身に塗ることを、伊勢一志郡の奥でさう呼ぶ。他でいふニタウチのことである。これを重ねる事によつて猪の皮は追矢でなくては徹らぬといふ。

ニタズリ　舊八月の末から十月の中旬まで、月明などの夜、猪が山中のニタ卽ち濕地に來つて身體をころばして泥をぬるわざを、薩摩の伊佐郡などの山里でニタズリと謂つて居る。ニタマチといふ獵法は、この習性を狙つて宵に行はれる。

ヌタバ　猪の習性として、水の湧き出すやうな處で泥中に轉がり、松の木などの根元へ身體をこすり附ける。九州以外では之をヌタ打、その場所をヌタバ、山中の地名としても各地に多い。丹波志には鹿の大ヌタ場の記事が幾つも見え、伊豫・土佐等ではヌタといふ村名・耕地名の、以前は猪のヌタ場であつたといふことが知られて居る。東京の近くでも石老山や丹澤山には、多くのヌタ場といふ地名は在るが、武藏野の大岱（オホヌタ）や甲州街道の黑野田の如く、土地でも既にその歷史を忘れてしまつた例も多い。豆州賀茂郡大川の奴太山などは、山の形が波浪に似て居るからなどと說いてゐる（伊豆志）が、波をノタと謂ふ方言のあることは事實なれど、山が波浪に似て居るのは當り前で、わざ〳〵地名にするほど珍しい事實でも無い。尙ノタとヌタとは殆ど區別なく使はれて居る。だから芝居などで斬られた役者のノタウチ廻るなどといふノタウチも、この猪のヌタウチの所作からの思ひつきであつた。注意すべきことは、以前、三河の北設樂などの山村で、ヌタバにきて居るものは神の化身と考へられた事から、ヌタ場の猪を打つなといふ信仰のあつた事である（旅と傳說一卷一二號）。これは一つ木の猿を打つなと云ひ、朝山に兎を擊つなどといふ如きであつたと思はれる。

カセギバ　猪のヌタ打ち場處を、長州豐浦郡などでさう謂ふ。

スリキ　野猪がヌタをかいて後、身をこすりつける木。樅・松・栂など樹脂の出る木が多い。防蟲の爲に脂をぬるといふ。だから木には猪の毛が附着し、牙のあとが殘り、若くは樹皮の剝げてゐることがある。彈を除ける爲ともいふが信ぜられぬ。また牙を研ぐために木を傷けたものを、トギ木といふ。これには楢などのやうな堅い木が多い（信州下伊那郡遠山）。

アヲシシ　アヲともいふ。東北六縣は一般に羚羊（かもしか）を斯く謂ふ。他でニク・クラシシ・イハシシ・イハトリといふものである（みかべのよろひ）。弘く禁獵の獸であるが、普通のシシ即ち鹿に比べると、著しく毛の色が蒼い。甲州の西山などでもアヲシカといふ。

カベシシ　飛驒で「かもしし」を方言カベシシ又はクラシシでもとほる。カベもクラも共に岩壁を意味する。此獸の生態に因んだ名である（飛驒の白川村）。紀州あたりでもクラシシといふ古語がまだ遺つて居る。

イハシカ　「かもしか」を遠州周智郡の山地でイハシカ又はニクと謂ふ。

ニハシシ　羚羊を越後中蒲原の高原で（高志路一卷一號）。

カベトリ　羚羊の異名（山岳語彙）とあるのみで、詳しくは判らぬ。岩壁などをいふカベに棲む故の名かと思はれる。

ダケニク　木曾駒ケ嶽では羚羊をイハシカと謂ひ、ニクは即ち其一種と考へて居る。岳に棲むものは岳ニクといふ。毛が短く縮れて赭ちやけてゐる。麓の方に居るものは長く美しい毛をして居るといふ（蕗原二卷二號）。

ニク　「かもしか」をニクといふ所は四國の中央山地から紀州・吉野の外、信遠の境などもさうである。この獸は「すげ」を好んで食み、またダラメの根の皮・樫の實・「くろもじ」や楮の葉・蕗薊の葉なども食ふ。其角の本には横皺が多いといひ（本草啓蒙四二）、角を樹に懸けて眠るの說が弘く行はれてゐるが、それほどニクの角は曲つて居らぬ。その皮は修驗者が之を敷物に製し、是だけは穢れが無いものと傳へて居た（近畿遊覽記）。ニクは褥の字音だと說いた人も有るが、是も實際は日本語であつた。或はもとニクノシシと呼んで居たのかも知れぬ。

ニクダナ　羚羊の通路（下伊那方言集）。

ケラナ　「あをしゝ」のことを、羽後阿仁のマタギはかう謂つてゐる（民俗學五卷一二號）が、鳥海山麓のマタギ詞にも熊をクマケラ、「あをしゝ」をアヲケラ、そして爰ではケラは狩の獲物のことであつたから、このケラナとも由緣のある詞である。

コシマケ　青じしの山詞（會津檜枝岐）。

ヲドリジシ　羚羊のことを、越前立石半島の山地でいふ。人が異裝をして踊りつつ近よると、それに見とれて動かずに居るなどといふ口碑がある。

ツムヂ　コシマケ即ち青じしの子、當歲のを、檜枝岐の山ことばでツムヂ、二歲仔をコゾッコなどと呼ぶ（熊狩雜記）。

シシツブラ　羚羊は奧山の岩壁などの天險に棲み、仔は隔年に一頭宛生む。その巢をシシツブラなどと、飛驒の上寶村などではいふ。空砲や犬で驚かすと、シシツブラからとび出る（ひだびと五卷五號）。ツブラは飛越の地で藁製の嬰兒籠の稱呼。

サグリサギ　青じし（羚羊）の胸の毛を、秋田仙北のマタギ達はサグリサギまたはタウエと謂つて居る。サグルは雪などをかきわける意味の方言。この獸が雪煙の中を走ると、どれが雪かアヲかわからぬといふ（旅と傳說一一卷五號）。

ネズボ　シシ（青じし）は寒中澤の中で雪を踏み固め、ネズボと稱する凹みを作り、其中に寢て柴のウラを食つてゐるなどと、羽後仙北の山村では謂ふ（旅と傳說一一卷五號）。

クラヅキ　熊や羚羊が、春さき險しいクラに現れることをさう謂ふ。羚羊が寒中一つ所にともるのをカンダチとマタギたちはいつて居る（羽後仙北郡檜木內）。

ノヅメ　奥飛驒の狩の用語。羚羊は小膽な動物で、犬などが掛ると皆ノヅメにされて了ふ。ノヅメといふのは犬が追つめて動かさぬやうにすること、即ち立つて居る周圍を犬が駈けまはると萎縮して雪の上に地團太を踏むうちに、其處が穴になつて動けなくなる。時としてはそこを生擒にもする（ひだびと五卷五號）。

ヤエンボ　猿をヤエンといふのは普通の忌詞であるが、信州上伊那の川島村では、山の中腹の風のあたらぬ笹原などで、餌の豊富にある澤を控へ、猿がよく足を止める場所を、狩人はヤエンボと名づけて居る（蕗原二卷二號）。

メミ　木曾駒ケ岳附近では、猿の群の頭目をメミと謂ふ。メミは群に一匹あり、高い樹に登つて四方八方を見て居るといふから、物見の意味から出た語であらう。メミがぎやあと啼くと、群の猿は皆逃げる。悪い處にかかると親猿がさきに立つて行き、メミは一番後から逃げる（蕗原二卷二號）。即ち猿の群は親と子だけの集合ではなかつたのである。

ハナザル　猿の群の指導者を、信州上伊那郡でさういふ。木曾駒ケ嶽でメミ、遠山地方ではサキヤマと謂ふ。猿の大群は曾て八十頭を算した例もある。其ハナ猿は巨大なる老猿であつた。猿三貫無しといふ語もあるが、此ハナ猿は四貫目もあつた（蕗原二卷二號）。

ミナリザル　仙臺地方で猿の老いたるもの。毛のびてさき太く實のなりたるが如し云々。その腋の下の皮にて毀の御槍の鞘をつくる（仙臺方言考）とあるが、語義は別にあつたのかと思はれる。

ハナレザル　一つ猿に同じ。仲間の頭であつた猿の、年老いて部下を制する力がなくなると、部下から苛められ、遂に仲間を離れて里近くに棲むもの（野邊地方言集）。

ヒトツザル　孤猿。群に加はらず、いつでも一匹であるいて居る猿を、上伊那の狩人は一つ猿といふ。仙丈ケ岳の狩人の話には、かういふ猿は多く鐵砲の怪我をしてゐる。片輪ものは仲間に入れられぬからだとか、餘り皆から介抱されて堪らなくて逃げるのだともいふ（山村二卷一號）。また群の規則に背いたものが群から追はれるのだともいへば、手負になつた猿が自分から群を脱するのだともいふが、精確なことは未だ判つて居ない。一つ猿は擊ち取つて見ると大概は疵を負つて居るといふ（蕗原二卷二號）。だから指の四本三本といふのも稀ではないらしい。而もかうした孤猿は雄猿だけで、雌猿はたとひ片輪となつても列についてゐるともいはれる（秋田マタギ資料）。曾て群の頭目であつた老猿が、敵と鬪つて敗れ傷くと、忽ち部下から見放されて孤猿になるといふことは他の地方でもいひ（山郷風物誌）、而も必ず群の近くゐるものだと說く者もあるが（美濃揖斐郡德山村）、原因は必ずしも單純ではないやうである。若い猿が偶然の經驗から、群の生活から離れ

た方が有利だといふことを知ることがある。仲間と爭奪をせぬ故に食物は豊かで、一つ猿は皆よく肥えて居る。其代りには屢々食物に夢中になり、警戒する者が無いのでよく擊たれると黑部の谷の人々は謂つて居る。

イツピキモノ　必ずしも猿に限らぬが、一匹猿をさすことも多い。一匹ものは、仲間からはちぶされたのだから意地がわるいなどと說くものもある（近江東小椋）。

イツピキザル　孤猿。藝州中野の山邨では、これがあらはれると、何か變事があるとて恐れる傾きがある。

ニユウドウ　猿の社會は比較的薄情である。少し意地の惡い奴とか、怪我をした雄などを仲間はづれにする。仙台地方や飛驒の上實の高原では、之をニユウドウと謂つて居る。孤猿である。雌であれば負うたり抱いたりして遁げるさうである（ひだびと五卷五號）。熊の場合はこれとは反對だとも聞いてゐる。

ヤマノイヌ　三河北設樂郡の神田では、山の犬は狼ではない。狼は海邊のものだと謂つてゐる。

シバムグリ　狼は黑いのが當りまへであるが、シバムグリと謂つて、毛色の胡麻なのがある。これはとりわけ性が惡い（二溪苑、三）。

カシカメ　狼の方言（石見波根東村）。起りを知りたいものである。ハシカオホカミといふ語が藝州の山地にもあるから、關係ある語かも知れぬ。

ハシカオホカミ　狼には二種あるといふ。一つはオクレオーカメ、他はハシカオホカメで、こればかりは人を害する。馬肉や人の燒けさしを食べた狼がなるといふ。送り狼の方は尾いて來ても人を害はず、むしろ保護をする。そして足を洗つて流す水音を聞いて歸つて行くなどと云ふ（安藝中野村）。

イヌオトシ　信州下伊那の大河原などで、山中で發見する狼の食ひあましの鹿の肉をさういふ。是を採つて來るのは必ず鹽を枡に入れて、其代りに置いて來なければならぬといふ。鹽を置かずして持つて還り、夜一夜狼に吠えられたといふ類の話が多く殘つて居る（鄕土風景昭和七年七月）。南佐久郡ではその食ひ殘しを少し遺しておけばあたをせぬと謂つて居る（南佐久郡口碑）。關東などの深山の村あたりでもよく似た話を耳にするやうである。

オホカメオトシ　山中に在る狼のくひ殘しを大和の奥でさういふ（宇陀郡曾爾村）。

ソマイヌ　陸中では、人を箒で叩くと山に行つた時、ソマ犬に追ひかけられるといふ土地があ

る。野獸性を帶びた野良犬だといふ(九戸郡誌)。思ふにソマは甕馬の方言、それを食とする犬であらう。

ヤセ　南津輕の山言葉で狼のことである。痩せ犬の意味かも知れぬ。此邊の山中では、普通ヤの音を忌み、屋根をトネ、小屋をスギガなどと謂ふのであるが、獨り狼のみにヤセの語を嫌はなかつたのは不審である。

カツチベ　狐は愈々窮すると、カツチ屁といふ非常に臭い屁を放す。是には獵犬も辟易するので狐を捕ふることはむつかしいといふ(長門豐浦郡)。飛驒では鼬の最後屁、又是に劣らぬ臭いやつをカツチベと稱する(北飛驒の方言)。

ノリハゲ　狸のハシル頃(遊牝時)その牝の肩や脾腹のあたりの毛が薄くなつて居るのを、薩摩の伊佐・出水二郡などでさう謂ふ。狸の子を產むのは四月末から五月上旬である。

ハチムジナ　狸をハチムジナといふ處は中部山岳地帶に多い。奥飛驒では猯(あなぐま)にはないが、狸(むじな)の胸部には白い毛があつて腹を割いて貼つた皮を見ると、その形が八の字型に浮いてゐるから八ムジナとも謂つてゐる(ひだびと五卷六號)。飛驒では狸とむじなとは同じもののやうである。大正年間、四國あたりで起つた狩獵法の問題も狸と狢との同異にあつたことを思ふに、この區別は各地區々のやうである。越中のハチムジは穴熊のことをいふ(富山營林署報)のも、飛驒とは既に同名乍ら物は異つてゐる例かと思はれる。美濃揖斐郡の山中では、狸の背には白い八字型の毛があるから、狸をハチモジといふと說き、毛皮として珍重するのみならず、これを用ゐた鞴を最良のものと考へてゐる。遠州門桁あたりの狩人は、この八の字は狸が古くなればなるほど明瞭に現れるといひ(設樂一四號)、或は頭にこの八の字が現れてゐるといふ土地もある(伊勢飯南郡)。思ふに狸をハチムジといふのは八文字の意ではなく、このムジはムジナの下略であらう。さうよぶことによつて「むじな」との區別もつけられたのであらう。

ジフジムジ　上州赤城根ではムジナに二種あつて、サヽムジといふのは狸のことであるが、本ムジは十字ムジとも謂つて背中に十文字があるといふ。印旛沼のほとりで、狸には八文字が現れるが、「むじな」には黑い十字形の背かたがあるから、一名を十文字狸ともいふ(とほつひと六卷二號)のをみれば、關東は、ほゞ一致するらしいが、中部地方の例とは少くもあべこべになつてゐるやうに思はれる。ハチムジナの條參照。

トンチボウ　狢を弘く佐渡の島ではトンチボウといふが、土地によつては狢の小さいものゝことゝ謂つて居る(佐渡昔話集)。小さいといふ意味はやゝ不明であるが、二種あるといふのであらう

か。尠くともこれが靈物とみられたことは事實で、阿波の狸の如く、多くの話がこの島の南北に傳はり、鷲崎では山の神のことをイタヾキサンともまたトンチボウともいひ、之を稍々畏敬した痕跡はまだ所々に遺つてゐるやうである。

バンブク　文字には萬福など丶書いて本狢のことをさういふのは、信州小谷などの附近である。だから玆ではたゞ狢といへば狸のことだといふ。バンブクの毛は白く、腹に毛の無いものは能く化けるといひ、趾は猫に似て四ツ豆、毛は長い。シクマとテンマメとの二種は毛おぞく、尾も短いなど丶謂ふ(小谷口碑集。信濃教育四三四號)。狸の文福茶釜の話と何か關係があるかも知れない。

ダンザ　薩摩の知覽あたりの方言では、狸をダンザと呼んで居る。不思議にも佐渡の狢の化けた二つ岩團三郎や鬼王團三郎など丶、その名だけは似通つてゐる。

コケ　狸を越中下新川郡あたりでさう呼ぶ。

マメダヌキ　狸より少し小さいものをさう呼ぶ處がある。小さいからの豆かも知れぬが、或は「まみ」といふ古語の結合したものかも知れぬ。灘の酒造地には、何處の藏にも一匹か二匹これが住んでゐないと好い酒が出來ぬといはれて居た。惡戯や物眞似もする外に、折々は人にも憑くことがあつた(旅と傳說三卷四號)。

ノイ　四國の西部でいふ獸名。南宇和の目黑では狸と似てゐて狸よりも値が廉いといひ、幡多郡の十川などでは「なまけ者」をノイと謂つてゐる。

クマダヌキ　阿波の木頭、土佐の東部の山中で耳にする方言、穴熊のことだといふ。是に對してただの狸をクソダヌキと呼ぶ。

ツチカイ　獾(あなぐま)のことを、熊野でさう謂ふ。土掻きの意らしいといふ。又メダヌキともノーボーとも呼んで居る(鄕土研究一卷六號)。

セイ　熊野の山中秋津などで、獾即ちメダヌキ又はツチカヒといふ獸をセイと謂ふ。少女の姿に化けて來て、山小屋の男を挑むなどと傳へられて居る(鄕土研究一卷六號)。

クサイ　貉のことであるといひ、又猯に似た獸ともいふが、見ないから異同を知らぬ。奥州殊に舊南部領では、狐狸同樣に人を騙かし又人に憑くといふ。其肉は臭くて食はれぬが火傷の藥になる(人類學雜誌一八六號、野邊地方言集)。

テンマル　「てん」(黃鼬)の方言(上州北甘樂郡)。

テンカラ　南津輕のマタギは、貂のことをテンカラと謂つて居る。是も或は山言葉かも知れ

ぬ。日向椎葉山の狩人の唱へ言にもテンカライヌといふ語があつた（後狩詞記）が、其意味は詳かでない。

テンカベ　溪間の石の穴などに住む小獸の名。岩手山下では之を捕れば金になるので酒を買ふことになつて居る（山の生活）。貂の一種らしい。

サンタチ　「いたち」の年老いたものを、南河内の瀧畑ではテンコワ、更に年をとるとサンタチといふ。山獺をおぼえたものであらう。

フチカリ　またはヘコ。會津檜枝岐の山言葉で貂のことを斯う謂ふ。貂は雪崩などで變死した無縁の怨靈の、姿をかへて來るものとして尤も怖れられてゐる。

トマス　鼬をトマスといふ地方は多い。阿波の祖谷山ではトマコ、薩摩ではトマイ、又トマといふ地方もある。大隅半島では鼬はトマスであるが、單にトマと謂へば「むさゝび」の事であつた。トマスとトマ、この二語はもと同じかも知れぬ。因幡の佐治谷などに於ては、トマスは山の神様に連れられて出雲へ酒造りにゆくので、十月初の亥子から二の亥子までは居らぬといふ口碑がある。但しトマスは牡鼬だけをいふのだと謂つて居る。

ケス　鼬の忌詞、またズイトウクグリとも呼ぶ（安藝中野村）。

ツユハミ　三河北部の山村で仔兎の稱呼。振草村などでは、田植のあとの頃、之をとつて盥の下に隱しておいても、月光がさすと逃げて了ふなどゝいひ、何か月と兎との因縁を想像してゐるらしい。

ソマヲシキ　豊後では鼲鼠（むさゝび）を杣折敷、又は單にヲシキとも謂ふ。ヲシキは今いふ膳のことで、山中で木取をしたまゝの粗材が杣ヲシキである。此獸は飛ぶ形が四角だから、略形が似て居る。筑後八女郡や石州鹿足郡などの奥で、これをソバヲシキといふのはわづかな轉訛であると思ふが、萬一このソバが斜めの意ならば、またその飛ぶ容子を斜めにした折敷にたとへたのかも知れぬ。ソバ膳といふ語も別にあるのである。

スズガネ　岡山縣の一部で栗鼠（きねずみ）のこと。

ノザサ　「むさゝび」のことを、土佐の幡多郡の山村などでノザサと謂ふ。狩に出る朝此獸を見、又は鳥などを拾ふと、其日は獲物が無いといふ。

モザサ　木鼠ともいふ由であるが、伊豫の南宇和の一部で、「いたち」の子のやうな形をしてゐるもの、「りす」かとも說いてゐる。「むさゝび」の語音にも似てゐる上に、土佐の西部で「むさゝび」をノザサといふのと近いから、或は同じものかも知れない。

ホエワタシ　鳥が木片を集めて巣を營むこと（北飛騨方言集）。

ヅスクロ　鳥が病氣の爲にふくれ上ること（大隅高山）。動詞であるといふが、言葉の起りはまだ判らない。

タカオトシ　鵰の鷹落しと謂ひ、大群で下りて來るのを、薩摩の甑島などでさういふ。

メカリドキ　交尾期をいふ俚言（南大和方言集）。メは牝、カルは追ふことの意であらう。

カマヒドキ　東國ではこの詞はそちこちで採集されてゐる。石城郡では野獸の遊牝期をさういひ、猪のカマヒ時は寒のうちで、六月には仔を生む（民族三卷一號）。棚倉で猫の戀をカモエといふのはその特殊の目に立つ例にすぎなかつた。家畜などにもこれを認めたことは關東北部の山村でもたしかめられた。卽ち下野の野上などではカモフといふ詞が行はれてゐるのである。元來、カマフといふのは女に近よることで、人に就いてもいふことである。

ト　日本の東半分は、山中の獸類の足跡をトヌ又はトウといふ領域である。秋田仙北のマタギ詞にも此語があり、トアドとも謂つてゐる（旅と傳說一一卷五號）。老巧の獵師はこのトをつないで、猪鹿などの類を識別し、その歩いた方角を知るばかりか、その通過の時或はその大きさなどまでを判定するのである。遠州の奥では、鹿は手負ひになるとよく川へ入るといふ。入れば半道でも一里でも河水の中を遡つて遁げる。それはトウを晦ます爲だといふ。大概の犬は、一里もにげられると、後をとめて行くことが出來ず、鹿に遁逸されて了ふ（設樂一四號）。羽後角館附近で、トを兎の足跡と解してゐるのは、特殊の限定であるらしい。

ノウテ　野獸の通つた路、之を十津川あたりの狩人はノウテ、伊勢の奥でノテなどゝ呼ぶ。どんな原生林にも見出されるといふ。

カケリ　シシの毎年たがへず通る道（阿波祖谷山）。

ウヂ　又はウツ。獸の通路である。西日本はほゞ全部、東は三河あたりまできてゐる。獸の名を冠して「鹿のウヂ」といふ詞も、大臺ヶ原山附近にはある。猪も鹿も、ともにこのウヂは常に定まつてゐるので、狩人はその習性を利用して爰に待ちうけるのが常法であつた。罠や陷穽をかけるのもやはりウヂで、セコや犬に追はれても必ずウヂを走るので罠などにもかゝり易い。例のウツ鐵砲は夜陰こゝを通る獸を、仕掛によつて自然に打とめる裝置であつた。安藝の高田郡で山腹の横道をヨコウヅといふのもこのウツから出た名である。

トホリ　伊豆の西濱で猪鹿の通路をいふ（鄕土研究五卷二號）。

二四　獸害除け

ワチ　中部地方の山地一般に、猪害を防ぐ田畑の外圍ひのことであるが、轉じては之を共同にする一部落を謂ひ、又は村の名ともなつて居る。西美濃の平野で、川除けの堤に圍はれた一地域をワヂゥ（輪中）といふのも、元は必ずこの輪地であつたと思ふ。單に垣をワチといふのは（信州下伊那郡）、ワチの原のこゝろを忘れたものであるが、三・遠の地にはまだ近年までこれを用ゐた所は多い。遠州では天然の雜木の上部を切り去り、そのまゝ生垣として所々に杭を打ち、竹・枯木・細丸太などを横たへ、蔓などを以て結ぶ。外側を掘つて土壘を築いておくのが普通で、時には石垣を作つて、外を塹壕のやうにする者もある。この堀をドキボリといひ、昔はこれに陷穴を設けて猪・鹿を捕へたといふ（土の色十二卷三號）。三州あたりの奥では燒畑などに設ける必要多く、二本宛の杭を打ち、それを骨組として横木を互ひちがひに組んだ。燒畑以外の畑には丈夫な杭を隙間なく打つたが、補修した所だけ色の變つたものなど、山のすが畑にあるのが街道から見られたものである（猪・鹿・狸）。

ワチキリ　刄の厚い鎌を宇佐郡あたりで斯ういふ。ワチは多分害獸を防ぐための耕地の圍ひ、之に用ゐたからの名とおぼしい。

キヌガキ　沖縄の國頭山村で、野猪を防ぐ石垣。犬垣のやうに聞えるが猪の垣であらう。但し今日は野猪はヤマンシシ、家猪をばワといひ、キの語は存しない。丹波の何鹿郡の村々には、稲垣といふ苗字の者で、以前の番太であつた者が若干ある。是はこの猪垣の記念に、明治の初年に家の名を斯うきめたのだといふ（民族と歴史四卷一號）。

シシトビ　筑前の殘島でも、元は猪鹿が多く、藩侯の狩場であつた。それが田畠を害するのを防ぐべく、一里に亘つて高さ二間餘の石垣又は切割を設けた。その遺跡が尙殘つて居る。此島では之を猪飛と謂つたさうである（筑豐沿海志）。宇治川にも鹿飛といふ地名があつたやうに記憶する。

シシドテ　この語の用ゐられて居るのは、信州上伊那郡の北部で、主として野猪の里へ出るのを防ぐ爲に、個人有林と區有林との境などに設けた（伊那富郷土二卷四號）。伊豆の田方郡にも同じ目的で設けた土手を、猪土手と謂ふ處がある。

シシガキ　野獸の耕地に入つて來るのを防ぐ裝置である。攝津の能勢の山村では、杭を打込み針金を引張つて作る垣で、之をシシノカケといふ處もあり、又カガリといふ村もある。山城田原

の奥で目撃したものは、木片や枝を打附けて作つてあつた。大分縣國東半島の鹿垣のことは、詳しい記述がある(社會史研究九卷三號)。この語は阿波那賀川の上流などでも耳にするやうである。

シガキガマ　豊後はかなり弘く厚刄の鎌の名として通用してゐる。シガキは猪垣のこと、之に用ゐた鎌と解すれば、ワチキリと同じ鎌かも知れない。

シシモン　讃岐の小豆島の猪垣は土塀又は石を積み繞らしたもので、其出入口がガラガラキドであつた。島では之を猪門と謂つて居る。寛政二年から作り始めたが、明治八年の獸疫に野猪が死に絶え、それからは用のない遺跡となつた(民族三卷一號)。

ガラガラキド　又猪門とも謂ふ。猪垣の處々に設けた通路で、開くと重しの石が鎖を引いて、自動的にしまる戸のことらしい。讃州小豆島などは、寛政二年に村上彦三郎衆力を合せて猪垣を作り、このガラガラ木戸を設けた。明治八年に獸疫流行して猪鹿殆ど斃れ盡し、もはや此垣の入用は無くなつた(小豆郡誌)。

アテ　野猪を防禦し之を捕獲する仕事を、肥前五島の奈留島などでさういふ。裏とか日陰を意味するアテとは別の語らしい。

ヨオヒ　夜、燒畑に猪鹿などのつくのを追ひにゆくこと。山小屋に泊つて大聲で追ひ、又は胴突きとて板を太い木で突き鳴らす(遠州周智郡氣多村)。

タオヒ　山小屋に不寢番をして夜中野獸を逐ふことを、駿河ではタオヒ又はタホイと謂つて居る。猪・鹿をも此地方ではダと謂ふのかと思はれる。

サルオヒトリオヒ　田追ひに使ふ引板のことを謂ふらしい。山田の上に板をつり下げ、木を以てそれを打ちながら、無暗にわめくことをいふ(遠州磐田郡)。猿も以前は山村耕作者の追はねばならぬ害獸であつた。

ヤアヘイ　陸前の山村では、正月十五日早曉の鳥追の際に、亦野獸を追ふ唱へごとがあつた。輪飾りに用ゐた幣紙を集めて采配やうのものを作り、之を長竿につけて屋根に上つて振るといふ(日本奇風俗)。其時唱へる文句に、

ゐのしゝ、かのしゝ
尻もつくら〳〵云々

と言つたのは面白い。ヤアヘイは獸を追ふ聲である。新撰風土記にはヤハイとあり、嬉遊笑覽には、ヤヘヤヘホゥイともある。常陸の鳥追のワアホイも同じである。

シヨリカジメ　燒畑の鳥獸防ぎに、其周りの萱を刈り、大體一尺置き位にその萱を栞つて垣の

如くしたものを、日向の椎葉ではシヲリカジメ又はシデカジメといふ。單にシヲリともいふやうである（後狩詞記）。之に對して木を伐つて垣を作るのをキリカジメ又はキリシメと謂ふのである。是だけの圍障で害鳥獸を防ぎ得と信じたのは呪法である。

ツリ　木刀ほどの木を伐つて一間おき位に畑のまはりに立て、撓めて弓の如くにして隣の木のもとに葛などにて結んだもの、日向の椎葉で之をツリと呼んだ。猪をして穽を想像させたのである。隣の西米良ではツルドメまたはグシと謂つて居る。蓆や古布などを吊つておくといふから、ツリもそれに由る名かも知れない。

ヤキヅリ　またはヤキヅレ。猪害を防ぐ爲に、竹棹のさきを割り、それに髪の毛を燒いて挿みかういふ竹を何本も垣のやうに畑のへりに立てた（美濃揖斐郡德山村）。關東の奥などでこれをカガシと謂ふ例がある。臭みを嗅がせるためである。

ヤエジメ　古くはヤキジメと謂つた（滑稽雜談）。髪の毛を串に挿み火に焦し、山畑の傍に立てゝ獸をいやがらせ去らしめる裝置で、現に日向の山村ではヤエジメの語を用ゐて居る（後狩詞記）。飛驒などでは獸の皮の小片を切つて焦がし用ゐたといふ（飛州志、七）が、勿論一層有効であつたらう。

ヒジメ　ぼろを綯うて火をつけ、猪除けにすることは、以前は山村に弘く行はれたものらしく未だに處々に遺つてゐる。阿波の椿では之をヒジメと呼ぶ。火占めとかくのであらう。椎葉山のヤイシメなどゝ同じく、シメの一種の樣式なのである。

カコ　野猪の害を避ける爲に、ぼろを芯に綯ひ、藁又は麥稈を以て外を包んだ長さ四五尺もあるものを作り、是に點火して長い竹のさきにつるし、田畑の處々に立てゝ置くのを南信州から三河の北境あたりにかけてカコと謂ふ。猪はその煙の臭氣を嫌つて近づかぬのである。近頃は是を又害蟲除けにも利用して居る。山畠などの勞作に小蟲を追ふ爲之を小さく作つて腰に下げるのを、遠州榛原郡でも備後の世羅・比婆の二郡でも、共にカコと謂つて居る。カガシと同樣にカ即ち臭氣から出た名である。

ガリ　信州遠山地方でいふ猪除けの一種。蚊火又はカンコといふものと同じである。乃ちぼろ布を束にして火に燻らせると、猪はその匂ひを惡んでよりつかぬ。之をガリといふ。引板・威鐵砲以前の方法かと思ふ。

クタシ　三・遠の山村地方で山畑の猪害除けに猪の肉を竹筒に入れて腐らし、それを棒のさきに何本も結はへ附けて畑の周りに立てる（民族三卷一號）。臭氣を發して猪をいやがらせるものと解

して居たらしいが、是も燒きかゞしと共に一種の呪法であつたのかも知れぬ。沖繩ではシマクサラシと稱して、村の中で疫靈を追ふ場合にも、是に近い方法を用ゐて居た。

ショウヅ　山畑などで猪を嚇し追ふ爲に設けた一種の水唐臼、これを攝津でさう謂ひ、河內や中國筋・肥前あたりでソウヅといふ。ソウヅの語音から備中國湯川寺の玄賓僧都に附會した說はあるがとるに足らない。地方によつて種々の稱呼がある。

ボットリ　山中の田畑で、鳥獸を嚇しやらふ爲に設けた裝置。水の流れを利用して、時々落ちて大きな音を立てるやうにしたもの。後に其からくりを搗き物にも利用するやうになつたのである。ソウヅ・サコンタロウなどゝいふ人の名のやうな異名のあるのも、本來が案山子の役であつたからかと思ふ。ボットリといふのは遠州・三河、又バッタリ・ドッサリといふ土地もある。

トンキラ　山から流れる水を以て杵の棒を動かし、米を搗かせる裝置を下伊那ではトンキラと謂ふ(山と民俗)。是も音響から出來た語に相違ない。

サコンタロウ　水の流れを利用した米つき臼の裝置を、九州で一般にさういふ。豊後では又サコンタ、中國ではソウヅといふ土地もあるから、何かこの新しい發明方法を、人のやうな名で呼ぶ動機があつたのかも知れぬ。だからサコンタロウが「サコの太郎」の意であることは紛れもない。サコは九州では谷の普通名詞である。

ウサギツヅミ　筑前嘉穗郡その他で、山水を利用した物搗き臼の謂ひ。元は兎を逐ふ鼓だけにしか利用して居なかつたものかも知れない。此技術は全國に行渡つて居るが、名稱のみは最も區區である。

六　狩獵

二五　單純狩獵

カヒクチ　角鷹が兎を捉へた時に、鷹使ひは手早く小刀を出して、兎の前足の肉を切取つて鷹に與へる。之を飼ひ口といふ。古くから知られて居た言葉である。

モロケ　羽後で角鷹の年合ひを呼ぶのに、雛を巣子、二歳を片毛、三歳をモロケと謂つて居た。双毛と書くのであらう。

オキエ　置餌。兎を捕らせる角鷹を飼ひ馴らす方法として、近年まで羽後などに行はれて居た。餌箱を高く擧げ、片手の拳を添へて、ポーポーと呼ぶと、鷹が飛びかへつて其拳に乘る。馴れるに從うて追々に距離を遠くするのである。ポーポーといふ語は、東北では正月に烏を喚んで餅を與へる時にも唱へて居る。

ヤマモチ　日向から肥後の山々へかけて、鳥黐を山もちと謂ふ。黐と餅とは本來一つの語らしい。餅を石の上に塗り付けて置いて、悪い狸を捕つたといふ昔話もある。

トツトリモチ　鳥黐（越前阪井郡）。これを以てみると、「とりもち」がその省略形かとも考へられる。もとは餅でも獲つたことは、陸中などの狼の話などにみえて居る。

ヒヨダモ　隱岐島で鵯を捕る一つの方法にこの名がある。木の枝に黐を塗つたものを高く立てその下にタモ即ち口の大きな底の細い網を受けて置く。鵯は黐にかゝると自分でぶら下つて落ちて遁げる習性が有る。それを利用したものである。此のことは和漢三才圖會にも見えてゐるが、同じ方法は關東にも行はれて居る。鵯は落ちて來ても聲もたてず、身動きもせずに居る。それを安々と拾ひあげるのである。

アナドリ　近年まで薩摩の甑島で行はれて居た鷲の捕獲法。海を渡つて來て疲れて居る鷲を、夕方水邊に待受け、竹の柵を狹めて行き、最後に押詰めて頭をしめて殺す。もとこの羽毛を買ひに來る商人があつた。今は買ひにも來ず、又鳥も少くなつた。

ケラハゴ　螻蛄を餌にして鳥を捕る裝置。關東各地で目擊する。此蟲を活きながら縛し、上に弓形の竹を渡して黐を塗る。生き餌をあさる中、鳥がよくかゝる。ハゴは割竹のことをいふ。又これと全く異つた形で竹の先を幾つかに割つて、其のさきに螻蛄や蛙をつけたのをも、駿河志太

郡あたりではケラハゴと謂ひ、よく百舌などをとつてゐる（旅と傳說九卷四號）。

ハナグリハゴ　冬、鵜を獲るに用ゐる、牛の鼻刳の形をしたわなと說いて居る（岡山方言）が、ワナといふのは誤であらう。多分、竊をつけたものかと思ふ。下總などのケラハゴの類かと考へられる。

ハガ　竊を以て小鳥を捕る機構、卽ち篋のことを越後中蒲原郡でハガといふ（高志路一卷一二號）關東でいふハゴ或はケラハゴのことである。和名抄に波加とあるのがそれであらう。ハガ・ハゴともに、提灯や鳥籠などの細く削つた竹を云ふヒゴと同語である。

サカドリ　沼地から立つ水鳥を、岡又は山の上に待つて居て、柄のある網で伏せて獲る獵法を陸前の登米郡でも、越後の蒲原地方でも（越後野志、一四）共に阪鳥と謂つて居た。夜の引明けと日の暮れ方との二度にとるのである。越前足羽川右岸の鳥越阪などに於ても、古くから阪鳥打ちの獵法があり、其場處を阪場と謂つて居る（福井案內記）。鳥が賢くなり、網も段々進步して來たが、斯ういふ捕り方は二千年來のものであつた。「となみ張る阪手を過ぎ云々」といふ萬葉集の歌もあつて、其網場をサカと謂ふのも古いことらしい。

サカウチ　山の峽に櫓を設け、峽とすれ〳〵に飛來る水鳥を投網にてとる法（越後西蒲原郡峯岡村）。こゝは鎧池に臨む地であるが故に、この獵法は用ゐられ易かつた。卽ち水鳥は沼湖から飛びたつと共に、多くかやうな地形に從つて翔る習性があるのを利用したものであらう。薩摩の藺牟田にも、網を投げる獵法があつたが名は詳かでない。

トヤ　秋の渡り鳥を網で捕る山中の小屋を、どこでも一樣にトヤと謂つてゐるが、下野などの奧では、トヤは山のタア或はタワと謂はれる地形に近く設けられてゐる。網をさうした地物を利して張る必要があつたからである。ともあれ家禽の小屋のトヤと、如何にして一語を以てまかなひ得たかは不審である。

ヒルテン　山の嶺で小鳥を捕るすが絲の網を北國其他でさういふ。もとはテンノアミと謂つて、主として夜分の作業であつた。それが改良せられて日中にも使へる樣になつたので、乃ちヒルテンノアミの略である。京ではカスミといふと、既に百七十年前の物類稱呼にも出て居る。

ツナツカヒ　彌彥山の麓に彌三郎といふ網使ひがゐたとか、或る網使ひが田の中で網をはいで居ると云々などゝ、蒲原夜譚にみえてゐるが、網は網の誤りではなかつたか。鳥網を張り、鳥をとる職人だつたのかも知れない。

タキリ　晩秋の候、霞網で渡り鳥をとる者の用語。囮の鵜の啼かせ方である。クスクスと啼く

と空の鳥の群が下りる、上げといふのはチャッ〳〵と啼いて呼びもどす啼き方、タキリはチルチルチルと啼いて群を網場から離さぬやうにすること、この三つの啼きは必要であるが、クィクイ、チャーチャー、クワクワなどゝいふ地啼きは必要がない（讀賣新聞昭和七・一一・二九）。

スクミブエ　阪越しの鳥を網する際、鳥を竦ませる爲に吹く笛を、若狹などでさう謂ふ。此笛を吹くと同時に棒を投上げる。木曾や日光のは口で聲を出し、竿のさきに白い布をつけて振りまはす。

ヒキオトシ　冬期、小鳥をふせる裝置。笊を棒でさゝへ、其下に餌をまいて、子供などが引伏せる。「板落し」より簡單であるが、人の手が要る（紀伊上山路）。

チンカラ　小鳥を捕へる「おとし」の異名（南大和方言集）。

ヒップセ　信州下伊那郡では、器を伏せて小鳥を捕る方法を引伏せといふ。此邊では多く篩を用ゐる。他で盥を伏せるのと同工異曲である。

ヒッケシ　積雪のとき、板又は蠶籠を立てゝ其下に餌を撒き、それを啄みに來る小鳥を引伏せて捕る方法を謂ふ（信州上田附近方言集）。引覆しである。土地によつて板伏せとも桶伏とも謂つて居る。

コギッチョ　雪の上に鳥をとる爲に篩などを立てるものを、江州高島郡あたりではさう呼んでゐる。一種の引落しであるが、名目ばかりはクビッチョなどからの變化であらう。

ハナヅラ　雀などをとる一種の罠（吉野郡）。牛のハナヅラに形は似て黐を塗るのであらう。

ケカケ　阿蘇山の附近でいふ語。馬の尾で輪を作り、鳥をとる罠とある（肥後方言集）。

ワサ　細い緒の一種の結び方だつたかと思ふが、大隅高山などでは、馬の尾の毛で作つた小鳥罠だけを、今はさう謂つてゐる。

ワンゴ　紀州で小動物を捕へる罠。これも緒の類を輪にしたものであらう。

ウッヅメ　九州でも肥・筑の境あたりでは、鳥を捕る穽をさう呼ぶ。打詰めの意であらう。コブチ參照。

フッカヂキ　小鳥・雉子などを捕る罠の名を羽後仙北地方ではフッカヂキと謂ふ。カヂクは引掛けることらしいが、物をみないので確かなことは判らぬ。

カクリ　土又は叢の中に罠を隱しておく裝置、これを伊豆田方郡や遠州引佐郡などでカクリと謂ふ。ククリ罠・クビシメ罠・兎罠或はヒッコクリなどゝも謂ふ由（旅と傳說九卷四號）。ククリ罠といふ語の變化したものかと考へられる。本來は首を縊る意であらう。

ククリ　伊豫の御槇の山地でいふ罠の一種。ククリは雨降りに用ゐないと、人の香がしてかゝらぬさうである。

ヒツコグシ　罠の一種、針金・繩などを輪狀にして作る（九戸郡誌）。

クグシ　津輕地方で絲で造つた鳥罠をクグシ又はクグスなどゝいふ（東奥日用語辭典、津輕語彙）。一端が罠になり、一方を引けば締まる仕掛になつてゐる。大和の十津川でクグツを首しめ罠と說いてゐるのも同語、恐らくコブチ・クブチなどゝ等しく本來は首打ちの義である。

クミヂ　小鳥を捕る弓形の罠の方言と、羽前最上郡などでいふ（山形縣方言集）から、是もクブチの轉訛であつた。

コブチ　鳥の首打罠を古夫知と謂ふのは古語であるが、飛驒・吉野・阿波などの奥には未だ之が遺つて居る。よほど發音の紛はしい語だつたとみえ、地方的變化が尙多い。紀州南部は一般にゴブチ（南紀土俗資料）、備前邑久郡や備中小田郡はコブツ（邑久郡方言・方言三卷一一號）、作州から因幡の東部ではコボツ。伊勢度會郡でコボチを陷穽と解してゐるのは少し不確かであるが、隣の志州でゴボチを鳥罠と解してゐるのをみれば、陷穽では當らぬことが判る。志摩には捕鼠器をネヅミゴボチとさへ謂つて、そのからくりの幾らかの類似を以てこんな新語を作り出してゐるのかと思ふが、伊賀でコブト、鳥又は鼠を捕ふる竹製の簡單な機械と說いてゐる（阿山郡方言集）のをみると昔ながらの古夫知の用途を擴げたゞけかとも思はれる。土佐でもコボテ、鳥をとる竹作りの什掛とある（土佐方言）。遠州周智郡などの昔話にコゴチと呼んで現れるもの（民俗學五卷八號）にいたつては、その轉訛の甚しさに比較が許されぬ限りは、古語の遺り留まつたものとは思ひ付かぬほどである。三河豐川の流域ではクブテともコブテとも呼んでゐるが、二つの訛音を併用してゐる土地も決して玆ばかりではなく、靜岡縣などでは十幾つかの變化ある古夫知の方言が行はれ、裝置も亦少しづつ變つてゐる。詳細な調査を俟つてなほ多くのかうした例が明かになることゝ思ふ。

ゴンブチ　鳥捕罠の首打ちをかういふ處は東國に多い。東部播州のコンブツを除いては、福島縣の諸郡で多くの變化を示してゐるのが目に立つ。即ち岩瀨郡のゴンブチ、相馬郡のゴンボチ、東白川郡ではゴンブチ罠、或はゴンボチ罠、小鳥主として頰白をとるものと說き（棚倉方言集）、ゴと濁音で發音してゐるのは、もはや原義が首打ちであることを忘れた結果らしい。

クブチ　鳥の首しめ罠をかういふ土地は遠州・三河などを始め、下毛其他かなり弘い。纔かな音變化を以てクブテ・クボテ・クブツチ・クグチ・クグツ・クグスなどゝも謂つて居る。羽前最上郡の山村で、小鳥を獲る弓形の罠をクミヂ（山形縣方言集）といふのもやゝ甚しい一つの例にすぎない。

首打ちが古意であるから、古語の古夫知も古いとはいひ乍ら、やはりこのクブチの方がよく當つてゐるといへる。

クビツチヨ　小鳥罠。草の實或は稻穗などを餌として寄せた小鳥を、二本の彈力ある横棒の間から首を入れて啄ませるうちに、ベロが外れると忽ち首を締めつける仕掛は、ほゞ全國共通のからくりである。三河などではアヲジのやうな小鳥の外、小獸にもこれを應用してゐる（民族一卷一號）が、多くは遠州磐田郡の山村などの如く、鴨・鵜・雀・モンツキなどの如き小禽の捕獲に用ゐてゐる（土の色一二卷三號）。信州は弘くクビツチヨ若くはクブツチヨと謂つてゐる。阿波祖谷の高地でも鳥をさしとる木のばねをクビツチヨ、遠州の一部ではクミツチヨと發音してゐる。何れも首打ちの變化である。

クビチヤマ　田畑の蔭にて鼠を除く一種の竹製の弓仕掛の罠。芋を餌として、鼠が棕梠繩を嚙みきると同時に首を挾まれる機構である。クビチとヤマとの二語の合成語（沖永良部島民具展目錄）。

ギリ　コブチの罠をかける時の裝置。鳥が餌につけた穗を啄むと、此のギリが廻つてタルミが落ち、鳥を伏せるやうになつてゐる（伊勢一志郡）。

チコ　或はベロとも。クブチにつける小木片。鳥が餌を啄む爲に之に觸れると外れて首を締めつけるやうになつて居る（下野野上村）。紀州日高川の上流の村では之をやはりチコ又はチチンと謂つて居る。

ビクタ　鼬を獲るばね仕掛の罠（岩代中ノ川）。

タンテキ　籠に竹などで仕掛けた罠を、遠州の山村ではタンテキとも亦タントキとも謂つて居る。磐田郡あたりでは狐などを捕るといつてゐるが、家で鼠を捕るにも之を用ゐることがあるといふ。三河北設樂でタントキといふのは、竹製のもので小鳥を押へどりにするものだといふが、ほぼ同じものとみられる。手で引くものもあるが、自働式になつてゐるものもある（旅と傳說九卷四號）。多分は仕掛けの彈條が落ちる時の音を擬した名であらう。だからバツタンといふ所もある。

チヤンチユウ　德島縣の一部で、兎・鼬などを捕る一種の罠に斯んな名がある（阿波の言葉）。安藝の山縣郡にも同じ小動物をとる竹製の弓仕掛と說いてゐるのも同じものかと思ふ。もともと音を形容した新語であつて、鼠捕りの方が元であつたらうと思ふ。

シシオス　山中で獸類を陷れて壓殺する裝置をいふオシといふ古語は、まだかなり弘く行はれてゐるが、これも亦その一例で、信州下伊那郡の遠山地方でいふ鹿をとる方法。タツバと思はれる處の近くに、深さ七八尺位の穴をほり、下に尖らせた靑竹を立て、上に二三本の細木を渡し草

を一面に蔽うておく。これに鹿がかゝらずに、人が落ちたといふ話を耳にするが、かゝつたのは神武紀の兄猾ばかりではなかつたのである。

オス　吉野の奥でオシ、甲州ではオッス、信州の一部でオッソ（洲羽言葉）、飛驒ではオセなどゝ謂ふ。木を組み石を重しにして、獸類（稀には鳥類）を壓殺する一種の裝置である。越後南魚沼郡の例は詳しい報告がある。それによると、オスは木材を以て方二尺に長さ十尺ばかりの隧道を作り、上部に岩塊を積重ね、更に葉附の枝や草を掩ひ、內部にばね仕掛を設けて獸類が入つて觸れると、忽ち倒壞して壓倒す仕掛である。狢を主として兎・獺・猿・雉・山鳥などを獲つたといふ（山岳二〇卷二號）。飛驒山の獵法では「一オセに二頭の鹿」などゝいふ詞もあつた。餌には鹿や小鳥・兎にはホヤの實、熊には栗櫧の實、貂には柿などを用ゐた。オスの材には朴の木は用ゐないものとされてゐる。此木の葉は佛の供物を盛るものだから、獵が利かぬといふ（日本民俗七號）。オスは九州などでいふヤマのことである。

オスバ　またはオシバともいふ。オスによつて獵をするに適した場處。常陸北部の山村などでは、山犬卽ち狼がよくオッソォバで獲られた話がある。

コモノオソ　熊オソなどに對して、小獸をとるオソを、會津檜枝岐あたりでさう謂ふ。

オソ　上伊那や南會津あたりでは、木を組み石を重しにして獸類を壓殺する仕掛をさういふ。上伊那のオソには矢來があり、熊などには蜂蜜をぬつておびき寄せてゐる。檜枝岐の熊オソには前カラクリと後カラクリとの二種がある。共に蹴綱をその中に三筋張つて、それでウムシ（重し）を落す仕組となつてゐる。上にはスノコ、下は地面にシシドリと呼ぶ丸太を上下合さるやうに敷き、その間へ熊を壓へるのである。而も熊の金剛力は百五十貫のウムシにかゝつてゐても、人が來たとなると之を押上げるといふ（熊狩雜記）。ブッチの條參照。

オセドリ　奥飛驒でいふ熊を捕る原始的な方法。オセは熊の必ず通る路、卽ち山の背部などに設けられる。片側に柵を打ち、他の片側から斜にその柵に絡んでオセをかけ、此下を通らねばならぬやうに仕掛け、通ると彈條を支へてゐる棒が外れて百餘貫の重みのオセが熊の横背を壓する仕組になつてゐる。生憎まともに背部を押へると、熊はそれをかつぎ除けて遁げる事も稀にはある（飛驒の白川村）。今はこの狩法は禁ぜられたが、以前はヒカリといふ長さ六尺幅四五尺の戸板のやうなものを搏板であみ、オセが落ちるとこのヒカリも落ちる裝置として、遠見に便にしたものである。この狩法が卽ちオセドリであつた（ひだびと五卷四號）。

オシキリ　狼オシ或は狼オトシの別名もある。これはソネ筋のたひらな處に犬ツーメの大きな

のを二本、穴の上にわたして餌をつけておき、狼を捕獲する方法であつた。そこへ女がゆくと、狼がかゝらなくなるといふことも傳へてゐる(安藝山縣郡)。これを以てみるに、オシにも陷穽を伴ふものと伴はぬものとの二樣式があるやうである。

オシ　備中阿哲郡の山地では鼬・狸などをとる穽をオシ、吉野にもこの語はあるが、美濃などのオシは兎や猿などによつて些か作り方に差があるといふ。猿のオシは面積が比較的廣く、木組の上に蓆をおき、之を吊上げて下に餌をまく。和名抄あたりで於之を鼠弩と注してゐるなどは極めて狹い都邑の應用を示したものかと思はれる。オシにも種々の樣式のあつたことは追々明かになつてきたが、上伊那郡の仙丈ケ岳などのオシは幅も長さも一丈ばかりの大きな木の格子を片屋根にしかけ、上へ重しに石や材木を置き、この格子に木の股のつゝかひ棒を張つて之に兎などの餌をつけておくものである。旅人が入つて火を焚かうとしてかゝつた話などがあるが、之に對してヒラは片屋根ではなく、釣天井式に兩端でとめた樣式である(山村二卷一號)。思ふに、この地方のヒラが「北越雪譜」などにいふオシに當るのであらう。牧之翁の記述によれば、熊をとる壓といふ術があり、一名を天井釣ともいふとある。木の枝・藤の蔓などで穴によせ掛けて棚を作り、棚の上に大石を積並べ、横木から下した繩に輪を結ひ、穴に臨ませたものを蹴綱といひ、これに轉機があるといふ。穴がある點が稍々異るだけかと思ふ。

イタオシ　冬期雀などのやうな小禽を捕る爲の罠を、南紀地方・阿波祖谷山などでイタオシといふ。雪深くなるにつれ、里近く草の實などを啄みにくるものが近づくのである。日高川上流あたりのは、餌とした稻穗などを啄むと重い石をのせた板が、落ちて小鳥を押へる裝置となつてゐる。板の代りに箕を用ゐれば生捕りも出來る點が、引落しなどに近い。

クビシメオシ　籔を伐拂つて小路をつけ、オシに餌を繫いで置いて、鳥獸を捕獲するのを首シメオシといふ(北飛騨の方言)。クブチと同じものらしい。

ブツブシ　相州津久井地方で、のし板などの上に石を重しに置き、鳥獸を壓殺する裝置をいふ。語の意味は明かである。たゞオス・オシと同じか否かを知らぬ。

ブツチ　熊オソのウムシ(重し)を支へる二本の丸太を、南會津の檜枝岐で斯ういふ。タガを以てムナギにしかけられる。ムナギはオソマクといふ數本の又柱に支へられ、オソ又をつなぐ丸太をマグサと呼んでゐる。前マグサと後マグサとがあつて、その間を熊が通る時に蹴綱に引懸り、ウムシを落すのである。ウムシは六本又は八本の簀の子の上に岩石をおいたもので、その重量によつて熊が壓殺される仕掛なのである。オソの條參照。

ヒラオトシ　單にヒラとも謂ふ。陸中北部では罠の一種、上から落しおさへるものとある（九戸郡誌）。恐らく上伊那仙丈ケ岳などのオシでいふヒラと同じく、釣天井式の壓殺裝置であらう。

ヒラトリ　越後北魚沼の湯之谷あたりではマキクラに對する語。熊がヒラに遊んでゐるなら簡單にヒラトリが出來るが、熊は中々人の氣配を感ずることが早く、直にヒラの中にあるクラに隱れて了ふ。青木の多いクラや岩クラに隱れてしまふと、槍で體をついて追ひこくらぬと出て來ない場合もあるといふ（熊狩雜記）。ヒラは山腹の方言、さうした地形に於て熊を捕獲することの謂ひがヒラトリである。

ヒラ　獸をとる裝置。他でオスといふものと同じらしい。陸中の各地、駿・遠・甲の諸地方にこの名が聞かれる。岩手山麓の山の人々は、熊の通路にこれを拵へて熊をとるものを熊ヒラと謂ひ、さういふ所をクマノヒラなどゝいふ。柵をめぐらし棚をあげ、其下に餌をおいて誘ふ。棚の上には多量の重しを載せる。「熊の百背負ひ」と謂ひ、人間の百背負ひほどは積まねばならぬといはれ、それでも「熊の一力」で、かゝつても一度はむつくりと立上るものだといふ（山村民俗誌）。また駿河から遠州の東部へかけては、主として小獸をとる板オシがヒラであつた。板ビラ・オチビラ・タンテキ・ヒキビラなどゝもいひ、篩や籠を用ゐるものには別にトーシビラ・籠ビラの名があつた（旅と傳說九卷四號）。これらのヒラが、地形をいふヒラと關係があつたか否かはまだ確められてゐない。

ヤマアグル　日向の奥地、椎葉・米良などの山々でいふ獵法。東國のオスに同じい。丸太を筏狀に組んで吊上げておき、下に餌を撒いて猪がこれを引くと落ちるやうにしてある。それを單にヤマともいひ、上の重しの石をニイシと云ふ。

コヤマ　猪のウヂにかけた罠、日向鞍岡あたりで聽かれる。他處のオシのことである。

ハトヤマ　山鳩をとる罠のこと（日向米良山）。ヤマはオスなどゝ同じく、たゞ小規模な點が、猪をとるものと稍々異るのかと思ふ。

オトシ　妙高山麓、杉の澤あたりで熊を捕る裝置にこの名がある。やはり蹴綱を下げておく（信濃教育四三四號）から、オシと同じものと推察される。

ワイガケ　腋掛けであらう。日向西米良の狩獵語、罠で猪が首から斜に反對側のわき下にかゝること。

ケヅナ　熊のオトシの裝置。山葡萄の蔓でその綱を作るといふ（會津檜枝岐）から、蹴綱なるべく、熊が之を脚にかけて引く仕掛けがその眼目なのである。

カヂワナ　北九州の山村、天瀨の溫泉地方などでいふ。トラバサミに似た鐵製の罠で、鼬・貂・穴ぐま・山鳥なども是で捕る。狸は別にクビククリといふ罠があつてとるといふ。

シシノボウビキ　肥前上五島の有川・太田邊では、野猪の穽にはイスの木の六尺棒に紐を附けたものを彈條とし、之を撓めてわな糸の上に引き、落葉を蔽うて隱しておく。猪はこれに係つて棒を引いて遁げて行くことがある。網を咬み切るだけの智慧はなくて、どこかに絡まれてもがいて居るものだと謂つて、狩人はその跡をつける。

ヤトウ　又はヤト。矢竹のやゝ太いものを三尺程に切揃へ、穗先を鋭く尖らせ、炙つて固めたもの、三河の山村でさう謂ふ。もとは穽の底にさしたもの、今は崖の下にも立てゝ猪をとる。後後は之を山田の畔にもたてゝ猪防ぎ用にもした(猪鹿狸)。ヤトウマツリの條參照。

ヨネラヒ　夜狙ひである。仕掛鐵砲のことを、伊豆の內浦などでさう謂つた。

ウツテツポウ　ウツは山獸の一定の通路、これに仕かける自働式鐵砲を、信・遠の境でウツ鐵砲と謂つて居る。鐵砲の引金にすが糸を結びつけ、之を鹿などのタツバに張つておくのである。

カケデツポウ　猪・狸などをおどろかす爲に、獸路に仕掛けた鐵砲(伊豆賀茂郡)。

ハコデツポウ　猪などが一定の路を通る習性を利して、その途に要して仕掛けた鐵砲を、紀伊上山路などで箱鐵砲といふ。射程內に入るや、引金からひいた絲を蹄にかけるのを俟つもの、他地方の留守鐵砲や仕掛けづゝの如く、よく人がこれにやられる話が尠くない。

オキデツポウ　置鐵砲。自發裝置をして獸を打つ獵法を、相州津久井郡でさういふ。

ルスデツポウ　留守鐵砲。伊豆內浦など、シカケ鐵砲のこと、卽ちヨネラヒのことをさう呼んでゐる。ヨネラヒの條參照。

ハミツケル　野猪の獵法の一つ。甘藷の切屑を地上に撒いて置くと、始は近よらぬが幾夜もつづく裡には終に寄つて食ふ。それを待受けて擊つのである(肥前下五島)。ハミは食物のこと、東北では牛馬飼料に限つてハミといふ語を使つて居る。

セウベンジカ　小便鹿。鹿は小便に和した土を好んで食ふ。この嗜好を利用してその場に待ちとる方法は、孕み鹿に對して尤も有效である。鹽と砂糖とを混へると更によしといふことである(西多摩郡檜原村)。

クハセツケ　大隅高山地方で、猪などを食物を以ておびき寄せて擊つ方法をいふ。海でカヒツケといふものも是と近い。

タメコミ　猪のよろこぶ餌をウツにおき、これに水をかけて凍りつかせ、他方例の仕掛鐵砲に

細繩をつないでおき、猪が餌を引くと發火する裝置にしたもの、之を伊那谷ではタメコミと謂ふ（伊那富鄕土二卷一號・山鄕風物誌）

ハチワリ　信州中部に行はるる獵法の一。猪の好きな油揚などの食物に火藥を包んで通路に置く。之を食ふや否や口が破れる。今は禁ぜられてゐる（伊那富鄕土二卷一號）。

カミツブシ　津久井地方に行はるゝ獵法。雷管を鰯などに卷いて獸類の通路に置き、自ら咬み潰させる仕掛である。長門の豊浦郡で餌の中に爆藥を入れたカミワリといふものや、信州のハチワリなどと同じである。

ドンドラ　据銃の方言（伊豫御槻村）。やはりこれも仕掛鐵砲の類であらう。

マチヤ　薩摩出水郡で、狩人が小屋をかけて鳥を待つ所を待屋と謂ふ。山のタワ又は突角に在る最も高い椎又は樫の木は、その若芽を食ふ青鳩の來て附く所で、その場所も殆ど一定して居る。故にそこを占有して待屋を設けることが、一種の株のやうに考へられてゐる。

ハトドヤ　鳩鳥屋と雉子どやとには重要な慣習上の差別があるなどと、筑後の矢部あたりでは謂ふ。即ち前者は誰でも使用自由で、早く行つた者勝ちであるが、雉子鳥屋は之に反して、作つた者の他は猥りに入ることを許さなかつた。其理由は不明だが、或はその構造の精粗、之を立てる手數の多少に因るのではなかつたらうか。

ホロバ　上總では山鳥が木の上で身ぶるひする所をさう謂ふ。山鳥がホロをかけるところといふ意（君津郡龜山村）。かういふ場所がよく狩人の狙ふところとなるのであらう。

ヨセシバ　石州では鳥狩のとき、身を隱す料にする柴や羊齒の束、柄をつけて狩人が肩に擔いで方々へ持ち歩く（鹿足郡方言集）。

キジガサ　雉子を打ちに行く時かぶる笠。骨組は竹、それに裏白の葉が附けてある（大隅高山地方）。

ヨコツトリ　木曾駒嶽附近の狩人用語。雉子や山鳥は何れも舞ひ立ちを擊つ。是には人により迎へ鳥・追ひ鳥又は横鳥と、それぞれの得意があるが、大略横鳥は一尺ぐらゐさきを狙ひ、迎へ鳥は見えた所をうつといふ（蕗原二卷二號）。

ブヅ　ダンジリ即ち兎を捕るに、ブヅと名づくる二尺内外に切つた柴枝を空中に飛ばし、鷹の羽音に似た音を立てて、これに怖れた兎を雪中につき込まして捕る（淺瀨石川鄕土誌）。この獵法はまだ他の山中でも行はれてゐるやうである。

ボエヤマ　ボエは越後中蒲原あたりでいふ割薪の方言。ボヤと他で謂ふものである。之を投げあ

げて鷹の羽音をさせ、兎を恐れしめて獲るものがボエヤマであつた。今はもう行はれない(方言七卷八號)。

ヨコ　夜山に入つて兎狩をすること(長門豐浦郡)。

アサミ　甲州九一色では夜明けの獵をさう謂ふ(甲斐續昔話集)。

ネヤウチ　兎を狩する方法の一つ。雪が一尺以上も積つた月のよい晩に、雪明りで兎の跡をとめて寢屋を見つけて打つのである(因幡氣高郡)。

ハチガツネラヒ　八月狙ひ。八月はカノシシの遊牝期であるから、鹿笛を以ておびき寄せる。之を豊後の奥でさう呼ぶ(京都郡伊良原村)。

マチウチ　タツメ即ち獸路にあつて、さしかかる猪などを待ちつけて擊つこと(下毛野上)。

シウリヅケ　遠州門桁など、鐵砲の狙ひ方にも前つけ・あとつけなど色々の流儀があるが、また獸の出ると思はれるウツに待構へて狙つてゐるのをシウリヅケと謂ひ、最も初心の獵師のすることゝしてゐる(設樂一四號)。

トメ　雨後に獸の足跡を辿つて狩をすることを、日向西諸縣郡などでトメといふ。トムといふ動詞は古い文學にも見えて居り、必ずしも雨後である事を要しないのであるが、雨後には土も軟く、新しい足跡が紛れなく認められるからのことにすぎない。

ウツマチ　ウツは山獸の一定の通ひ路のこと、ウヂと同語。石見ではここに待受けて獸を打つ獵法をウツ待ちと謂ふ。南紀の上山路のウチマチもこれかと思ふ。獸の驅り立てられて來るのをハシリに隱れて射つこと、若くはその役。之をウチヲマツともいふ。ハシリはウチの同意語である。

ウチマヘ　猪の出るのを待ち打つ所(阿波木頭)。このウチは獸逕であらう。

シカキヤマ　沖縄本島の北部では、猪を擊つ据銃のことをシカキ山と謂ふ(民俗三卷一號)。もとは箭をかけしものの轉用であらう。

シガキ　猪鹿を擊つために竹木にて構へた隱れ所。獸路に作ることもあれば、タマチ・トヤマチにも拵へる。文字には柴垣とも猪垣とも書いてゐるが、兎や雉子などを獲ることは、トヤマチに用ゐる事からも知られる。豊前の奥、伊良原の山村などでは、ウヂから十間位隔てて、一尺四五寸の高さにトシバを立てたものの謂ひで、配置は年長の采配によつて決め、ガキについてゐるものゝ名をおこぶ(叫ぶ)ことをいたく嫌つて居る。大隈の百引あたりの獵師の話に、シガキには木の上に作る棚シガキと地シガキとがあるといふ。そして爰でも日向でも、シガキで獸を待

つことをシガキヲキルと呼んでゐる。シガキにはかく隱蔽物を設けて獵人が身を隱すことが古意であつたと思はれるのに、土佐の檮原　筑後の矢部の奥では鹿或に猪の通路をシガキと解してゐる。結果としては射目はさういふ獸路に作るから同じことにはなるが、轉用とだけはいへると思ふ。長門などでは共同狩獵の配置にも何番のシガキ、誰それのシガキなどといひ（防長史學二卷二號）他地方でいふマブシと同じに說いてゐるのも、やはりシシを射る隱れ場所の意であつた。

コクサマチ　大隅高山などで、野猪が草の新芽を食ひに來るのを待伏せて打つことをいふ。小草待ちであらう。

ニタマチ　またはヌタマチ。山中でニタの存する濕地をニタバといふ。猪がニタツボに入つて泥を身に塗ることをニタズリといひ、それを隱れ待受けて擊つ獵をニタマチといふのである。倭文麻環卷十二には濕田待と書いてニタマチと訓ませて居る。薩摩の伊佐郡などでは、ニタマチの獵は九・十兩月のなかば、月明の宵のうちに之を行ふことになつてゐる。

ヌタウチ　猪は熱いからだである故、犬や人に追蹤されると、水のある所に行つて、寢たり起きたりしてネタをうつ。これをまちうけて擊つわざを三河北設樂などの奥ではヌタウチまたはヌタマチと謂ふ。運步色葉集には莞打といふ字を宛ててゐるのがみられる。

ニタマブリ　陸前の一部では、猪のニタズリは交尾期に殊に多いといふ。ニタは山間の泥濕地。玆に來るのを待ち獲るのがニタマブリである（登米郡米谷）。

イザキ　土佐の西部では、以前狩に用ゐる犬にも種別があつたらしい。文化十四年刊の「幡多方言」には、野猪を狩るに用ゐる犬をイザキ、鹿に用ゐる犬をカオヒといふとある。イザキは射先の意であらうか。

イヌヤマ　犬を使つて獸を捕る獵法、古くからある語。沖繩國頭郡などには今も此狩法が行はれてゐる。

イヌヒキ　沖繩本島の北部の山村に、犬山の獵法が殘つてをり、土地で之をインビチといふのは犬引である。犬は一群に六七匹乃至十匹、めぐり犬と謂つて大將犬と二番犬とが是を導き、獵人は槍を携へて之をつれて行く。季節は苺の實の熟する四五月の頃から夏まで（民族三卷一號）。

ヨイヌヒキ　常陸の多賀郡の山地でいふ語、夜犬引である。夜間、犬をつれて猪をとりにゆくこと。

オヤイヌ　山ヲコシ即ち狩の始めから終りまで、ショーリ入れる犬を、伊豫御槇の山村では親犬といふ。分配には親犬は一人前貰ふ。反之、素人犬は邪魔になるから、連れてゆく人は酒を買

ふ風がある。

イチモク　遠江の山の村で、狩犬の優劣を相するに、犬の顎の下に長く生えて居る毛の數によつて、一本あるを一モク、二本あるを二モク等といふ。五モク以上は駄犬、獵犬に立てることは出來ない。一モクは怜悧でよく働くが、其性人に近く屢々祟ることがあると謂つて嫌はれる（民族三卷一號）。

イチモツ　獵犬を見たてる語の一つ。美濃の德山では顎に毛の一本長く伸びてゐる犬がイチモツ、これは餘り猛々しく、狩犬としてふさはぬ。毛二本の二モツが最も獵にはよい。三モツは糞くらひだと謂ふ。イチモツは逸物の方がもとで出來た詞であらう。

タテニハ　日向の椎葉山などで、獵犬が野猪を包圍して鬪爭することをいふ。その包圍が散開して尙鬪爭を續けるのをホエニハと謂ふ（後狩詞記）。肥前五島の福江島でも、鹿が逐はれて行詰まり、振りかへつて角を伏せ、狗を防がうと身構へることを、鹿がタテルといふ。北足柄地方の狩人の間にもタテナキといふ語がある。卽ち犬が猪を圍んで遁がさぬやうにすることを、猪をタテルといひ、この折の犬の鳴聲をさういふ（民間傳承三卷一一號）。芝居でいふタテも此タテニハなどのタテである。

ヅンボウホリ　藝州山縣郡などでいふ狩法の一。ヅンボウは猪の稱呼、耳が遠いからさう謂ふ由。そのジョウ（穴）へ煙を焚きこんで鋤で叩き殺す事をさう謂ふのである。

サグリアナ　タカス卽ち大木などの洞穴の熊をさぐる方法を、秋田根子あたりのマタギの間でかう謂ふ。前以て根本へ直徑一寸位の穴をあけておき、之から木の棒（カンジョウ）を入れて强く押し、それをスカリ（狩の頭目）が上の穴の口から下る所を狙ふのである。倒れ木の穴の場合にも同じ手段で熊を獲るのを、こゝではアヲリと呼んで居る。

ミアナ　越前・美濃の境の山村など、見穴と謂ふのは熊の籠りをする穴のこと。一番さきに見つけた獵師が毎年これを見廻る。これには權利などは附隨してゐないやうである。どの見穴は誰のものと定まつてゐる越前などの例もあるが、美濃の揖斐郡などでは組內の者のみが知つてゐて他に敎へぬといふ風に秘してゐる見穴とか、或は組合の見穴としてゐるといふ例はあつたやうである。羽州飛島の蛸穴などと事情は似てゐたらしい。しかし相續讓渡の對象であつたか否かは審かでない。

アナジルシ　熊穴を探しあてたとき、それを忘れない爲に、穴へ向いた方の樹の幹の表にケヅリをつけたものを、秋田根子のマタギたちは穴印といふ。組によつて穴印の記號も異つてゐる。

例へば伊之助は「三つきり」といふ風に（秋田マタギ資料）。

マタギジルシ　下北半島の畑などでも熊の穴を發見すると、その附近のなるべく巨きな木に、マタギジルシをつけてくる。家ジルシの上に五本の横線をひいたものがそれである（旅と傳說一一卷一一號）。

アナメキ　奥利根の狩場では、熊のゐる穴は大抵きまつてゐて、附近の木には印がついてゐる。先祖がつけて呉れたものだといふ。大體、秋のアタリの具合で見當をつけておいて行つて見る。熊が中にゐると知ると、その入口に木を立てる。之をアナメキを打つと謂ふ。アナメキをうてば熊は急には飛び出さぬからである（熊狩雜記）。

アナドメ　熊の穴の上から、出ないやうに柴をさしこむことを、仙北檜木内の狩人用語でかう謂ふ。熊はこれを押さずに内へ内へと引込む習性がある。かうして追々と熊自身が穴の入口近くまで柴に押されて出てくると、狙はれるのである。

トメギ　人數の少い場合に熊穴を見つけたとき秋田根子部落では、穴へトメギをあてがひ、人の集まるのを待つことがある。トメ木は元を先にして、枝のついたものを選んで入れる。（秋田マタギ資料）。

ジヤウゴ　越後北魚沼郡の湯之谷の獵師たちのいふ穴の熊を夜中に遁がさぬ法。六尺位の柴木を根切にしてカッパ（伐り口）の方を穴の中に數十本挿しいれ、一本の竿を横たへて柴のウラを縄又はネジ木で之に結びつける。熊は外へ押出すことを知らぬから遁げられないのである（熊狩雜記）。

二六　狩人・狩獵組織

ヤマケイヤク　マタギたちの組織を、羽州北小國でさう謂つてゐる。降雪の直前に宿へ集まつて共同飲食をした者から成立つ。狩のヤマサキも此席で擇ぶ習ひである。大きな村では組に分たれ、小さい村ならこのケイヤクが組となるのである（民間傳承三卷三號）。

アナイレノオミキ　山に行く相談が決し、日を定めて山神の社に參つた後、スカリの家で仲間が會合してオミキアゲをする。之を秋田根子のマタギたちはアナイレノオミキと謂ふ。自分の覺えてゐる穴に熊が入るやうに念ずるから穴入れだと說いて居る（秋田マタギ資料）。

アタマカタメ　山大將の家に集まり支度をきめた後、酒を汲んで山の神をまつること。この場

所を他へうつすことをスノカへと謂つていたく忌むといふ（北蒲原郡赤谷）。狩の集りのことゝ思はれる。漁村などのカコガタメと似てゐる。

タマラヒ　又カリタマラヒ（肥後國誌）。九州で狩集所の意らしい。阿蘇郡誌には馬見原の玉來のことを、玉洗ひと解說してゐるが、たまたまそこに池があつた故の附會であろ。カリアツマリの條參照。

カリアツマリ　またはカラヅマイ、文字には狩集と書く。地名となつて東北にも中部以西の山間にも殘つて居る。以前狩に入る際、人數を整へ部署を定めた場所のことで、そこには山の神の祭なども行はれたらしい。だから何處の例か不確かながら、山鄕風物誌には狩人が狩運を新たにせんとする時は、常綠樹の小枝をそこに敷いておみきを灑ぐとある。九州には之をカリタマラヒとも謂つたから、豊後の玉來（タマライ）なども亦其の故跡の一つと見てよからう。

デシ　三河渥美半島で狩人をさう呼ぶ（猪鹿狸）。

ヤマダチ　「山立は山で果てる」などゝ謂つて、かなり古くから都府文獻に現れたヤマダチは、狂言記などが山賊聟と書いて「やまだちむこ」と訓ませてゐるやうに、山賊と解せられ、辭書も亦これを踏襲して居る。がその謬りであつたらしき事は、近年陸中で發見された東北地方のマタギたちの所藏する卷物の中に、弓箭の譽を以て神を助け、永く狩人の祖となつた万三郎の事蹟を記して、自ら山立由來記と稱してゐる事から推定される。卽ち山立はマタギの舊名であつたのである。この由來談は既に世に紹介してもおいたが（神を助けた話、最近の採集報告書にも、聊かの小異はあるが同系統に屬する山達根本之卷が見えてゐる（秋田マタギ資料）。またこれが東北の諸所に分布してゐることもかなり瞭かになつてきた。近世の文獻には既にこの同系の說話は、都方の貴人の落胤たる猿丸太夫を主人公として、百足と顯れた赤城山の神を退治して日光權現を助けた日光山緣起の繪卷として奧會津の舊家に在つたものを、新篇會津風土記の編者はその卷十に本文だけを採錄してゐる。林道春の二荒山神傳はこれを漢文體を以て書きあらはしたものであつた（羅山文集）。現在の秋田荒瀨などの狩人の社會では、昔から又鬼とのみ自稱したが、山立の語は用ゐなかつたと謂つてゐる。その卷物に據つて、これが近世既に忘れた稱呼である事が證せられる。山伏・野伏などの語とも關係があるべく、また中世語の川立などとその造語法は同じであつた。いま壹岐の島などでいふヤマダチは一種の深山の恠異で、獸に非ず、人間に近きものゝ如く想像せられる（續壹岐島方言集）のは、恐らくヤマダチへの認識の零落がかうなつたのかと思ふ。

ヤマヅツ　獵師を山ヅツと謂ふ。其語義は明かでない。箭先祝には村中の山ヅツを招いて宴を

するといふ(筑後矢部)。山立といふ語と關係があるかも知れない。

マトギ　東北で狩人を謂ふマタギといふ語と、もとは一つであつたと考へられるが、四國だけに遺つてゐるこの語は狩獵のことである。土佐では既に文化十四年の鹿持氏の採集に、幡多郡でシシガリをマトギと謂つた旨見えてゐるが、今も十川あたりでこの語を聽くことが出來る。四國山脈よりの檮原でもマトギは鄉士男子の秋から冬への樂しみの一つと數へられてゐた(村誌)。伊豫の宇和の山地にもまだかなりこの詞は弘く使はれてゐるらしい(旅と傳說八卷一號)。瀨戸內海に面した地方ではもう耳にすることもないが、讃岐あたりでさうした獸類を獲る者をマトゥの者と呼んでゐるのは、或はその遺蘖かも知れない。

マタギ　又鬼。陸中雫石などの經濟史料には、狩と書いてマタギと訓ませてゐる(盛岡鄉土史談會誌、昭十三、三)が、何れも宛字に過ぎない。古くは山立と謂つた。マタギは卽ち古い傳統をもつ東北地方の山間深く棲む狩人の群である。福島・宮城を除いた四縣に多く、特に秋田マタギは有名である。何故彼らをマタギと呼んだかは諸說があつて歸する所を知らぬ。彼等が級(まだ)の皮を剝ぐと僞つて禁制の山に狩をした故に、マダハギの名起るといふ說(十曲湖)は奧州には未だ聞かぬH子音の脫落を承認せねばならぬから、之に從ふ訣にはゆかぬ。また奧民圖彙の如く、マタギが米を跨いで一またぎ二またぎと量つたからといふ說はなほ更にうけひき難い。或はアイヌ語に狩を意味するマタクの語があるからとて、これを彼に歸屬させようとする人もあるか知らぬが、內地にも四國の山嶺の村々にはまだ狩を表したマトギといふ詞もあるから、遽かにさうと斷ずる事も出來ない。また越後赤谷の獵師の山詞ではマタギは人間の總稱、ヒラマタギは女を意味してゐる(山岳、三二卷一號)。彼らの狩の作法は嚴重を極め、通例多くの山詞を秘傳し、冬のあひだ遠方まで雪の山嶺を跋涉して集團狩獵をそのなりはひとしてゐる。その由緖を記した山立由來記は近年そちこちから秘藏を解かれ、之を發表するものも多くなつたのは、一つの衰亡でもあつたかと思はれる。彼らの元祖、万三郎が弓箭の功を以て日光權現を助けまゐらせてより、全國の山々悉くその獵場たるを許されたといふ由來を記した卷物がそれであるが、北秋田の根子のマタギの如きはその遠祖を彥火々出見尊より引くと記してゐる(みかべのよろひ)如く、マタギの文化は山伏などを介して、農民の或るものよりは早く開けてゐたかと想像される。現在の傳承によれば、北秋田マタギにも日光派と高野派の二派があるといひ、またコダマ・アヲバ・シゲノの三流ありといふ村もあり、荒瀨根子のマタギはシゲノ流であるがコダマ流は今はすたれ、それに代つてコダマ鼠があたをする故、山中でこの鼠のはねる音を聞けば必ず歸るといふ信仰も行はれてゐる

る（秋田マタギ資料）。日光派といふのは疑ひもなく山立由來記に基くものであるが、高野派の方は高野開山の知識がその地に靈地をトせんとして入山の折、その地をうしはく丹生明神の子が、黑犬二頭を伴つて導いたといふ功によつて、殺生が佛果を妨げぬ呪を授けられたといふ傳承に基くものかと思ふが、事實に於て高野派と稱するマタギの在ることを耳にしない。たゞ第二種ともいふべきこの由來記は秋田マタギの間にも保存されてゐる（同上書）。そして、所謂マタギではないが、會津越後などの獵人の間には青葉・猿丸などの狩人の名を以て、山神に祝福されたるものと然らざるものとの末裔の存することを說く例は一二に止まらない。ヤマダチの條及びオホナンヂコナンジの條參照。

オマタギ　越後三面のスノ山の組織として、笠や履物の手入れ又は修繕などを受持つものをさう謂つて、マタギの一人をこれにあてる。爰でコマタギといふのも、一番下のマタギで役付以外の全部がさう呼ばれる。席次などは年齡順に依つてゐる。これらを略してオマタ・コマタと謂つて居る（越後三面村布部鄕土誌）。

モヤヒマトギ　土佐濤原で庄屋マトギといふのは、村中總出の狩のことで、ハシリ（獸路）に持場があつて、何れも名があつた。これは獲物を庄屋に遣り、その代り庄屋が酒を出したのであるが、モヤヒマトギは村民のもやひ狩りで、鹿の初矢には角、猪の留矢にはかけ齒などを與へる外は、みな平等に分配するのが作法であつたといふ。但し、左の耳の端又は舌の先を切りとり、木にはさんで山の神に供へることは、庄屋マトギでも忘れることは出來なかつた。

マタギイハヒ　初めて獵に入つた新參者、卽ちコマタギの爲の祝と謂つて、之をからかふ式がある。山小屋の中で行ひ、油餅を作つて山の神に供へる（北蒲原郡赤谷村）。油餅は御幣餅のことである。油味噌を塗つて食ふからの名である。

デアヒマタギ　冬期遠い山々へ狩にゆく旅マタギのことを、羽後の荒瀨でさう呼ぶ。北は津輕から、西のかた越中立山あたりまでの山岳をかけると謂ふ。行く先で熊をとつて賣つたが、四五十年來は賣藥行商にも轉出したらしい。以前、信州松本地方へ秋田からとて熊膽を沽りに來た者があつたが、やはりかういふ人々であつたかも知れない。

レッチュウ　羽後荒瀨のマタギなどの傳說に、狩獵の團體をレッチュウと謂ひ、杉のレッチュウは六人組、兒玉のレッチュウは七人組。七人組の方が女人を助け參らせなかつたので、悉くコダマ鼠と化した。爾來狩には七人組は作らぬなどといふ話がある。連中といふ語の音訛らしいといふ（東奥異聞）。

スカリ　またはシカリといふ、何れが正しきかを知らぬ。アイヌ語のシカルン（學問ある）から出たと說く者もある（方言八卷二號）が、まだ斷定は出來ない。東北地方のマタギの狩獵組の指揮者の稱呼である。東奥異聞には山小屋組（レッチウ）の頭とある。昔はシカリは世襲で、卷狩には特にその指圖に從ふべき規制である。北秋の根子ではその仲間をヒコ（セコ）、シカリはヒコに對して山小屋では上座を占め、爐の鈎はなはシカリの座に向けてはならなかつた（秋田マタギ資料）。現在は必ずしも世襲でなく、村に在つては別家の親爺でも、貧乏人のテデでも、シカリに選ばれると、マタギの仲間では絕對の權力は昔ながらに認められる（秋田民衆新聞昭和九、二ノ一五）所が多いやうである。だから一群のマタギのシカリとなれば、狩獵の技法は勿論、狩に關する作法を精しく辨へてゐなければならなかつた。西津輕の赤石あたりでは、獲つた熊に引導を渡すには、熊の皮を剝いで逆さに着せ直し、一番シカリが皮の耳をもち、二番シカリが尻の方にゐて呪文を唱へるといふが、このやうに二番シカリを設ける土地もある。東北以外ではこの頭目の名を聞かぬが、權力の大きい事は略々似てゐる。だから之に相當するものゝゐない所では、例へば近世に始まつた卷熊の風習をもつ土地などでは、ヨバリテが合圖をしてマチが熊の出るのを待ち、最も熟練したマチの待つてゐる所へ熊を追出すやうにするのである（美濃揖斐郡）。

タカジカリ　會津檜枝岐などの狩小屋の副長の稱呼。火を掌る役であるが、狩のうまくゆかぬ時の祈願には、小屋の者一同が水垢離を執り、タカジカリが大將に代つて特別の幣を切つて、熊を授かるやうに祈る。或は大將がやつて巧くゆかぬ時に賴むともいふ。東北で狩の頭目を謂ふシカリと關係があらう。實際にはタカヂカリと發音してゐるらしい。

メアテ　東北のスカリに相當する山小屋の頭を、羽前小國鄉でメアテ又はヤマサキと謂ふ。山小屋では總てこの者の命に服する習ひである（山村生活の研究）。

オホズクマ　熊狩の師匠を檜枝岐でオホズクマ、指揮者をメダテといふ（熊狩雜記）。メダテは前立の意。狩組の總指揮者をスクマと謂ふ例は、上州戸倉などでも聞かれた。マツリゴトを敎へるやうな故實に精しい者である。南會津の伊北などで太夫と呼ぶものと同じものと考へられる。

オナガ　越後三面の山村などでは、狩場の頭役をオナガといふ。秋田地方などのシカリと似てゐる。老年の者選ばれて是に任じ、一切を支配する。狩場に着くとオナガが二度水垢離を取る。組に屬する十五歲以上の男子がセコとなる。オナガは仲間の意だといふ。茸取り・ぜんまい取りにも其制度が行はれ、是には女子まで平等な分配をする。仕事の共同、食物の共用にもオナガと謂ふ由である。三面には別にフジカといふ語も行はれてをり、狩の頭目をさういふことは或は誤

りかとも謂ふが、詳しくは判らない。

フジカ　マタギの親方を越後三面のスノ山でフジカと謂ふ。フジカが火にあたつてゐると、他の者は背を向け、顏をあはさぬやうにする。また下のものは直接に口を利く事を許されぬ。フジカは過ちの無いやうに氣をつけ、雪崩を法ごとで止め、人の先に進むといふ（越後三面村布部鄕土誌）。

インツキ　勢子を大隅の肝屬郡の山村でさういふ。犬の所有者には犬ダマシとて半人前餘分に遣る（山村生活の研究）。ダマシは分け前をいふ詞。

二七　狩獵用具

タテ　またはタデ。秋田仙北郡でマタギ卽ち獵民が獸を突く武器の謂ひ。槍よりも山刀に近く、常は羚羊などの毛皮で製した鞘を被せ、中子に紐を卷いて携へあるき、使ふに臨んで柄を有合せの木で作つて、其紐を以て結びつけるのだといふ（民族一卷六號）。津輕のマタギも亦このタテを携へてゐる。六尺ばかりの楢の柄で、穗先は片刄の厚い庖丁、長さ七八寸、割柄にせずに柄の一方に刄を結び添へてある。投槍にも使ふ爲に、細緒を穗の根に近く附ける（淺瀨石川鄕土誌）。獵師には忌詞多く殊にやの音を嫌ふ。やりは放すことを意味するに對し、タデルは飼付けることを意味する方言である故に、やりを改めてタテと謂つたのだとの說もあるが、其タテを又忌んで、此地方の山詞ではエグシ（柄串）と呼んで居るのである。タテの語は羽前最上郡などの山村でも耳にするやうで、こゝでは最早忌詞ではなく、里でも口にするらしい。

ナメ　槍の山詞（會津檜枝岐）。

カリコボウ　火繩銃で彈や藥を銃口から押入れる棒を、越後湯之谷でさう呼ぶ。

カリヤス　越後北魚沼の山間での話に、上州の狩人が鐵砲をさう謂つた由（熊狩雜記）。山詞だといふが疑はしい。

クロウチ　豐後の由布地方で、山刀のことをさういふ（鄕土研究一卷五號）。筑後八女郡の山村でも、出刄庖丁の大きいやうなもので、むねの厚い刄物をクロウチと謂ふ。山民は以前は之を腰に佩びてゐたのである。

ヤマカラシ　獵人のもつ山刀を南九州は一圓にヤマカラシと謂ふ。鹿兒島邊ではヤマナギともいふ由（人類學雜誌五七號）。狩の獲物を解くに用ゐるのである。猪の分配には之を尺度とし、其幅

で二轉ばし三轉ばしなどといふことがある（後狩詞記）。

マンツケ　仙北郡の山言葉、山刀のことである。

アンコ　獵人はハヤゴ・カンヤなどの外に、アンコと謂ふ竹製の小箱に灰を入れ、堅炭の火をいけて携帶してゐた。雨の降る場合などの用意だといふ（豐前京都郡伊良原）。行火といふ語も同じかと思ふ。行燈なども共に、もとより携帶用の意があつたらしい。

タニ　駿河安倍郡の山村で、獵人の携帶する楕圓形の焰硝入れの器を謂ふ。

モダマ　火繩銃時代の火藥入れを謂つて居た（大隅高山）。藻玉といふのは海岸に漂着する大形の水草の實のことだから、恐らく最初之を刳つて此容器を製したのであらう。

キリダマ　散彈の謂ひである（南大和方言集）。もとは鉛を切つて使つたのであらう。

キリヤ　阿蘇地方などの昔話に、切箭の話が殘つて居る。昔の狩人は自分で造つた銃丸の他に、別に自分の手でこしらへぬ丸を一つ持つて居て、それを切箭と謂つた。危急の場合に之を籠めて打つ。どこに向けて打放しても命中するといふ（旅と傳說六卷八號）。三河・遠江でいふシャチダマと同系の俗信である。

キリコノタマ　狩人は必ずキリコの玉を持つてゐる。鉛の玉であるといひ、化物に遭つたときの外は打つてはならぬとされてゐる。普通二三發はもつて居り、必ず作るのは山の神の日に限られてゐる（豐後玖珠郡）。

イノチダマ　陸前本吉郡の横山など、狩人は鐵で拵へた命玉といふものを、三つは身を放さぬ習ひであるといふ。爰でも猫と鐵瓶の蓋の話がこの謂はれとして隨伴してゐる（鄉土の傳承、三）。同じ話が西の方越智大島などで、三毛猫の牡と鑵子の蓋となつて行はれてゐる。山中で魔物に會ひ、いくら擊つても中らず、最後に命玉をうつたら怪しい聲をあげてにげた。歸つてみると、自分の家の三毛猫の牡が鑵子の蓋を抱へて死んでゐたといふのである。普通この命玉をうてば、もうそれきり獵師は廢めるものとされてゐる。

アミダダマ　吉野の野迫川の獵師たち、最後の時の爲に特に作られた一つの彈丸をさう謂つてゐるのは、是に南無阿彌陀佛とかいてあるからであつた。同郡の一部ではスクヒダマ、國樣あたりではオサヘダマといふもの、大切な丸とされてゐる。

マモリダマ　羽州由利郡の百宅あたりにもマタギが居るが、爰でも護り玉といふのがあつた。タマはたゞの彈丸であるが、長年身を離さずおくに依つて、自然におこなひがつくのだといふ。山中で不思議に遇つた時、之を口に入れて嚙み、錦のきれに包んでぶつ通す。山中に錦のきれな

どはないから、木の葉を代りにしてもよいと傳へてゐる(民間傳承三卷四號)。

ユルシノタマ　獵人が大事にして居る特別の力ある彈丸。危急存亡の際に用ゐるといふ。金・銀・錫の三種あり、伊勢の神宮で許してもらふと傳へ、又何方を向いて擊つても命中するなどいふ。阿波の劍山麓のニンメンの瀧とかでは、二月の午の日に四國中の獵師が集まり來り、金の許しの玉で的を射る儀式が有るといふ話もあるが、確實な話でも無い。紀伊の上山路の許しの彈には、別に八幡大菩薩といふ名もあつて、尻には八の字が刻んであると謂つた。之を用ゐれば、以後狩もせぬ事になつてゐる。

シャチダマ　獲物に命中した彈丸を拔いて貯へ置き、之を新しい鉛とまぜて次の彈丸を作る風が三河・遠江や大隅などの狩人の間に存する。三・遠で之をシャチダマといひ(旅と傳說四卷一二號)、大隅百引でヤアタリダマと謂ふ。必ず中ると信じられて居る。

コモリダマ　猪の體內に籠つてゐた彈丸を以て新しい彈を造り直したものは、コモリダマ又はヤアタリダマと謂ひ、發てば必ず獲物を得ると傳へてゐる(大隅百引)。

ロウソクダマ　許しの彈とは又別に斯う謂ふのがあるといふ(山鄉風物誌)が、その効驗の何であるかはわからぬ。大猪をロウソクといふのと關係があるかも知れない。せめて行はれる土地なら

と知りたいものである。

タカウソ　猪狩の時に吹く竹の笛を、日向の椎葉などでいふ。ウソは必ずしも鳥を欺き誘ふものとは限らぬのである。猪狩のタカウソはセコの役で、犬を喚びつゝ之を吹いて狩場を驅け步いたのは、獸を驚かして飛出させる爲のやうであつた。

ニチョウガヘ　狩に用ゐる笛の名。大隅の百引では二つの笛を喞へて吹けば、猪の獲れた合圖とされてゐた。

ハト　奄美大島では口笛をハトと謂つてゐるが、ハトと口笛とは全く同じではない。後者は指を口に入れて音を立てるもので、肥後五箇山などでも之を鳩吹くと稱し、しかも狩人を集める合圖として用ゐられて居る。必ず鳩の擬音とは限つてゐないやうである。

オキ　またはオギー。東北で鹿笛のことを謂ひ、オキによつて獵するをオキジシカケルと謂ふ。仙臺の方言集濱荻にはオキは鹿笛又は雉笛のことだとある。鹿だけには限らなかつたのであらう。「招く」を意味するヲキであつたかと思ふ。

オキジシ　オキ卽ち鹿笛を吹いて鹿を誘ふ獵法、東北でさういふ(聽耳草紙)。

ツボヲカケル　笛を吹くことを、三河北設樂郡神田などの狩人の暗號でさう謂ふ。この笛はツ

ツともいはれる。

モゾ　口笛。相州足柄上郡あたりの山村で斯う謂ふ。オソ・ウソなどゝ同じ語であらう。

オソブエ　口笛のことを羽後などでさう謂ふ。河邊郡などでは訛つてホソンビキといふ。信州其他で口笛をいふウソもこのオソと同語。漁師などの之を故なく吹くを忌むことはまた格別で、風を呼ぶものとされてゐる。下伊那などでは、夜分ウソをふくと泥棒がくるといひ、越中などは蛇をよせると信じられてゐた。

オソビキ　口笛をさう謂ひ、ウソ・ウソ笛などゝもいふ。秋田根子のマタギのオソビキは非常の場合に、仲間を呼ぶにも使ふが、これを吹くと熊が一寸立ちとまるので、そこを狙ひうつのだといふ。ウソ吹きの轉訛である。

イソフキ　美濃の德山など、以前は熊の穴を見つけると口笛を吹いた。それを爰ではイソフキと呼んで居る。今は砲彈のケースを吹くといふ。

二八　共同狩獵

シシヤマ　熊野では單に狩獵の意味に此語を使つて居る。

トマリヤマ　山陰の八頭郡の池田あたりで耳にする語。山の中で泊らねばならぬ熊狩のことをトマリヤマ。木を櫓に組み、中で火を焚く。生木でもよく燃えるといふ。日向の西諸縣郡で謂ふトマリヤマは、詞は同じでもこの方は造林人夫が山地の小屋に宿泊就業する造林事務所の稱である(林業辭典)。

ホツポガリ　追狩のこと(日向西米良)。追ふ聲から出た語であらう。

マキグマ　春になつて熊が穴を出てから、數人が組になつて狩すること。但し是は鐵砲が入つてからの獵で、昔は穴の熊だけを捕つたのである(美濃德山村塚)。

アホウマキ　越後北魚沼の湯之谷の獵師たち、此澤に熊が居るだらうといふ見當で山を卷くことをさう謂つてゐる。山を卷いてからクラ探しと云つて、熊の居さうなクラを見てあるく。またヤブサガシもするといふ(熊狩雜記)。

カクラ　古語のカリクラと同じで、狩獵場といふ意味であるやうだ。肥後などでは以前領主の狩場をオカクラといひ、鹿兒島・高知・延岡などの舊制度に鹿倉山・狩倉山・定建鹿倉などゝ見えてゐるのが是である。この語は今も九州一圓に弘く行はれて居る。日向の椎葉山では野猪の潜伏す

る區域(後狩詞記)、豊後・日向の境で山の一區劃、肥後で狩獵の區域と說いてゐるのも歸する所は同じである。球磨郡の奥、神瀬あたりではカクラは一山全體とは限らず、地勢と獸の跡とで決められる。かやうに限定することをカクラヲミワルと謂つて居る。而もその決定はなかなか困難なので、「十評定に一カクラ」の諺すらある。カクラの共同團體をカクラ組と謂ふが、肥後の玉名、豊後の北海部の二郡、ともに村内の小部落をカクラと謂ふ所がある。球磨から兒湯へ越えるあたりにも猪鹿倉といふ部落のあることは稍々知られてゐる。大隅の百引あたりで謂ふカクラがウヤマ(大山)卽ち大木の茂つてゐる所をさすのは、さういふ場處がまた以前はカクラになり勝ちだつたからかと思ふ。

スノヤマ　越後三面の山村ではアヲシシ狩をさう謂ひ、鐵を用ゐる事を禁じ、總べてシシ槍を用ゐた(山岳二〇卷三號)。千縄部落ではアヲシシを獲たときは、鈎になつた柴の小枝を八本折つて其場に立てるのを、シシガキと謂つて居る(越後三面村布部鄕土誌)。飯豊の彼方に越えた羽前置賜の小國鄕などのスノーといふのは稍々異り、獸を解いて各自に分つことを意味してゐるやうである(旅と傳說一二卷五號)。スノーは收納かと思はれる。

トギリ　狩をなさんとする當日、未明一二人を派して猪の出入り先を搜索し復命せしむるのを、九州椎葉山ではトギリと謂ふ(後狩詞記)。筑後の矢部でも早朝猪の跡を見つけに行く役をトギリと稱し、獲物の分配に際しては、射留めた者は膽と頭とを取り、犬には其足を與へ、トギリの役は骨を取ることになつて居た。薩摩などでは正月二日の初狩にも此役があり、以前はサキヤマと同樣に重々しい作法であつたことが想像せられる。因州八頭郡の一部では、卷熊の場合二人で遠まはりに探索に出るものをフミキリと謂つてゐるのも、トもフミも、獸跡のことだから二者同じ意であらう。

ケキリ　信州小谷でいふ狩詞。ミマハリともいふ。羚羊や熊の潛伏して居りさうな場所や、雪の上の足跡からその通つた跡を見屆けることである(信濃敎育四三四號)。

シキリ　曉の山を廻つて、ウヂの足跡をあらためることを、豊後京都郡の奥でさう謂ふ。

イリアト　鹿猪の足跡。セコは必ずこの入リアトに尾いて追ひたてる(肥後五木)。

ワガケ　奥飛驒の熊狩用語。初雪のとき、熊の居所を探索し、足跡などによつて獵區域をきめておく。この熊をトメグマと謂ひ、一二月の雪の落ついた頃狩の組が二三人宛で狩を行ふ。七八割は獲る。この獵法がワガケであつた(山林五八七號)。

イメクバリ　古語のイメは九州と關東とに纔かに殘つてゐる。九州肥後あたりでは狩の射手を

ユメ又はイメと謂ひ、球磨郡の奥ではイメの配置をイメクバリと呼んで居る。狩の組の頭は殆ど定まつてゐるが、一同から推薦された者がこのイメクバリを決める風がある。關東の奥、特に利根郡から南會津の境でいふイメは狩人小屋、若くは山鳥などが未明にホヤの實を啄みに來るのを射とる爲に設けた鳥屋・待場の類をさしてゐる。南會津の水引ではエメトリゴヤとも謂つて居る。疾くこれに注目して、吾妻郡でいふイメをマブシの事、トヤとも謂ふと記したものもみえてゐる(織錦舍隨筆、下)。

ナカイメ　中射目。イメ又はマブシともいふ。狩の射手の隱れて居る處。日向の椎葉ではカクラ卽ち狩場が餘り廣く、獸を追越すことが困難な場合に中射目を置く。最も大切で又射手としては興味の多い地位である(後狩詞記)。

ナカイリ　マブシ以外に、老巧な獵師でカクラの中に入つて射る役、之を日向の西米良の山地でナカイリと謂ふ。狩人の少い時はかういふ事は出來ないのである。

ナカユリ　卷狩場の配置の一。飛驒の白川では谷ヨボリと尾ヨボリとの間に置く部署がナカユリである。鐵砲はもたぬ。他の地方には中ユリをおかぬのを例とする。だから卷場が廣ければカタを二番カタ・三番カタにするのを、白川では中ユリを加へるのである(飛驒の白川村)。カタは恐らく山の肩に近く居る意の部署かとおもふ。

タチバ　追出獵のとき、射主の占むる地位、タツミともいふ(林業辭典)とあつて、何處での稱なるかを知らぬ。東日本などのタツバ・タツメなどゝ關係があらう。

タツマ　狩の擊ち手の配置をさういふ。九州などのマブシに相當する。上伊那仙丈ケ嶽あたりの獵師は、熊の通路を見つけておいて、出てくるのを狙擊することをタツマと謂つて居る。山の形によつてタツマの利く所と利かぬ所とがある。鹿のタツマは澤へ下りる所を狙ふ。爰のタツマは身の前後に石を積み、けどられぬやうにして中に坐つて待つ(山村二卷一號)。關東から中部の山地へかけては、獸路若しくは獸類の出てくるのを待つ場所と解してゐる所が尠くない。信州遠山などでは、タツバは鹿の通路のことゝ稱してゐるが、而もウツ鐵砲などいふ語があつて、もとは獸路をウツと謂つたらしい。下毛野上でも獸路をタツメ、伊豆ではタヅマ、文字には立間と書いてゐるが、宛字に過ぎない。タツマはもと立待の意から出た語ではなかつたかと思ふ。重要な部署であつたから、上州利根郡の奥ではタヅメにはなるべく腕のきく人が就くといひ、タヅメは平常も尊敬をうけ、酒盛などにもまづさゝれるのはこの人であつたと謂つて居る。

マブシ　既に和名抄などにも採られた古い日本語であるが、九州南端の獵夫たちは今も尙用ゐ

て居る。即ち鹿猪の逃げて來るのを待ち受ける一定の場所が間伏である。種子島では之を漁業にも用ゐ、鯖のマブシ・鰤のマブシなどゝ謂つて居る。即ち鯖鰤などの多くゐる所のことである。他處でタツマ・ウチバなどゝ謂ふ語に相當する。越中赤尾谷などのウチバは、熊が尾さきの方に遁げる性質を考へ、そこへ設けて柴の蔭に待受ける。四五間四方の見通しをつけるのが常法である。

シンノヤバ　越後北魚沼郡の湯之谷など、熊を射とめる場所をヤバと謂ひ、シンノヤバと二番ヤバとの二種がある。シンノヤバはまたオホミジョウとも謂はれ、ヤバの中心となる。適當な所を見つけたものは、草木を切拂ひ、急場の使用に適するやうにしておき、そこに山刀な　を置いてくる。こゝの射手がシンの鐵砲、二番ヤバの射手には肩の鐵砲の稱呼がある。配置はミアテの差圖に從ひ、クラから追ひ出した熊を、シンノヤバの方へ追込み、ミアテの合圖で狙撃するのを法とする(熊狩雜記)。

ネヤシコシ　猪の居る所を、攝津の能勢地方ではネヤといふ。勢子がそれを見つけると、空銃を鳴らして人々に告げる。之をネヤ起しと謂ふのである。手の者は此合圖に應じて要所に構へて之を擊つ手配になつて居る。

ムカヒテ　信州小谷あたりの熊狩でいふ語。熊を待場に向けて追上げる場合、何方の尾根へ登つたとの合圖をする役、これが向手である。即ち射手と勢子との連絡をする者で、クラシシのときにもこれがあり、そのわざは面倒なものとされてゐる(信濃教育四三四號)。羽越の山岳でメアテ。ムカダなどゝ謂ふものに相當する。

マツテ　熊狩をする場合、仙北檜木内のマタギどもは、向ふ側の斜面に待ちむかへてゐて合圖をする者を設け、之をマツテと謂ふ(秋田マタギ資料)。卷き手の意でもあらうか。

ムカダ　向座の意とおぼしい。羽前小國郷の長者ケ原など、マキクラ役にムカダ・ブチバウケ・ウケなどがある。ムカダは多くは澤向ひの山腹に在つて指揮者となる。三人のムカダある場合には、本ムカダ、右を二のムカダ、左を三のムカダと謂ふ(旅と傳說一二卷五號)。

タメ　秋田の阿仁マタギの狩獵用語。卷狩をこゝではマキグラといひ、タチミの役以外に、狩場の左右にはタメといふ役が控へ、ホイホイと喚き立て、熊を追ふ。この外、一のブッパ(射手)二のブッパなどが居て、スカリは多くは一のブッパとなる由(方言七卷一號)。

サマテン　共同狩獵の持場の一つで、北秋田郡荒瀬などのマタギ組では、組の頭即ちシカリは弟子の一人をつれてそこに立つて見張りをする。組の者の持場を定め、ヘラを執つて指圖をする

のも、すべてこのサマテンを預るシカリの權限である（隣人の友五號）。

タニヨボリ　熊の卷狩の配置の稱呼、飛驒の白川で謂ふ語。ヨボリは喚くの方言、射ち場と反對の端に在つて、熊の進行を絶えず注視し乍ら、總てを指揮する重要な役目である。槍をもつ事はあるが、銃はもたない（飛驒の白川村）。秋田・會津・奥利根などの卷狩にもこれがあり、呼び名が異るだけである。

ヲヨボリ　奥飛驒の熊の卷狩に用ゐる語、タニヨボリの對語、尾に居て喚く役である。この外谷ヨボリ・中ユリ・カタ・ウチバなどの部署がある。カタは銃をもたず、熊がくれば木片で樹幹を叩き合圖をする役。ウチバは必ず一人、また一人の方が便宜でもあるといふ（飛驒の白川村）。

ホテヨボリ　セコの配置にホテヨボリ・底ヨボリなどがあるらしい（越中赤尾谷）が、詳細不明。

ナリコミ　マキグラ卽ち卷狩の配置の一つ、一番下手から寄せる勢子のことである。山になれない若衆でもよいとしてゐる。上から寄るのがオホビキである（越後赤谷）。

サハナリ　越後北魚沼郡湯之谷で勢子をさういふ。熊を見つけたときも、射損じて熊が下へ逃げるときも、この澤鳴りをするからの名（熊狩雜記）。ナルは叫ぶの忌詞かも知れぬ。「下の澤よりナレ」といふ風に、ナレといふ命令も他にある。

マキコ　卷狩の勢子のことを、越後西頸城の能生谷などの熊狩ではマッコ（卷子）といふ。それと大きな聲でなる。卷子に合圖をする役の者がムカヒデ、之が高い所で見て居て、ピーピーといふ竹のドンドを吹く（高志路五卷二號）。

クラボゴシ　狩の配置を解くこと。これはメアテの號令に依つて行はれる（越後赤谷）。このあたりの狩法は、豫めトギリをせずに卷狩にかゝるから、獲物のない折は、マキグラを解くことをさう謂ふのである。

チョッケイ　大隅の百引あたりには、狩に因む山中の地名が多い。園田ウットヲシ・伊左衞門チョッケイ・彦八ドンイッコロシなどの類であるが、チョッケイは不發のことだといふ。

ヤゴヱ　矢聲と書いてゐる。打放したあとのやうにもいふが、鹿には狙ひを定めてこの聲をかけると、一寸立とまるところを擊つのだともいふ。なるべく短く齒切のよいのをよしとしてゐる。鹿はこれを聞いて、肢をゆるめ聲の方をふりかへる、この呼吸で引金を引いたといふ（猪鹿狸）。一種の掛聲であるが、ヤはその擬音かと考へられる。このヤゴヱであるか否かをまだ確かめないが、越後北蒲原郡の赤谷の獵夫の傳承に、熊をしとめて谷を轉がす際に、タヨタヨと聲を掛けるのがある。危い物に打當らぬ爲といひ、同時に完全に手中に入つてめでたいとの意味も含む

といふのは聊か心もとないが、秋田マタギのショーブと共に注意せられる。

ヤタケビ　遠州奥山地方の獵人、山に行つて獲物を見かけて唱へた呪文。又前サキビとも謂ふ。現在はもう幾つも傳はつて居らぬらしい。水窪の老獵師が知つて居たのは、一つは「けしようのもの」に對する呪文、今一つは鷹を打つときのもので、それは次の如くであつた。

ぢしんこうじん、しよしよくにおいて
むかうはやさき、あくまとまらず

是を掛けて直ぐに飛立つ鷹は、靈物だから打つてはならぬといふ（參遠山村手記）。

ヤツケ　一番矢をしたもの、卽ちハカリをつけた者をさう謂ふ（大隅百引）。

ハカリ　手負ひ鹿の遁げ去るとき、途中の岩や樹に血を引いて行く。是をナマといふ處もあれば、ハカリと謂つて居る土地もある。ハカリの高目に引いたものは疵が淺いので遠くまで遁げのびる。低目のものは重傷だから、必ず附近に隱れて居る（山鄕風物誌）。濃州德山村の櫨原では、熊がこのハカリをつけることをアカヲヒクと謂ひ、他の部落ではアトヲツケルといふ。熊は血をみると弱くなるが、猪はあべこべに強くなるといはれる。ハカリヲツケルと大隅半島の百引などでいふのは、矢應へがあつたときに、血が果して出たか否かを檢べることの謂ひで、血が草につけば獲物の跡を追ふことはもはやたやすいのだと狩人は謂ふ。だから矣ではハカリをつけた者が一番矢の權利を得、その分配には猪・鹿のカブ（頭）をとるのである。

ヤカケ　野猪が箭丸を負うて狂ひ走るのを、石城郡などで斯う謂ふ（民族三卷一號）。大猪がヤカケとなつて田の中に出て來た話も近世の記錄にはみえてゐる（近世畸人傳卷一）。

チカイ　大隅の肝屬郡の山地で、手負ひになつて逃げのびた血の流れる猪、又はテギ網卽ちタモ網に一度かゝり乍ら取逃がした鶉などをもチカイと呼んで居る。

イカケジシ　手負ひ猪の稱呼（日向西米良）。射掛け猪の意であらう。

イヨカ　野猪の手を負ひたるをイヨカといふとある（幡多方言）。

ヤトビ　上州・越後の境の山で聽く語。大きな獸は致命傷たる彈丸を受けても、尙一飛びだけは跳りあがる。是を箭飛びと謂ふのである。たゞ羚羊だけは箭飛びをしない。

シカロ　獸類が手負ひとなり、狂亂することの謂ひで、血が草につけと書いてもゐる（仙台濱荻）が、「果」の意であらうか。仙臺方言考には陸奥日記の註を引いて、疵あさくしてとび行くをいふとある。

テラ　動物の死眞似をいふ狩詞（越中入善）。

サンヅゴエ　熊や羚羊などがマタギの手にかゝり、斷末魔にあげる聲、これを阿仁のマタギ詞でさう謂ふ。熊のは熊のサンヅゴエといひ、必ずあげるものといふ（方言七卷一號）。

ショウブゴエ　陸前の北部など、獲物をとらへることをショウブスルとある（東北方言集）だけではよく判らぬが、秋田根子のマタギの謂ふショウブゴエはかうである。熊を擊つた者は必ずショウブ〳〵と連呼することになつてゐる。但し、仔熊連れの居るうちは此の聲をかけず、全部とつてから斯う聲を掛ける習ひである。檜木内でも獲物が完全に擊留められた瞬間に、ショウブと三度繰返して仲間に知らせる。之は山の神への御禮だから是非とも叫ばねばならぬと謂ふ（秋田マタギ資料）。棋客などの掛聲にもこれはいふやうである。

ヤタテ　またはヤホコ。日向の椎葉山で、猪を獲て之を分配し終つた後、三度發砲して山神に手向ける式をいふ（後狩詞記）。山を越えた西米良のヤタテは、猪をとりたるあと、鐵砲を一發うち放して山の神への御禮とすることで、聊かばかり異同を認められる。七つ山方面では之をシバヲコシといふ由であるが、米良郷のシバヲコシは毎年十二月十九日の八幡社内の狩行事の名であつた。シバヲコシの條參照。

キノコヅキ　長門の豊浦郡の山村では、東京で胴揚げといふ場合をキノコ突きと謂ふ。今でも狩人は猪を仕留めたとき、集つて猪の四足を捉へて胴揚するさうである。猪子突きの語はそれから出て居る。

キノコシバ　猪を射留めた時に、それを包む葉の多い一種の柴、本名を知らぬ（大隅高山）。

ショウガグヒ　長門の俵山などで猪を射とめて擔うて歸る際に、その前足と後足とに突刺す二本の杙。生姜は猪を制する力ありと信じて、之を生姜杙と謂ふのである。阿波劍山麓ではこのクヒをカウガイと謂ふ。

二九　獲物の分配

シシノヤマバラ　昔の協同の狩などで、シシノヤマバラとて、獲つた其場で直に腹をさいて臓腑をとる風が、肥前の嚴木の山地などで行はれた。中味は擊つた者が取得した。他でもこのワタをぬくと山中又は狩宿で一同が煮てくふ例は多い。このシシといふのは鹿も猪もともに指してゐるか否かは明かでない。

ヤマワケ　會津地方での言ひ傳へに、以前は山中へ單獨に出獵した場合でも、附近で銃聲を聞けば其場に赴くのが獵の作法であつた。さうすると山分けといつて、獲物の半分を分けて貰ふことが出來たといふ。半分といふのは無論双方とも一人づゝの時の話であつて、單に斯ういふ者も分割に與り得たことを意味するのであらう。物を兩分することを山分けといふ今日の標準語も、狩の慣行を仲に置いて考へて見なければならぬものゝやうである。

ツナザカヒ　熊を捕り繩をつけぬ裡だつたら、そこへ來合せたものは皆仲間に入れ、一人前を遣る。鐵砲の音を聞いて仲間だぞうと云つて來る者があるといふ。若し綱を掛けた後だつたら、祝酒を飲ませる程度である。だから、しとめたら急いで繩をかけるのである。これは八頭郡の池田あたりの舊慣（因伯民談三卷一號）。

ツマエ　豊後の西南境の山で、狩人が猪を獲たとき、先づ其四肢を束ねることをツマエといふ。他の村の獵場から色々の交渉があつても、ツマエが濟んで居れば優先權は動かぬものとなつて居る。

ワケウチ　狩の分け前を、八頭郡の池田などの獵人はワケウチと謂ふ。一の矢を一番槍と謂ひ、二人前のワケウチをとる習ひである（因伯民談三卷一號）。筑前五箇山のワケウチは、射手は頭を取り、又は四肢の一割を得て、他は仲間に平分する。分け殘つたものは其晩食べてしまふ。

イカリワケ　長門から石州方面にかけて耳にする狩詞。獵の獲物を割いて、獵師仲間に配分することをさう謂ふ。イカリは獵の獲物の分け前（鹿足郡方言集）と考へられてゐる所が多いから、必ずしも猪狩分けとは斷定し得ない。此の配分には定まつた慣例がある。

イカルマヘ　猪などを射とつた時の一人の分け前を、長門の俵山などで斯ういふ。ワケウチとも謂ふ。長州のイカリワケに於ては、猪を打つた當人は一イカル以外に別に其猪の頭と背の皮とを取る。猪の頭は鼻の先から二庖丁の幅だけと決つてゐる。犬にも一イカル又は半イカルを分つ。勿論その飼主の所得である。山陰では海上にもこの詞は行はれ、八束郡の野波の浦では、地引網の網子の分け前は平等であるが、實際は若者が最も働き大事な役を勤めるので、時々網仲間一同から若者連に禮をする、之をノリイカリと謂つてゐる。謝禮も魚、時としては船一ぱい位、之を若者たちが賣つた金で酒盛などをするのである。イカリがまだ猪狩に出たと斷じ得ない所以である。

タマス　九州では東彼杵・出水・肝屬・球磨などの諸郡及び日向は弘く狩の獲物の分け前の一單位をタマスと謂ふ。擊ち手その他、役によつて二タマス以上を取る者もある（後狩詞記）。沖縄では

之をタマシと謂ひ、もとは狩に限らぬ詞であつた。木材を切つたタマ、魂のタマシヒみな岐れ出た詞かと思はれる。

イダマス　狩の射手が取得する取り前を、日向西米良では射ダマスと謂ひ、解體の際のおろし方に依つて一様ではないが、本オロシの場合は肋骨から腹の皮の附いた部分が與へられる。カナ山オロシにはクサワキを別にとらぬしきたりである。

カケダマス　カケは狩の勢子、これがとるタマスを薩摩の出水郡大川内ではカケダマスといひ猪の腰骨を與へるのが習ひである。能ある犬にもカケダマスは給せられる。大隅ではこれを犬ダマシ、カケダマスのことをインツキといふ。この他その役々に應じたタマスを取得する。大川内では射留めた猪を擔いて歸る者にはイネダマスがあり、肝屬郡の山地では解體を受もつ役柄には庖丁ダマシを貰ふ權利があつた。

イヌダマシ　犬だけで猪をとつた時には、犬の主はインダマシとて半人分だけ餘分に、分配に與る風がみられる(大隅百引)。

ハウテウダマス　猪などの解剖にあたつて庖丁を執る人を、肥後神瀬の山村では庖丁ダテと謂ひ、一番矢の者の村から出す習慣である。庖丁ダマスは、この者の取り前であるが、尻尾の部分を菱形にとるのが定法であつた。これを更に二人の助手に分け與へるといふ者もあつたが、それは庖丁ダテの才覺であつたらしい。

イチヤリ　一鑓。初矢に同じである。陸中下閉伊郡田野畑村の獵師たち、シシやアヲシシの一ヤリは角をとる。あとはスケヤリと等分である。爰でいふシシは鹿のこと。初矢に頭をとる風は弘い。

イチノヤ　鹿や羚羊などの狩獵では、弘く最初に矢を中てた者が功勞者とせられ、分配に際しても特別の配分に與るのは、この種のかよわい動物は猪など丶異り、急所を外さぬ限り初矢で仆れることが多いからである。羽後の檜木内のマタギたちは、一の矢の者のとる部分をアヲシシの片足とし、西津輕郡の赤石あたりの熊狩では、熊の額の皮を以てこれにあてた。この熊の面の皮を貰つた者は煙管筒などに作つて提げ、誇とする風がある。豊前の伊良原の山々では、一の矢を一番と謂ひ、この者には鹿の皮と骨とを與へ、他の者は肉をわつぷするのを慣例とした。犬は茲でも一人前の配付をうけた。

イチバンヤ　狩の獵物の分配法は村によつて少し宛異る。村々のモヤヒ狩には、肥後の神瀬などは、一番矢の人の屬する村の作法に從ふのを習ひとした。そして庖丁ダテ即ち解體者は一番矢

のものの村から出す風があるが、一番矢の者がこの執刀者となることはなかつた。

センヤ　先矢。獵の初矢・一の矢の謂ひ。槍には用ゐない詞である（大隅百引）。この地に限らず、もはや弓矢を獵具としないにも拘はらず、銃獵に於てもなほかつこの種の稱呼を襲用する例は弘い。

ハツヤ　初矢。伊豫の浮穴など、最初に射た者が猪の牙と頭とを取る、これを初矢と謂ふ由であるが、これは珍しい例である。極めて弘く、普通には初矢は猪にはいはぬ詞であるから、猪の留矢の誤りかも知れぬ。但し、初矢の語は鹿・羚羊などを最初に射た者を指す誇ある呼び名として多くの地方で用ゐられ、その取得する部分も亦土地毎に差異がある。

トメヤドリ　今は行はれないが、以前伊勢一志郡の境などの狩の分配法に、鹿は矢に弱いから初矢どり、猪は矢強いから止め矢取りと謂ひ、猪狩には最後に猪の息をとめたものが特別の配分にありついた。他の地方でいふトメヤは鹿の初矢に對して、猪を射とめた者をさす詞である（山村生活の研究）。河内の西葛城あたりの獵師たちには、トメ矢がまづ一二割方の矢代を別に給與され、殘りは再び加つて均分する舊慣があり、伊豫の御槇のトメヤは頭をもらふ特權があつた。

ウチハギ　日向の鞍岡など、鹿を狩るに之を捕へた者がその皮を剝ぎとる權利があつた。これをウチハギと謂ふ。

ヒチン　北秋田荒瀬のマタギ言葉で射手即ち獸を射留めた者のことを謂ふ。ヒチンは獲物の頭を貰ふ。獲物はその肉の一部と雜物とを串に刺し、燒いてその場で食ふ習はしであるが、ヒチンには必ずハゴ即ち齒齦を串にさしたものを與へることになつて居る（隣人の友）。

イカブラ　猪の幸の配分に、第一のユメ（射手）が取得するものを、肥後五木でイカブラと謂ふのは、胃と頭のことであるといふ。また犬にはアカフとジユウズとを與へるのを法とした（旅と傳說五卷八號）。

ヤマキン　猪肉の分配を山でする場合、大隅の百引などの人々、石を以て之を量つた。この石をヤマキンとよんだ。山斤とでも書くのかも知れない。隨分大ざつぱなものであつたから、よい加減にやる事をもヤマキンといふやうになつた。ヤマカンといふ俗語ももとは是と一つであらうか。

サナデ　獸の解剖のことを、羽前置賜の小國鄉でサナデと呼ぶ。山の神迎への後、まづ皮を剝ぎ、ハツケとホナとを切はなし、式後いよ〳〵サナデにとりかゝるといふ（旅と傳說一二卷五號）。

カナヤマオロシ　狩して獲た猪を分割する作法に二通りある。四肢に肉を附けて先づ分ち、そ

れから骨を取るものをホンオロシといひ、之に對して先づ胴切りをしてから四肢を分けるのを、日向の椎葉などではカナヤマオロシと謂つて居る（後狩詞記）。ホンオロシは四國に尙行はれて居る。長門の俵山では四々の十六に切るなど〻謂つて、始からもつと小さく切る。イカリワケの必要があつたのであらう。

カタヤデオロシ　本オロシに對する語として、阿波三好郡の三名で行はれるのはカタヤデオロシである。本オロシは肢つきのま〻皮を剝くが、之は足とか肩をまづ落す解き方である。

カブトギリ　シコロギリともいふのは鏃切りと書くのであらう。猪の解き方である。肥後の神瀨の山村では、ズブギリの對語として通用してゐる。何れも首を落す法であるが、カブトギリの方は肉を前後につけ、甲の鍬の如く、切口を下におくと口先が上を向く。耳を後へねかせ、その端に手をあてた次から切るともいふ。左の肩の骨際に刀を當て、右は肩骨よりも少し下からきるので、右肩が稍々上つてゐるのが普通なのである。

ヨツオロシ　北部常陸の山村で、猪を料理する一つの方式。頭を除いて四つに切る故に此名がある。横はシカベと稱して肋骨の上から四枚目を境とし、竪は背の中心から切放すのである。それから更に四肢を切つて、八つに分けることを八つおろしと謂ふ（民族四卷一號）。信州上伊那の美和あたり、ヨツオロシを都合四つの部分におろすことといふのは同じであるが、爰では骨だけを殘して四肢を一エダづ〻に、胴も首も足につけたま〻に切るといふのが、尠くも常陸の例とはいさ〻か異つてゐる。まだおろさぬ猪は、一全體を一マルともマルタともいふのは、材木のマルタと同じであるらしく、猪をおろして各自の分け前とした九州のタマスが、マルタをたま切つたタマの語と關係のあることを裏書する例かとおもふ。

コンボノフリマハシ　獵の獲物の分配は多くは、鹿の初矢・猪の留矢と稱して、致命の痛手を與へた者のみが表彰されるのに、出雲仁多郡の奥、八川の山地では一の矢は猪の頭と膽、二の矢はニノゲから前肢の前まで、三の矢は尻の肉、それも尾を以て圓を描く分だけで、これをコンボノフリマハシと謂つて居る。

ミツブセ　大隅高山で、猪の皮目を量るときに使ふ語。指三本の厚さといふことである。又二つぶせ、四つ伏せなど〻も謂ふ。日向の椎葉では、狩人の持つて居る小刀を轉ばせて、分配の刄物を入れる所をきめる。何れにしても極めて大まかな物さしであつた。

三〇　獸の肢体

サチノミ　山言葉、野獸の肉のこと。北秋田郡根子村などで（民俗學五卷一二號）。

イチノキレ　猪の首の肉、卽ちクルマゴのことを、日向の西米良で斯う謂ふ。椎葉山でいふツルマキに相當するやうである。

ツルマキ　野猪の首の肉、味最も美なりといふ（日向椎葉）。輪切りにした斷面が弦卷と肖てゐるからで、つまり弓箭時代からあつた單語である。

クサワキ　古語であるが今でも九州南部の山村には殘つて居る。野猪の胸のあたりの肉で、頭とこの草脇とは射留めた者が取り、殘りを狩の人數に分ける（大隅肝屬郡）。日向の西米良でもクサワキは、猪の肉の肋骨部から腹の皮のついた部分、目方で五六斤分をさし、やはり射手の所得である所から、射ダマスとも稀にタマスとも謂ふ。それで爰の解體にはこの草脇をつけてきることがホンオロシ、之をとつて切るのがカナヤマオロシである。

テノゴヒニク　豊後玖珠郡の山間部では、猪の分配をハブシ分けといひ、一番打は頭、二番打と三番打とは背筋の兩方に在るテノゴヒニクを一つ宛とる習ひである（山村生活の研究）。多分、肩にかゝつた形から、手拭肉といふ意であらう。

テツ　獸類の前脚の稱呼（紀伊上山路）。

ウチガラメ　吉野の洞川などの狩獵用語。猪の前脚の上のところをウチガラメ、胴體をナカウチといふ。

ソウジシ　野猪の背の肉を、日向西米良ではソウジシと謂ひ、よき肉とする。これを人數に割つて分配するが、家刀自はこれを必ず七つに切つて火の神に捧げる習ひである。

ソシ　九州椎葉山の獵師たち、猪の背に沿うて附着する肉をさう呼び、外ゾシ・內ゾシの別あり、味よからずといふ（後狩詞記）。

スシシ　背肉の意、肥後五木などで。止め矢の射手が取得するといふから、猪狩の場合と思はれる。

セミ　鹿の背筋の肉、この肉は最も美味であると謂ふ（因幡八頭郡那岐村）。

アビキ　熊の足や掌の肉、これを奥羽の下北郡などでアビキと呼ぶ。熊がこれを冬中なめるのは事實で、春さきの熊のアビキは薄くなつてゐる（旅と傳說一一卷一一號）。

アリ　熊は穴籠りの間、手足の面にもりもりとした疣狀のものがあらはれる。之を舐めて居れば、物を喰はずに體がもつと謂ふ。從つて穴から出て幾日位の熊かは、之を見れば判るなど〻、羽後檜木内のマタギは謂つて居る。熊が蟻をすり潰して掌につけるといふ話のもとはこれにあつたかと思ふ。

ヤヲリ　下北半島の畑など熊の血をヤヲリと謂ひ、天日に乾して藥用とする（旅と傳説一一卷一一號）。

ヤス　鹿の血を、土佐の西部でヤスといふ旨、文化十四年の幡多方言にみえてゐる。

セキ　猪の腸と皮との間の脂肪に富んだ部分をセキと謂ふ。永く腐らず、大根など〻共に煮て食用に供してゐる（日向西米良）。

ドブ　下毛の野上あたりの山地で、動物の下腹部のことをさう謂ふ。この部分の血は濁つてゐるからとて狩人も呑まぬ。よく「ドブだから遁げられた」など〻いひ、少くも急所ではなかつたのである。

ヌラクラ　猪の蓑毛の部分の肉、そこを足柄山の狩詞でヌラクラと謂ふ。こゝはいくら射ても致命傷にはならなかつた（民間傳承三卷一一號）。

ヨドミ　青ジシの小腸の名。仙北のマタギたちはこれを非常にうまいものとし、何でも旨いものには「ヨドミの味がする」と謂ふ。干したものは産後の腹痛みに效くといひ、また腫物には水にといて附ける風がある（旅と傳説一一卷五號）。檜木内のマタギ詞では、ヨドミは獸の臟腑の總稱である。こゝでは羚羊などの胃の腑をモンパ、心臟をサンペ、腎臟をマメなど〻謂つてゐる。

ユタ　猪の頸よりやゝ下つた所をいふ。或は肺臟のことかとも思はれる。猪はサンマイといふのが急所であるが、そこに命中したと思ふのに尙遁げ去るのは、實はユタに當つて居るのである。出血は多くとも取遁がすことがある。血液中に泡が交つて居るので、ユタに當つたことを鑑定する（參遠山村手記）。

ミヅイ　野州利根郡の奥、水上などでさう呼ぶのは、腹からとり出したばかりの熊の膽のことである。火にあぶつて乾すと、春は五一（五分の一になる意）又は四一、秋は七一にもなるといひ、干上りの色によつて鼈甲とか金とか謂ふ。檜枝岐でイホシスダレと謂ふものがこれに當る。越後湯之谷などでは、ミヅイの口を糸で縛つて火にかざして炙りほし、板型か簀の子で固めること（熊狩雜記）。

シシノイ　猪膽。熊膽と同樣に貯藏して藥用とする所が諸所に在る。

レンゲギモ　熊の膽を熊から切り離すとき、越後北魚沼郡の獵師どもはレンゲ卽ち肝臟と共に取ることにしてゐる。レンゲで膽を包んでゐるからであるが、實は牛の膽など〻間違へられぬやうに附けた儘沽ることが多い。之をキモツキと謂ふ。

クロフク　南豊後の因尾あたりで、野猪の肝臟をいふ。フクは肺臟の古語だから、其フクの色黑きもの〻義であらう。此地方の狩人は狩場でこのクロフクを取り、竹串に刺して火に炙り、生血の垂れる所を賞美する。尙この邊では心臟をマル、胃をカブ又はコウワタと謂ふ。猪を冠してキノクロフク・キノフク・キノマルなど〻も謂ふ。

マルト　鹿の心臟をマルト。遠江の奥、門桁などの山あひではこのマルトを珍重し、精肉よりも價は高い。玆ではクロギモは肝臟、アカギモは肺臟の方言である(設樂一四號)。

サベ　またはサンベとも。秋田マタギのいふ詞、熊や羚羊の心臟である。

ホナ　熊の心臟を羽前小國の山村でさう呼ぶ。山の神迎への式のあと、山サキは皮の上でハッケ(頭)とホナとを切離し、ホナの下端に十文字の傷をつける。完全に仕止めたりとの徵であるといふ(旅と傳說一二卷五號)。

ホソワタ　特に熊の腸のみに限り、因州八頭郡の落折などの狩詞でさう謂ふ。

ウゲ　大隅の百引などの獵師、猪の胃袋をウゲ、鹿のそれをミノワタと稱する。

モンパン　又の名をモンパ。青シシの第一の胃(袋囊)の俚稱。羽後仙北郡のマタギたちのいふ語。胃は別に八年袋といふ稱呼がある。內壁がモンパといふ織物に似てゐる爲かといふ。

サルノキンキ　猿の體內にありて苦きもの、三河の設樂などの一部で之を目藥としてゐる土地もある。

モモゲ　鳥の胃袋(大隅高山)。

モモシ　南會津の山に住む者、熊の肝臟の中に在る脂肪をさう呼んでゐる。

ニゲ　クラシシなどの胃から出た所にさがつてゐる長さ尺五位のもの、越後湯之谷の山地では之をニゲと云ひ、馬の病氣に效驗有りといふ。膵臟のことかも知れない。

カルギモ　日光附近で熊の肺臟のことをいふ。輕肝卽ち水に浮くからの名であらう。

アカギモ　獸の肺臟のこと、またはサンマイともいふ。肋の三枚目にあるからと說いてゐる。

アカフ　獸類の肺臟を肥後五木の山地でかういひ、ジューズ(肝)と一緒に犬に與へる習ひがある。

フッチ　鳥の肋骨中に鮮紅なる血肉、食用にならぬと謂ふ(大隅高山)。卽ち鳥の肺臟である。と

りは食ふともドリ食ふなといふドリも是である。

ジユウズ　獸の肝臓をかう謂ふ。犬に與へるといふ（肥後五木）。

セマメ　獸の背骨についてゐる二つの豆形のもの、三河でも野州でもこれをセマメといふのはその形からの命名である。多分、腎臓のことゝ思はれる。

コシマメ　羽後のマタギ言葉で、熊や羚羊などの腎臓をコシマメ（雄勝郡）或はマメ（仙北檜木内）など〻呼んでゐる。

アヅキギモ　獸の腎臓をかういふ（越後北魚沼郡湯之谷）。

タチ　獸の膵臓のことを、三河あたりから東北にかけて弘くタチと謂つて居る。猪の肝の下に烟管筒の如き形をなし、之に彈を射あつれば死することなく、怒り狂ひて野山をたけり歩く故にハラタチと謂ふと說くものもある（譚海、八）。長さ一尺幅一寸位、紫色を呈し、肺と肝臓との境に在るといふ。三州振草の里では、狩人が鹿などを仆した折の毛祭にはこのタチと四肢の毛との五品を山神に供へる風がある。關東周圍の山々でもこの作法は弘く行はれてゐる。足柄山中の獵師はタツは山の神にあげ、人の食ふべからざるものと說き、腹を剖けばまづタツと黑ギモとを出して、傍の木又は石の上にこれを置くのを常法とした（民間傳承三卷一一號）。利根川の水源地方でタチを

まづくて犬も喰はぬと謂ひ、僅かにオビとも稱して安產の守りとしてゐるのをみると、食ふに堪へなかつたかとも思ふが、山を彼方に越えた北魚沼郡の湯之谷などの狩人は、熊の舌など〻共にその脂肪味を賞美し、狩人以外にはたべさせぬといはれる。とにかく、かうして狩人の口にする土地でもホド祭には用ゐたといふから、山の神に供へる風は、東日本にはかなり弘いといへる。

サゴ　鹿の腹ごもりの仔をいふ。三州北設樂では山の神の祭に、サゴと稱して苞に入れた白米を供へ、之を鹿の袋子の代りのやうに解して居る村もあるから、此名の起りも略想像し得られる。サンゴともいふ所からか、產後のひだちの惡いもの、血の道などに此上の妙藥はないといはれ、狩人にとつては別に一匹の鹿を獲るよりも利得があつた（猪鹿狸）。設樂の振草など、猿のサゴもよく同じ方面の民間藥として用ゐられ、乾したものを賣る。二日間位蒸した黑燒を粉にして飲むといはれる（山林六五六號）。

ガゴ　鹿の腹ごもりの仔を、筑前五箇山などでさういふ。春の終り頃に取られる。やはり血の道の藥にするといふ。

カケバ　猪の牙を土・豫の山間でさう呼ぶ。土佐檮原の一部ではこれをカマと謂ひ、紺屋の型をつけるために必要であつたから、右カマの方などは特によい値で賣れたといふ。伊豫惣川の狩

の掟には、射手は鹿なら角を、猪ならカケバをとるといふ（山村生活の研究）が、これは單なる利益の爲のみではなく、むしろ名譽の徽章としてゞあらう。

モチボネ　猪の肋の下の腰骨、これが大隅肝屬郡の山間部でいふモチボネであつた。分配の折はインツキ卽ちセコが之を領するのが定めであつた。

メシガヒボネ　飯匙骨。日向の西米良の狩詞で猪の肩胛骨の稱呼。この骨の一つは必ずヲダトコ卽ち猪の解體の宿をした家の女房に遣る、山村生活の研究）。家刀自と飯匙との深い關係をかういふ所にも示してゐる點に興味がある。

サンコヤキ　下北半島の川内などの狩人の間に傳へた秘法。猿・貂・熊の骨をよせ、これを蒸燒にして粉末としたもの、特にその頭骨を用ゐると一層よいといふ。强壯劑として用ゐて居る。（旅と傳說一一卷一一號）。サンコヤキの名はこれら三つのものを合せるからの呼名であらうが、呪法なのであらう。

シシフテ　猪の臟腑をぬいて、猪買ひの來るまで水に浸けておく場所の謂ひ、三河の山村でシシフテと謂ふ。フテは浸す意。サカヒテ（酒浸し）の語など、中世の御湯殿日記などにもみえて居る。

三一　狩の作法・祭儀・俗信

シバヲコシ　日向の諸塚などの獵師、猪分配の後に鐵砲を一發はなすことをさういふ（後狩詞記）のであるが、次の西米良の例とは聊か異つて居るやうである。爰では舊十二月十九日、八幡社に於ける行事の名として知られて居る。俎にタケシバを結ひつけたものを猪とみたて、鐵砲になぞらへた手杵で之を射る所作をする。狩人は面をかぶる。燧を打つて火の點くまでの打數を以て其年の狩の日とカクラとを定める。この作られた猪は、實際の狩をして猪の獲れるまでは軒下にさげておく。一種の豫祝行事で、カリメンともいふのは、狩人が面を被るからの謂ひかと思ふ。

ケリヅツ　これは祝砲若くは御禮砲とも譯せらるべき意味のものであつた。土佐の檮原などの山村では、狩の歸りには村近くなつてから、各人が悉く鳥砲を一發づゝ山の神へ打放す風がある。鐵砲以前は矢一矢を射たものでもあらうか、まだこれを明かにした資料はないやうである。

ヨセデツポウ　猪・羚羊・兎などの獲れたとき、その合圖に空にむけて擊つ鐵砲を、南佐久郡の小海あたりでは寄せ鐵砲と稱した。之を聞いてセコの者が集るのである。獲物のなかつた時にも

三發打放すが、これには寄せ鐵砲の名を呼ばなかつた（旅と傳說一一卷八號）。

マツケ　狩人の持つ鉈を陸中雫石などでマツケといふ。熊を捕ると熊の神を祭り、其處にマツケを置いて來る習慣がある。そのマツケは模型のものであり、且つそれと共に熊の頭をも供へ、呪文を唱へて禮拜してかへるのである（山村民俗誌）。カママツカもしくはアイヌ語のマキリとの關係が尋ねられさうである。

ヤゴホリ　會津北部の山村では、獵師が大物を射留めて歸ると、村では之を出迎へ、獸の肋骨を鉈で打切つて、一同集まつて之を食ひ祝をした。それをヤゴホリと謂つたのは、屋籠りであらう。籠るは忌籠るで、卽ちイハヒの古意である。

ヤサキイハヒ　箭先祝といふ語は筑後の矢部村にも、肥前神埼郡の三瀨村にもあつて、共に矢口祝と同じく、始めて山の幸を獲た者の祝宴である。三瀨では肝を山神に供へ是は主人が食べる。又頭と皮とを射留めた者が取ることになつて居る。また長門の豐浦郡などで、猪を擊つて來た家ではその頭を取り、酒を買うて仲間の獵人たちを馳走する。色々の作法・唱へごとがある。これも箭先祝といひ、猪の頭は擊つて來た山の方に向けて山の神を祭るといふ。武家名目抄を見るとこの語は中央の都市にも元はあつた。足利家の幼將軍が百舌を射て、箭先祝をしたことは日記にも見えて居る。

ウチジル　狩の獲物の臟物は、豐前伊良原の山間部落では一番矢の家へ集つて煮てくふ。大根や芋などを入れた汁である。これをウチ汁といふ。宿では酒一升を買ふのが通例である（豐前六號）。

ヲダトコ　日向の椎葉で、獲物の猪を里に持下り、割いて分配するに使ふ家をヲダトコといふ。矢開き其他山神を祭る色々の式も此家で行はれる。ヲダトコになる家は一定して居た（後狩詞記）。

ホドマツリ　南會津の檜枝岐の獵師たちの執行する狩の作法の一。毛祭のあとで獲物を山小屋に持歸り、そこでこのホドマツリが行はれる。首の下の肉と腎臟二個とを俎に載せ、獵の頭が自ら之を十二切にきつて炉の火中にくべて唱へごとをする。サルマの獵師の子孫で御座る云々の句がある（旅と傳說九卷六號）。ホドは火の神のことであるから、一種の火の神祭である。この作法は他の報告に依れば、まづ最初に獲物の喉の下の皮、卽ち熊にはクサカケ、羚羊にはハトムネといふ部分を十二に切つて、唱へごとをしながら炉の火にくべると同時に、山の神樣のシシといはれる腎臟を狩人の數の倍に切つて二串にさし、燒いてから一巡して一片づゝたべるとも云ふ（旅と傳

說一一卷二號)。後者の採集が綿密だつたのかと思ふ。ケマツリの條參照。

クママツリ　陸中九戸郡の山形など、以前は熊祭のときは卷物を讀んだといふが、もうその卷物をもつ者が村にはゐなくなつたらしい。熊をとれば動かさぬうちに祭をするのが本式で、サカサガハといふ語もあるから、羽州其他でみるやうな、はいだ熊の皮を逆さに被せて行ふ作法もあつたのかと思ふ。獲物の歸屬を熊に訊くときに逆さ皮をしてきいてみたら、三足ほど山形村の方へ死んだ熊が跳んだといふ話もある。それほど熊は神に對して忠實なものであるから、熊祭を知らずに熊を獲るものではないと戒めてゐる。岩代の中ノ川の山村でも熊は位の高い獸ゆゑ、とれば必ず祭をすべきものとし、狩の長が熊の頭をもち、殘りの者が手足をもつて動かし乍ら呪文を唱へたといふ。但しこゝでは熊祭の語は用ゐてゐなかつた。

トナカケボウ　トナは熊の頭の稱呼。會津檜枝岐では之を山神に供へるとき、此名の棒に刺し常磐木の下に立てる(熊狩雜記)。

オカベトナヘ　熊をとるとその夜は部落を擧げて祭をする。之を下北半島の宇曾利川などの獵師はオカベトナヘと云ふ。秋田マタギのいふ毛ボカヒに相當する作法である。オカベルといふ語は、秋田の根子でも用ゐてゐるが、これはウカベルこと卽往生させることであらう。

スハノカンモン　三河の北部山村で、狩人がシャチを繼ぐときに唱へる呪言。先づ御祓の六根のはらひをして九字を切り、次に筒口へ次の言葉を吹込むやうにして唱へるといふ(設樂昭和九年一月號)

ゴシンムショウ　ウンスイスイノ
ゴシュクニンリン　ドウシブツカ
ナムアビラオンケンソワカ

是は他の地方にも弘く行はれて居る諏訪大明神の神呪で、業盡有情・雖濟不生・故宿人倫・同證佛果を稍誤つて暗誦して居たものである。上州赤城根では熊をとつた折の呪文として、この後に、

今この人にあひて佛戒にあふ
はらひ給へ淸めたまへ

を加へ、越後湯之谷では、靑葉流の熊祭の作法に、牡は左耳、牝は右の耳に口を當てゝとなへる唱ごとにも、お天とう樣の眞言といふ稱呼を以て、諏訪の神文のあとに

野に住むけだものは我にいんあらば
長くおもはざりけり、アビラオンケンソワカ

を添へたものを秘傳としてゐる。これらは多くスハノモンといはれてゐるが、神文そのものは多少に不拘、轉訛してゐる。例へば業盡有情を湯之谷ではゴウゼン和尙と讀みかへた如き（熊狩雜記）であるが、また下毛野上の老獵師の傳へてゐた口承には、却つてスワノオン（諏訪の文）は例の山神救助譚に於ける大ナジンの用ゐた毛祭の呪文ゆゑ、山では効驗少しとして用ゐぬといふものもあつた。但しこれは高天ケ原に云々といふ文句に始まつてゐるといふから、名ばかりはスハノオンで、實は別のものだつたかとおもふが明らかでない。山神を助けてその祝福に浴した小ナジンの用ゐた呪文はメイゴノモンともマイゴノモンとも謂つてゐる如く、迷故三界苦云々とあつて、むしろ本來は業盡有情の神文に依つたものかと想像される體のものである。メイゴノモン參照。

メイゴノモン　下毛野上の山村の獵師の秘傳とされた呪文。大殺生のあと、ワタヌキをする前に、山の神に對してとなへる毛祭の詞である。これは山の神のお產を助けた小ナジンの唱へた呪文であるから、大ナジンの用ゐたスハノオンよりは、この方を山の神が喜ばれるといふから、爰でも狩人に二流ありと傳承されたのである。呪文は

メイコサンガイジョ
ゴクウジッパウクウカイ
ムトウザイナンボク
アビラオンケン　三唱

といふのであるが、この故老は大分頽れたまゝ傳へてゐたらしく、實は次の如き一種の偈であつたのかと思ふ。即ち迷故三界苦・悟故十方空・本來無東西・何處有南北とでも復原し得るか。

シャチ　狩人の幸運をシャチと稱する信仰が三・遠から木曾あたりの山村へかけて弘い。だからシャチを一種の力の如く考へ、狩の運の乏しい事をシャチガキレタといひ、さういふ獵師との共同を嫌ふ風がある。それでシャチを祭によつて盛んにすることを三・遠の地でシャチを嗣ぐ、木曾ではシャチビをつけて貰ふといふ。三河などでは禰宜や鍛冶にこれを賴んで居る所がある。獲物から拔取つた彈丸を貯へおき、之に新しい鉛を加へて次の彈をとるが、之をこの界隈ではシャチ玉と謂つてゐる（民族三卷一號・山鄕風物誌）。古代のサツ矢に相當する語である。すなはち海幸彦・山幸彦などの幸と傳統を同じうする古語である。

シャチガミ　木曾ではシャチ神を家の神棚に祭つて居る一方に、狩人の幸運を乞ひ禱む風がある。宮城・福島二縣の境近くに於ても社地神などゝ文字には書いて、實は狩獵神を祀るものがある。奥相志には社地森山神とか社司森などゝみえて山神祠がみえる。みな狩獵の幸運をうしはく

神といふ意であつた。

マヘシヤチ　遠州門桁では御料林の入獵許可を得て、一月始めから山に入る。紙の旗を作つて山の神を祀り、赤紙を竹串にさして谷々の入口を祭り、入山の夜は前シャチといつてシャチ祭を行ひ、酒を飲む（設樂一四號）。一種の豫祝である。赤紙は山の神に供へる肉片を意味するのかと思ふ。

シヤチイハヒ　猪をとつた祝。三河の振草など、猪の赤肝・黑肝を酒や砂糖などで煮て食べあふのをさう謂つて居る。

シヤチマツリ　遠州・三河などの北部山村ではシャチマツリと呼んで、狩の獲物のあつた時は、まづ山の神を祭る。其式はいろ〳〵あつて、遠州周智郡などでは赤紙の大きな幣をたゝみ或は之を長方形に切つて風に飛ばしたなどゝいふ（民族三卷一號）。

ホウゴト　狩人の組の者が行ふ祈禱を、越後三面の山村に於ては、法ごとゝ謂つて居る。狩に出る前には十日の間身を潔め、腥いものは一切口にせず、年長者を親方としてその指導の下にこの法ごとを行ふのである。法ごとには特別の言葉が用ゐられ、是は他村の者には絶對に話さぬ規

約である。大山ぬけがあつても、親方がこの言葉を用ゐて祈ると止むといふ（山岳二〇卷三號）。

サガミマツリ　熊を捕つたときにする祭を越後南魚沼郡の山間で、サガミ祭と謂ふ。サガミサマは山小屋に祀つた山神のこと、このサガミダナには、猿駒引の繪馬形の紙を木の枝にさげて、一人々々がぶらさげる。山の神のことを里では十二様、岩船郡ではオサドサンと謂ふ。

カハマヘ　皮前の法。熊を獲つたときの作法。多分皮をあとさきにする方式であらう。又十二開きとか七串やきなどの作法をまづ山神に對して行ふのである（羽前置賜郡小國鄉）。

ケボカヒ　秋田仙北地方のマタギの執行する狩の作法の一。「皮タチの引導渡し」といひ、シシを獲つて皮を剝ぐと、まづシカリが溪流で口を嗽ぎ身を潔めてから、皮の毛の方を向ふに、內側を自分に向けて兩手で擴げ持つて、

一歲二歲のシシ
馬の毛の數たゝかせ給へ山の神
アブラウンケンソワカ

と三唱しつゝ、皮を廻して骸の上に反對にかける。手には皮と共にトリ木の小枝を持つて行ふ。熊の毛ボカヒとは聊か趣を異にしてゐる（旅と傳說一一卷五號）。この狩の毛祭に於ける毛皮を逆さ

に着せる作法と、人間の葬儀に於ける逆さ着物などゝの一致は注意すべき點である。

ケマツリ　毛祭。東日本の毛祭はほゞ共通の例が多い。三河の山村で狩の後に山の神を祭る時、獸の膝の部分の毛を拔き串に挾んで供へる。或は蹄の部分の毛もしくは耳の脇の毛を用ゐ又耳を切つて添へることもある。牡は左、牝は右などゝ謂つてゐる。會津もほゞこれと似て、山の谷々によつて聊か異同があるらしい。檜枝岐では獲物があると一頭毎に一度宛毛祭を行ひ、耳・手先・爪先の毛など、都合七ケ所の毛を切つて十二樣にあげるとも、又立木のまたに上げて日光權現に供へ、サル丸獵師の末だといへば永く守つて下さると信じてゐる（熊狩雜記）。この後者の場合にも別の報告には、熊や羚羊などの頭を仰向けにして、その頭の頂・耳の左右・四肢の爪の間の毛などを拔とり、雪崩のこぬ大木の枝にのせて拜むともいふ。かういふ木はマツリタテの木と謂はれる。谷を隔てた水引ではこの毛祭は友呼びの意で行ふのであつて、同じ所で七頭はとれるものといはれてゐる（旅と傳說一一卷二號）。上州戸倉の狩人のあひだでは、毛祭は熊と羚羊とに限るといひ、タチ（韃靼）を毛に添へて供へる。これにも何か唱へごとがあつたらしい。九州肥後の神瀨の山村の例には、猪を荷つて來て、毛皮を燒く式にはかういふ唱へごとが秘事とされてゐた。

奥の山の神さん、中の山の神さん、
下の山の神さん、ほかいはづしはあつても、
受とりはづしはないやうに、
受とつて下さい、南無阿彌陀佛。

ヤトウマツリ　鹿をとつて後、胃袋の傍にある無名の黑色のものを、山の神の供へ物としてヤトゥ即ち串にさし、或は枝にかけて祀る風が三河の山の村々にあつた。杏か以前は兩耳を切つてヤトゥ祀りをしたといふ。のちには臟腑を割く事を略して、たゞ毛祭だけで濟ますこともあつた。毛祭は襟毛を拔き串にさして供へることは猪の場合と同じである（猪鹿狸）。毛祭とは別のやうにいつてゐるが、作法の執行が同じ時だから疑はしい。

ヱリゲ　猪・鹿の頸元の毛をさう謂ふ。狩人之を切取つて山の神に供へる。ミノ毛といふ語もあつて、それも頸の毛と謂ふが、襟毛より稍下の部分の毛らしい（三河北設樂郡）。

チマツリ　薩摩西南部の獵人の部落には、近い頃まで血祭の式が行はれて居た。彼等は猪鹿を擊ち留めると、大略解剖を終つてから、骨・肉・皮等を舊態に復し、靑葉の上に載せて其前には薦を敷き、そこに坐して左の詞を以て祭るを常とした。

七谷八谷の水の

のんぼり流るゝ時分
枯木に花の咲く時分
我里に還れ
又來る獲物は私にたもれ

血祭と謂ふのは、それから後に唱へる次のやうな文句のことだと謂つて居る（風俗畫報三一四號）。

きりきりきりめの山の惠の神
谷よりうぶす血の惠の神
留めてたもれやアビラオンケン

大隅半島の山村では、血祭とフクマル祭とを一つと說く者も多いが、實はこの二つの祭がつゞいて行はれるからのことで、血祭は猪に對する祭のやうである。百引などは猪狩直後、フクマル祭の前、續いて猪をその日の惠方にむけて伏せ、その頭上に山刀と猪の血のりのついた柴とを載せて、一番矢の者が猪に默禱し柴を以て祓をする。爰ではこれを血祭又は血バラヒと謂ひ、又フクマルマツリと血祭とを併せてフクマル祭といつて居る（方言五卷四號。フクマルマツリ參照。

ソメシバ　またはソメキ。山では猪の獲物を先づ神に供へるが、その時、有合せの生木の枝又は木の葉に、猪のコウザキの血を塗つて供へるのである。これをソメシバといふ。獵師は山に入るに先だつて、山口の神に獲物を得させ給はゞソメ木を供へんと誓ふからである（日向西米良）。

シバガヘシ　薩摩西部の山村の獵師、獲物を解いて血祭の詞を唱へた後、更に次の如き詞を唱へつゝ、獸の下に敷いてあつた柴を撤し、全くその祭の式を終る。之を柴返しといふ（風俗畫報三一四號）。

折り柴といて
赤い柴を青い柴に
御戻しなされて下さりませ

コウザキマツリ　猪の心臟を日向の西米良ではコウザキといふ。コウザキマツリはこのコウザキをヲダトコで七つに切り、串にさして山の神に供へることで、その折に唱へる詞にも一コウザケ二コウザケ云々と唱へる。或は獵犬の死靈の祭であるともいつて居るが、上州赤城根などの狩人は、鹿をとるとえびす樣を傍の木にかけて十二樣に供へる風がある。作法はほゞ同一で、たゞこちらはコウザキ祭とは謂はぬだけである。えびす樣は心臟の頭にあるといひ、矢をつけた者が肢の皮とこのえびす樣とを取得する。

ヤツワリ　熊の心臓。越後中魚沼郡の秋成で、熊を獲ると必ず之を山の精に供へる習ひがみられる（熊狩雜記）。利根川の上流、水上などではオホタマと呼んでゐる。ヤツワリといふのは八つに切つて供へるからであらう。

フクマルマツリ　南九州にみられる狩の儀禮の一。大隅の百引では猪をとつた時、まづ血祭をした直後この祭を行ひ、これには猪のフクを煮て食ふ。その場に十人居れば十人とも。鹽・米・神酒などを供へ、唱へごとがある。奥山の山の神のびざいてん樣云々末はにんにんになして下され云々といふのであつた。薩摩大川内のこの祭には、肝を茹でゝ鹽をつけて一片宛たべるのであるが、未だ猪を射たことのない者は食べることは出來なかつた。日向西諸縣郡の眞幸などでフツマイ祭といふ（民間傳承二卷二二號）のもフクマルであるらしい。鶏などには單にフツと謂つてゐるが、フクはもともと肺臓の古語であつた。古くは布久布久之（倭名鈔）といひ、南島などには人畜ともにこれをフクといふ語は未だに遺つてゐる（南島八重垣）。東日本でも相州丹澤山塊の狩詞などには肺臓をアカブキといふ例がある。大隅高山などのフクマルが猪・鹿の内臓の總稱といふのは聊か疑はしいが、會津あたりで心臓のことをマルといふのをみると、フクとマルとの合成語であつたのかと思ふ。大隅大浦などでは、一の箭のものは二人前とこのフツマイとを取得する權利があつた。

ヤマノカミムカヘ　羽前小國鄕の長者ケ原の獵師たち、シシ（熊）を仕留めると、全員整列の上そのハツケ（頭）を澤の上へ向けて横たへ、山の神迎へといふ式を行ふ。これには山サキが祭司となり、御神酒と幣束とを供へて山の神に御禮の御詣りを行ふ（旅と傳說一二卷五號）。皮を切放すのはこれから後といふから、他の地方とは式は稍々異なるやうである。

ヤブカケ　この語は信州上伊那から參・遠の高原にかけて分布してゐる。仙丈ケ岳の狩人は鹿・猪・羚羊などを獲れば、山で腹を出す。この時、胸の骨の所の軟いものを木の枝にかけて山の神に進ぜるのを、ヤブカケといつてゐる。同じ上伊那の美和などでは、これをオホブクロともいひ鹿の反芻する爲の袋で、脂がその周りに餅のやうにいつぱい附いてゐるものだと謂ふ。また色黑く幅一二寸、長さは八寸から一尺位まで、鹿などの胃の右脇にあると參・遠の境ではいひ、ほゞ同樣の作法が行はれるが、三河にはこの呼名がない（民族三卷一號）。

ヤマノカミノシシ　日向鞍岡あたりの獵人、猪の肝をさういふ。茄子形をしてゐるといふから或は心臓かも知れぬ。狩場ですぐに一同が共食する風はあるが、一度も猪を射たぬ者のみは、これに參與することは出來なかつた。南會津の狩詞では腎臓の謂ひで、檜枝岐のホドマツリには之を板にのせて日光權現にあげる習ひである。

ヤマノカミノオカラコ　山の神のオブクとも。熊のナメズリ即ち舌を、越後赤谷ではさう呼ぶ。これを小屋にて串にさして燒き、獵師たちが分けて食べる。オカラコは粢の方言、主として神供とする故に轉用されたのであらう。

モチグシ　毛ボカヒが終つたあと、秋田マタギはモチグシの作法を執行する。熊や羚羊を山中で解いたあと、串に肉をさし燒いて山の神に供へ、人々も分けてくふ。串は二本、トリキ即ちくろもじで作る。肉は膽・首・背などから團子ほどのもの各九片、或は十二片ともいひ、サベ（心臓）は必ず入れる。手をかへずして火に焙る（秋田マタギ資料）。持串、即ち手に持つて燒くからの名かと思ふ。越後湯の谷ではこれをホドマツリと謂ひ、必ず舌を用ゐて人數割としてゐる。

クシザシ　猪がとれると、近隣の人をよび釜で茹でゝ、十五戸に骨と肉とを配る。之を日向の椎葉山ではクシザシといふ。串にさして配分した故の稱呼と思はれる。山小屋などの作法の零落した姿と考へられる。

ナナキレザシ　猪を擊つとアカフクをとり、白紙に捺して之を血染の旗と謂ひ、山の神を祀る。またそのアカフクの一部を細かく七つの片に切り、串に刺して射手が山の神に供へる。この七串を七キレザシと謂ふ。アカフクの殘りは一同が生のまゝ口にする（日向鞍岡）。アカフクは相州の山などでもアカブキと謂つて肺臓の稱呼である。

ウジシイハヒ　大隅高山地方など、男兒が始めて猪鹿を射留めたことをウジシと謂ひ、男一生の三樂の一つに算へられて居た。昔は此祝に二三日も續く酒宴をしたものだといふ。ウジシをまたハツヤ（初箭）若くはハツイとも謂つた。初射では無くて初猪であらう。

ヤグチイハヒ　生れて始めて猪鹿を打つた人は、筑前五箇山などでは、狩人全部を招いて矢口祝をした。其時獲物の一部を山神に供へ、且つ其酒宴の席で必ず次のやうな小謠をうたつた。

なほ數々のますらをの
待つとは知らでさをしかの
榮華にも榮耀にも
なほこの上はあるべし

此文句は少しこわれて居るやうである。筑後の星野でも最初に獲物を仕留めたことを、矢口打つたと謂ひ、やはり以前は矢口祝をしたといふ。

ヤビラキ　初矢の祝をさう謂ふ（大隅百引）。ヲリメ參照。

ヲリメ　矢開きとも初矢の祝とも謂ふ。大隅百引では生れて始めて狩に矢つけした者が、獵仲

間・近親を招いて猪肉をふるまふ酒盛の謂ひである。ヲリメをせねば一人前の獵師といふことは出來なかつた。

ヤマイハヒ　足柄山の谷々でいふ語。生れてはじめて猪を射とめた者は、獵師仲間を家に招きとつた猪を山神に供へて酒盛をする。これが山祝であつた（民間傳承三卷一一號）。

ワカノガリ　以前正月のうちに猪を二頭捕つて、大淵の五條家に納める慣例が、筑後の矢部にはあつた。それが獲れる迄は幾日も猪狩をつゞけたと謂ふ。若野狩の若は正月のといふ意味で、初といふに同じいかと思ふ。島津藩も一般に武家は正月二日に初の猪狩を試み、又その肉を必ず節日の供膳に用ゐる風があつた。つまり昔はほしいだけ捕れたのである。

ヤビラキ　矢開。舊正月二日に歳德明きの方に向いて弓や鐵砲を射る風が、信州南小谷などに行はれた。ヤビラキといふのはその名である（北安曇郡鄕土誌稿年中行事篇）が、狩初めの式かと思はれる。薩摩の初狩もやはり正月二日であつた。

フツカガリ　二日狩。奄美大島では正月二日には必ず狩に出た。之は占ひの爲であつた。此日猪でも捕れば、一年の幸福を卜するに足ると言つて居た。

カミガリ　神狩。大隅の百引の山間では正月三日をカンガイとて、山神の祠で餅を轉がす式があつた。四日はハツガイ卽ち初狩で、人間の方の狩であるが、今はたゞ山に往つて酒を飲むばかりである。

センビキヰ　土佐の山分の村では、野猪を獵する獵師たちは、九百九十九頭まで捕れば止めなければならぬといふ。もしさうしないと、千疋目には必ず怪異に遭ふと謂つて居た（土佐の土俗と傳說）。近年家猪を飼ふやうになつてからも、土地によつては千疋目には緋豚が生れるなどゝいふ俗信があつた。

センビキイハヒ　猪を千疋射とめたときの祝を、吉野郡の奥でさう謂ふさうであるが、果してそれだけとる者があるか否かは疑はしい。

ツツマジナヒ　狩を忌むべき日に故あつて狩をなし、獲物のあつた時は筒まじなひをせぬと、筒（鐵砲）が穢れるといふ。そのまじなひの唱へごとは、

射るものも射らるゝものもへんはなし
われはみやまのミタ（靈）なるか

といふのである（日向西米良）。

スハノカリ　日向西米良の狩人のいふ語。昔から七八九の三ケ月は二十日以後を諏訪さまが狩

をするとて獵に入ることを忌む。たとひ行つても獲物はないとて罠もかけないのである。若しこの日に行つて獵があれば、必ずフクサキを串にさしてその場で諏訪様にあげるといふが、これは既にこの忌の弛んだものと解せられる。

キタウチ　薩摩などの狩人は猪のヌタ打ちをする場合に、獲物が北に居るときは決して擊たぬ。北擊ちをすると彈丸がもとに返つて來るなどゝ謂つて之を忌む。北にさへ居なければヌタ場に居る猪は擊ちよいから必ず打つのである。

サンダイクダイ　猪狩で獲物を遁がしたとき、其方角を占ふ方法。午前は必ず三ダイに、午後は必ず九ダイに類れるといふ。算へ方は三ダイはその日の十二支から三つ目、乃ち卯の日ならば巳の方に、九ダイは九つ目すなはち亥の方角に猪が姿をみせるといふ占ひ方をする（日向西米良）。椎葉山でもこの語があり、「三代九代のきく神」といふ詞も山神祭文のうちにみえて居る（後狩詞記）。

タチトヒ　獸の脛臓卽ちタチを用ゐて明日の狩場の方角を卜する風が、越後と羽前との境に行はれてゐる。羽前小國の長者ケ原の獵師は、次のマキクラの場所の數だけに分ち結へて燒き、その破裂した部分にあたる山の方角を以て、山の神の宣示と解し、そこを次のマキクラの地と定める。之をタチトヒと謂ひ、タチは一行の人數だけに切つて皆で食べる（旅と傳說一二卷五號）。越後北蒲原の赤谷などではタチを膽囊と解してゐるが、これは謬りかと思はれる。こゝでも山小屋の祭に、三つに切り麻絲で縛つて串にさし、炙ると脹れて輕くぽんと鳴るのを以て狩場の卜定をすることは、前者と同じである。

サンヅナハ　三途繩。奥州の獵師の山に入る時携へて行く繩。危急の場合に之を用ゐて行ふ護身の法ごとが有るといふ。陸中遠野では、葬式の龍頭につけた麻を以て山立の際の三途繩に綯ひ魔よけとする風がある（旅と傳說、葬號）。或る獵師、山中の大木の下におのれと木とをこの三途繩を以て三めぐり引きめぐらしてまどろんだに、僧形の妖異があらはれたといふ話も傳はつてゐる（遠野物語前篇）。

シバウチ　大隅の高山では獵師が山中に泊る時、柴で入用の場所をうちまはり、山の神から借領すること。これを同じ國の百引の山村ではシバサシとよび、山中野宿の折、その人數に應じ二坪又は三坪の地の四方に柴を挿して、山の神に宿をかして下さいと言つて泊る。柴は概ね榊を用ゐる。かうすれば何にも無いといふが、これは祭の時にも同じ詞があつた。

クマアレ　鈴木牧之の「北越雪譜」には熊を殺すこと二三匹、或は年經たる熊一匹を殺すも其

山必ず荒るゝことあり、山家の人之を熊荒といふ。この故に山村の農夫はもとめて熊を捕ることなしといへりとあるが、飛驒でも、冬熊を捕ると大雪が降るといふ傳へがある。それで獵人が山に入るのを、村の女たちは悲しんだものだといはれる（日本民俗八號）。然るに加賀河北郡の淺川などのクマアレは春の彼岸になつて霰の降ることをさう謂ひ、越後北魚沼郡の湯ノ谷などでは主として雨の場合がクマアレで、この季節には熊穴に水が溜つて居られなくなつて、熊が穴から出るからの名といはれてゐるのをみると、こちらは何れも熊の靈の所爲とは見ず、熊のとれる頃の荒天をいふとみえる。

七　山の信仰

三二　山の神

カメセツク　四月四日の山入りを忌む日を、信州下高井郡などではカメセックと謂ふ。神節句かと思はれる。

ヤマノカミノセチバ　この名の處が數ケ所あり、爰で杓子を拾ふとマンがよいといふ。正月七日の朝ゼチ、十六日のタゼチと謂ひ、この日セチバへ行くと俎板にのせられるといふ（速見郡立石附近）。セチは卽ち神まつりの折目をいふから、ヤマノカミノセチバは舊く玆で山の神を齋祀した跡地かと考へられる。

ヤマムケ　阿波那賀郡日野谷などの正月二日夜の行事。各戸から米を集め、之を苞に入れて神木につるし、鎌を以て之を切る。その米悉く散亂するを吉とする。

ヤママツリ　九州西南の島々では、一般に舊十一月前半に山祭を行ふ。長島では初の丑の日、

又申の日を用ゐ、もしくは月の初めに之を執行ふ例もある。個人持の山は其家で、共有山は組合で之をつとめる。各戸米を集め、元は酒を釀したが、今は買つた燒酎に新米の粒を入れるのみである。是を携へて山神の祭場に赴き、御幣を神にさゝげ拜をして後に飲食する。山祭の最も注意すべき特色は、女が決して參加せぬといふ土地の多いことであるが、是は或は山神女性といふ信仰と關係があるのかも知れぬ。

ジフニマツリ　上州赤城山の北側の村など、二月と十二月との十二日をさう謂ひ、炭燒・獵師など山稼する者のみが山の神を祀る。鮒・田作りなどの頭つきの魚とシメ樽とを供へ、ヲコジョもみつかればそなへる風がある。

ヤマホメマツリ　阿波那賀郡では正月四日を山譽めといふ。山に入り木の伐り初めをし、その木で飯を炊いて食ふ。勝浦郡も同様、御幣に餅・柿・柑子・「たつくり」などを包み添へ山の神を祭る。筑前志賀島の山譽め祭は一名をシシガリ、二月と十一月との十五日の行事で、志賀明神社の社人たちが之に參與した。漁獵・種蒔の祭だといふが、詳しい事實はまだ知られて居ない。

ヤマノコマツリ　中部地方の諸國を通じて、初春・初冬の二度の山神祭をヤマノコの日といふことは普通である。信者が團体を爲し順番に祭を營むからの「山の講」であるが、どこでもその語音は山の子ときこえる。祭日は氣候風土によつて一定せぬが、多數は舊二月・十月の七日又は十七日、東北では十二日が多く、又九の日を用ゐる者もある。飛州には初寅の日といふ所もある(ひだびと三卷二號)。春から冬まで山の神が田の神となる口碑と關係のある行事であらう。名古屋市では材木屋・薪炭商・大工などにも山の講があり、翌日はオヒタキといつて、湯屋・鍛冶屋の祭日となつてゐる。三・遠・濃・尾の山々では牡丹餅・御幣餅を作る風が弘く、この日、山に行くことを忌む理由として、山の神が頭巾を落して捜し歩いて居るのに逢ふと悪いからといふのは(土の香三卷六號)甲・相の間でいふ山の神の冠落しと關係が有りさうである。この日を以て山の神の木數への日とし、山にゆけばこの中に勘定されると說く土地もかなり各地に多い。西美濃の一部では一尺内外の石を神体とし、女をその集りに交へることを忌み、悪口をはたきあふ風がある。これを祀るところはその年々に區々であつたとみえて、方々の山中にヤマノコノアトが殘つてゐた(ドルメン四卷一〇號)ことは、全く相州内郷村などの山中の地名に數多の山の神のみられたのと似てゐる。地名には遺らずとも、山中任意の地を卜して山神を齋ふといふ風はかなり弘いやうである。

ユフヤマノコ　山の講の前の晩のこと。飛驒益田郡は通例十月十三日、以前は舊暦十月七日で

あつた。農家では赤飯を炊いて山の神を祀る（益田郡誌）。

ヤマバヤシ　能州の能登島で、六月の中旬に一日休んで、山に行つて酒食をする日がある。それをヤマバヤシといふ。

ヤマノカミクワンジン　山の神勸進。志摩郡でいふ語、卽ち霜月七日、五六才の子が歌ひあるきて寄進を貰ふ詞に、「山の神の誕生日、お家も繁昌」といふのがあつた。貰つた時は祝言をうたひ、與れぬと惡口詞をいふ。

ヤマオヒ　舊二月と十一月との五日の山神講を、常陸の北部の山村で山追ひといふ。以前は此日に狩を行ひ、その獲物を以て神を祭つて居たといふ（民族四卷一號）。

ヤマノクチコウ　近江朽木谷の奥では、一年に二月・十月・十一月の九日には、山に行つて白兎にあへば死ぬと信じられ、此の日は必ず山行を忌む。二月の山の口講は種まき日、十月は切株數へと解說され、當番が米を集めてシロモチを作る風がみられる（近畿民俗一卷五號）。

ヤマライハヒ　岩手山下の村々では、山小屋の仕事を終つて村に歸ると、山の神を祭り、男ばかりの祝宴を催す。之をヤサライハヒ、其仲間の頭をサキダチといひ、席は年齡順である（山の生活）。ヤサラといふ語は必ずしも山小屋とは關係が無かつたかと思ふ。上北郡折茂村では舊二月九日をヤサラと謂ひ、同郡米田村では春彼岸の中日をさういつて、全村の會飲があつた（人類學雜誌四〇・四一號）。北秋田でも春の種蒔き終の日にヤサラザケの祝宴があり、能代附近ではヤサラモチを搗いて一日休み祝うた。ヤサラは必ず八つの皿を膳に竝べるなどゝいふことが、菅江眞澄翁の紀行にも見えて居る。

ヤマノヒモ　正月四日の山神祭に、白紙へ互ひちがひに鋏を入れて、長い紙のシデを作つて神に上げる。岡山縣の邑久郡では、之を山の紐と謂ひ、又單に紐とのみいふ村も有る（文化資料一卷四號）。西三河などでは紙を細く切つたものを長く繋いで、卷いて置いて空高く投揚げることがある。それをノノと謂つて居るのは布の意味らしい。

ヤマシメ　薩摩の長島では、山の神の依坐は樹であつて、之をコクラ木といふ。其木には左綯ひの注進繩を掛け繞らし、之を山注連と呼んでゐる。今年七周り卷けば來年は五まはりと、七と五とを交互にして居る。山注連は舊十一月丑の日の山祭の日に取替へる。隣の伊唐島でも注連は左繩で、それを山神の傍へ來て綯うた。此繩には二尾の魚を掛ける。それをも掛の魚と謂つて居る。遠く隔つた越後東蒲原郡の山地、東川などのヤマジメは十二節の藁に紙をまいて麻で縛つたもので、正月元日にはこの先へ田作・昆布・松葉・白米餅などをつけ、明きの方へそなへて山の神を

祀る。これが濟まぬうちは金物は使へぬといふので早朝に行ふさうである（高志路一卷一〇號）。

ジョウモク　阿波海部郡牟岐町中村の百々路山でのこと　樵夫が二つ裂きにされてゐた事がある。それがさる月の二日であつた。ジョウモク卽ち山仕事の休日は此邊普通に七日であるが、この地のみは二日を之にあてゝゐる。ジョウモクは定目と書くのであらうか。

タカヤママツリ　高山祭。能登の鳳至郡の村々で、舊二月九日の山神祭をさう謂ひ、此日山に行くと悋我をするといふ。舊三月二十四日も石動山の高山祭で、やはり山に入ることを戒めて居る。今は月送りの四月二十四日。

タカネマツリ　閏年の十一月、山々の天狗をまつる行事、之を三州北設樂の村々でさういふ。

ヤマンバマツリ　土州土佐山村の横平山の北に小岩窟があり、俗に山婆が爰に棲むといひ、九月十七日を以て之を祭る。山婆祭といふ（南路志）のは山姥祭の宛字で、山神を女性と觀た故の稱呼である。

コツパゾロヒ　又キツパゾロヒとも。一月九日は、安房平館などでも天狗や山の神が集つて何かする日ゆゑ、山に入つてはならぬと說いて居る。

ヤマナラサヌヒ　舊正月九日を南秋田の谷地中あたりでさう呼んだ。この日は雪の山に若木をとる人もなく、杣山賤の家々では斧に御幣をそへて仕事を斷つたといふ（氷魚の村君）。

ツチキリ　字は土切と書いて居る。能登の珠洲郡などで、舊二月九日の山に行かぬ日をさう謂つて居る。

ヤマノカミノシシカリ　正月五日をさう呼んで、山に行けば必ず悋我をするといひ、山にゆかぬ風が、印旛郡地方にある（民間傳承三卷七號）。例の山の神の冠落しなどの類である。

ヤマノカミノスケガリ　十月十日の夜は弘くトホカンヤと謂ふが、上伊那の美和村あたりではこの日は山の神の祭日である。獵師たちは朝早く山の神に詣り、山の神の助狩とて必ず獵に出る。他の人々は山へ入つてはならず、若しこの日山に分け入つて擊たれても文句はもちこめないことになつてゐた。この日の獲物は或は山の神のにえであつたのかも知れぬが、いまはこれを知るたよりは見當らぬ。

ヤマノカミノキダネマキ　春または秋の山神祭の日を山の神の木種播き（東蒲原郡）山の神の種蒔き（丹波地方）など〻名はよんで、山に入るを忌む風はそちこちにある。之をまた山の神の根アラタメ、又はソウキアラタメともいふ土地も少くない。越後の東川などのは二月九日或は三月十二日、丹波では十一・十二の兩月の九日など〻區々ではあつたが、要は忌みこもつて山神を齋ふ

べき日であつた。

タネヒロヒ　加賀能美郡では舊二月九日を山の神の種播き、舊十一月九日を種拾ひの日と謂ひ兩日ともに山の神を祭り、又その神事を妨げぬ趣意を以て村民は業を休み外出しない。

ヤマノカミノキカゾヘ　ツメ卽ち暮の十二日には山の神の木數へが行はれるとて、陸中遠野あたりでは、この日山に行つて木に算へ込まれぬ爲に山へ入らぬものとしてゐる。山中でよくみる捩れ絡まつた二本の木は、木算への終りに山の神が目じるしにしたものだといふ（遠野物語）。

ヤマノカミノミソタキビ　豐後直入郡では舊十二月二十日を山神の味噌たき日と稱し、此日山中に入つて味噌の香が鼻に入ると死ぬと言つて怖れて行かない。

ヤマノカミノセチアラヒ　山の神の節洗ひなどゝ、筑前の海岸の村で謂ふのは舊十二月の十四日と二十四日とで、山に入ることを戒めてゐる日である。セチとは年越の祝日のことで、その支度に衣を洗ふのがセチ洗ひである。

ヤマノカミノセンタク　九州博多で舊十二月の二十四日を山の神の洗濯といふのは、山の神の節洗ひと同じく、山の神がセチの爲の衣料を洗ひすゝぐ日と說いたもの。これも山神を女性とみた痕跡の一つかと思ふ。宗像の津屋崎には、この日山に入つて死んだものがあると云ひ、またこの日山へ入り弊衣をみれば運がよく、新しい衣をみると運が惡いとも信じられてゐる。

ヤマノカミノカンムリオトシ　相州から甲州などの山々にかけて、正月二十一日などの山の神の祭日を、斯う呼ぶ土地が多い。篠などの弓箭を作つて之を山神に供へ、この日は山に入ると、山の神が冠の落ちるのも忘れて狩に熱中して居られるから、その矢に中ると恠我をするとて、半日休む（津久井郡内郷村）と云ひ、また四つ前は山に出られぬ（北巨摩郡）などゝ謂ふ。信州諏訪の境村でも、山の神の初緣日は十七日だが、弓を拵へて供へ、又十時前に外出すると山神が弓を射る妨げになると謂つて可成外出を避けて居る。この日十時前に恠我をすると治らぬとも謂ふ（蕗原一卷四號）。

ヤマノカミノハラタチビ　月の九日を阿波の三好郡ではさう稱して、山師も炭燒も山に足をいれなかつた。山の神の使は首に輪のある小蛇とも四十雀とも謂ひ、四十雀が花柴を啣へて飛んでくると、その日は山入りを忌む習ひもこゝには在つた。

スネヨリ　二月初午の日をスネヨリと謂つて山にゆかぬのは、この日が山の神の木算へ日で、行けば、脛を折るからと說いてゐる。また正月九日にも山に入らず、山の神が木の夫婦を作るゆゑ、人もゆけば木にめあはせられるといふ傳へがある（伯耆中津地方）。

スンデ　山中の恠。信州北安曇郡では山の講の日には山入りをせず、此日山に入るとスンデが

出ると謂つて居る。

ミソカヨイ　大晦日をミソカドシといつて、山に行くを忌む風は、信州南佐久郡の村々に在る。「ヅクナシの節期働き」などゝいふ諺があるが、この日山稼ぎに入るものがあれば、ミソカヨーイと喚ぶ聲を聞くと謂ふ。見かへらうとしても首が曲らぬとか、聲の主は山の神だとも鬼だとも說いてゐる。かやうな山奥の聲は越後などにもあつて、白狐が特に師走を以て靈告するかにいふ者がまだ遺つてゐるやうである。

ヤマヒビキ　反響。こだまのことをさういふ（大隅高山地方）。

ヤマノカミ　山を領く神ではあるが、農民のいふ山の神は春には山から里に降つて田の神となり、秋には再び山に歸つて山の神と爲るのに對して、總べての山稼ぎをする山民の信ずる山の神は、概ね田の神とは關係が無い。また、同じく山の神と言ふも、木地屋の信ずる山の神は夫婦神とされ、獵師のは土地により或は男神といひ或は女神と謂つてゐる。羽後大曲附近などでは朱袴裸身にして右手に鉞をもつた垂髮の女神と想像されてをり、上越では名も十二樣又は十二山の神といふのを耳にする。山の神を男神と信ずる地方で、武力を以て山神を助けた功に依つて、獵師が永くその恩寵を蒙つたといふ說話があり、また之を女神と說く地域に、その出產を助けた勞を以て久しくその祝福を受けた一派の狩人のある事を傳へた傳說のあることは、近來稍々弘く諸所に於て確かめられつゝある。現在各地の山の神の祭日を覽るに、月の七日・九日・十二日などが多くこれらの日を以て山稼ぎを廢して以て山神を齋ふのみならず、その日を目して山の神の狩をする日・木種を播く日・木を數へる日・鳥が巢を作る木を借りる日などゝ呼んで、終日若しくは四つ前の山入りを忌み、之を犯せば災厄不幸ありと說く村々は多い。山神を祀るに一定の祀祠のあるものも尠くないが、また山中任意の場所若くは吉方の山地を卜し、或は古來山の神ゐますと傳へられた古木などの下をえらぶ風も稀ではない。相州內鄕の村山に、山中數十の山の神なる地名の遺つてゐたのは、この祭神の習俗に基くものであつた。祭の供物は神酒の外、粢・山餅・燒飯・團子・山饅頭などゝいはれるものが主で、弓矢・繪馬などを供へる例もみられる。粢はその最も古い食物の一つであるが、また山小屋で作る燒飯もかなり弘く行はれてゐる。卽ち名の如く串にさして燒いたものであるが、之を岩手山麓ではボタモチ、野州でバンダイモチ、中部山村でゴヘイモチなどゝ謂ひ、津輕・秋田あたりでは是に味噌をまぶしたものをタンポヤキと謂つて居た。ゴヘイモチは御幣餅であらうが、五兵衞といふ人の考へ出したかの如く思ふ者が多い。想山著聞集に詳しく見えて居る。天狗がその香氣を好くなどゝ云ふのは、もともと山の神の供物だつたからであら

う。かやうな山の神に供へた餅を女がたべると、生れる子の氣が荒い（男鹿寒風山麓農民手記）とか、山の神のみは女の參加することを嫌ふなどゝ、女性の關與を忌む例も尠くない。海ヲコゼをこの神が特に好むと傳へて、これを以て山神の好意をとりもたせようとする習ひも、國の南北に渉つて弘い。他方、熊野の山詞に狼を山の神と謂ふ（鄉土研究一卷六號）のは、かつてこの獸のみが特にさう呼ばれるだけの信仰を、山民の間に維持した由來が消えずにゐたのであるが、今はそれも幽かにならうとしてゐる。

ジフニサマ　信・越・佐渡にかけて地の神として十二樣を祭つて居る。又冬の月には十二日の山の神の祭として、前夜から十二講の日待をするのが普通である。十二山神ともいふからこゝに謂ふ十二樣は山の神であると思ふ。

ジフニヤマノカミ　東日本には十二山の神といふ詞は所々で聽くやうである。秋田仙北地方の山神祭は正月と師走との十二日、前者は山の神の木種まきである。山で働く者の掛聲にも「十二山の神」といふことをよく耳にする（奥南新報昭和十一年一月十九日號）。陸中山形村などでは、一年に十二の子を生む女神と說いてゐるが（山村生活の研究）、とにかく十二が一年の月數と深い關係のあることは疑ひないが、その神名のゆゑに十二といふ數を忌む信仰も生れ、津輕其他では山小屋などの人數が十二人となることを畏れ、サンスケなどゝ名は呼んで、必ず人形を作つて十三人目に擬らへる風がある。

コヤマノカミ　常陸の北境八溝山の麓の村で、狩の日初矢を射た者の家に集つて、臟腑を煮てある山の神の神棚に供へ、殘りを煮て一同で食ふ（民族四卷一號）。二月と十一月の五日の山の神祭に對して、之を小山の神と謂ふかと思はれる。

サガミサマ　上越の境では山の神を十二樣とも又サガミサマとも謂ひ、北魚沼郡などの熊狩小屋でも、之を祭るサガミ棚を設け、その上に人數各〻一枚づゝの繪馬型を木の枝に下げて壁にさす。サガミ祭は小屋を建てたときや熊を狩り得た時などに行ふ。熊を獲たときは、そのヤバの近くで行ふ。これにも人數だけの繪馬型を供へてゐる（熊狩雜記）。思ふに、サガミサマはシャチ神と同じものゝやうである。

キダマサマ　山林の神樣として、山で樹木を伐るとき祭をする靈異を、八丈島の三根あたりではキダマサマと謂つてゐる。

オサトサマ　正月二日のノサカケにノサを掛ける木を、越後三面あたりでかう謂ふ。以前は山

の中まで掛けに出かけた。單にオサドとも呼んで、山の神の祀られた木であるとも說いてゐる。こゝでは山小屋のオハヤシをかける木もオサトサマと謂つて、山毛欅の木の例が多いさうである。流し木の堤を始めて切る前夜の祝をオサトバナシといつてゐるが、千繩部落ではこれをオサトモドシと稱してゐる。オハヤシをノサの木に縛りつけ、片膝を地について拜むことで、必ず後を振返らず、また物も云はずに歸るものとされてゐる（越後三面村布部鄕土誌）。果して、オサトサマが山の神なりや否やは確かではないが、ノサをかける場所をオサトと謂ふのかとも考へられる。或は木の靈かも知れぬが、他ではまだ報告をみない名である。

ノタガミ　三河・遠江の境の山村では、ノタ場にはノタ神坐すと信じて不淨を戒め、之を犯すときは農作を荒さるゝといふ。新たにノタ場を發見した時には、注連を張り幣をきりかけ、そこにノタの神を祭れば靈驗ありといふ。山の神と同じと考へて居るらしい。稀にはそのノタ場に碑を立てゝ祭祀をして居る所さへある。

オホナンジコナンジ　兄弟二人の狩人が山の女神の御產に出逢つて、一人は拒み他は助けたといふ古風の物語を、三河・遠江の山村では此名を以て呼び、下毛野上の奥でも大ナジン・小ナジンの名を以て稱して居る。日光山以北は普通に万次万三郎の兄弟とし、或は會津・越後の境などの如く青葉の獵師と猿丸の獵師と說き、また秋田マタギの如くコダマのレッチュウとスギのレッチュウとするもある。九州南部には大滿・小滿二人の獵夫の話として傳承してゐる。何れも產穢を忌むことなく、神を助けた方の一人が、後々山神の恩寵を享けたといふ點は同じである。豊後阿蘇野にもこの說話があると仄聞してゐるが、未だ確かめてはゐない。南會津などの狩人のあひだには猿丸と青葉との二人の獵師の話となつてゐる爲か、こゝでは小ナンジは單なる雪崩の稱呼となり、大ナンジも風でふはりと襲つてくる雪崩の名と解せられ、前者は避けられるが、後者は避けられぬなどゝ傳へて居る（旅と傳說一一卷二號）。大汝・小汝の地名は越中黑部溪谷の奥などでも耳にすることがあるが、果して關係があるか否かは明かでない。

バンジバンザブラウ　磐次磐三郎。斯ういふ名の兄弟の山の神が有るといふことは、羽前山寺にも陸前の柴田郡にも言ひ傳へられ、他の地方にも其信仰の痕跡を山の名に留めて居るものがある。其起源は多分磐神（イハガミ）であらうといふことを曾て詳しく說いたことがある（神を助けた話）。山立由來記などに見える萬三郎もこれに關係があつて、蜈蚣の形をした赤城山の神に苦しめられた日光山の神を武力を以て助けた山立の元祖の名となつてゐる。

シチニンカリウド　七人の狩人が連れ立つて山に入り、歸つて來なかつたといふ傳說が參・遠の

山村に多い。或は又七人の士とも座頭とも謂つて、何れも塚を築いて其靈を祀つて居る（民族三卷一號）。古い何かの信仰を誤り傳へたもので、斯樣に數多く悲慘な事件が實際起つたわけでは無からうと思ふ。サンスケ參照。

エンノコ　遠州周智郡などで、深山で稀に見る小犬ほどな獸だといふ。別に害をせぬが、之を見ると狩の獲物が無いと言つて、山民は之を忌むといふ。エンノコは小狗のことで、山神の愛犬を意味して居るのである。

オンコロ　山の神のエンノコ卽ち小犬と呼ばるゝ深山の小獸を、諏訪ではオコジョ、南安曇郡では又オンコロとも謂ふ。胴の徑一寸五分、體は圓筒形、長さ五寸に尾も五寸、夏は褐色の毛、秋には灰褐色、冬に入つて純白となり、尾の尖のみ黑くて愛らしい。高山に巖居し里へは下りて來ない。えぞいたち一名山いたちといふ獸に宛てられてゐる（南安曇郡誌）。擧動が異樣な爲に神祕を以て山民の眼に視られて居るのである。

ヤマノカミノコロ　木曾で山の神のコロといふのは、山いたちといふ一種の獸のことである。蝦夷鼬と似て更に小さく、高い山に住み冬のみ麓近くまで降りて來る。冬は毛色純白になり、尾の端のみ黑い。穴居して樹上へ登らず、地を走り人を怖れない。富士にも日光にも居るが、土地毎に名がちがつて居る（木曾採藥記）。山の神のチンコロ又オコジョなどゝいふ處もある。コロといふのも子犬のことである。その擧動を見て之を山神の家畜と解したので、捕へたり逐うたりすると祟があるとも言ひ傳へて居る。

クロンボウ　山の神のチンコロ卽ちオンコロと同じ物らしいが、紀州では是を本草の雷獸のことだと謂つて居る（紀伊續風土記）。全身黑色、咽の下から胸にかけて、一種の赤黑毛がある。その糞麝香の氣があり、風雨の時に出づといふが、土佐には他の毛色のものも有るさうである。美濃でクロンボといふのはオンコロの方らしいが、比較に困難だから是を究めることが出來ぬ。

オヤマクダリ　またノクダともいふ。赤黑く小さい栗鼠のやうな動物だと說いてゐる。これに遭ふと山を下るといふ。獵人も之をとらず、石を打付けて大悋我をした人の話もある（信州上伊那郡美和村）。

ヤマヲコゼ　此の名の海魚の一種「花をこぜ」とも稱する最も小形のものを、山の神に供物として上げる風習は全國的であり又古い。一名を山の神ともミコウヲなどゝもいふから、山の神と古くから關係のあつたことは窺はれるが、どうしてさういふ信仰が始まつたかは、今尙興味多き問題として殘つてゐる。狼が非常にこの魚を好むといふ說もあるが、實驗は出來さうも無い話で

ある。筑前相ノ島では山神は醜い神である故に、ヲコゼを見ると自分よりもまだ醜いものがあると言つて喜ばれると謂つて居るのは、山の神を女性と說く信仰と思ひ合せられるが、大和の吉野郡や肥後の球磨郡では海ヲコゼを山の神の嫁御とも謂ふから、此の點もたしかでない。兎に角に理由は判らぬに拘らず、此魚を山神に奉る風習のみは奥羽の果にまで及んで居る。而も等しくこのヲコゼを供へることに依つて、多くの山幸を授けられると信じてゐる。越後北魚沼郡の湯谷などのヲコゼは海魚ではなく、鰍に似た川魚で、十二樣が好むからとて狩人は必ず持參し、これを山の神にみせるにも作法があり、右手で出すと拔かれるから左手で出すものとされ、紀州の山地でも山神の笑祭にヲコゼを示すのに、懷手をして纔かに袂の袖口からみせるといふ風もあつた。爲に吝嗇漢をおこぜ祭と云ひ、物惜しみして見せぬを「ヲコゼ見する」などゝいふ詞をさへ作り出した。九州椎葉山の狩人はヲコゼを一枚の紙に包み、之に告げて曰く、「ヲコゼ殿ヲコゼ殿、近近に我に一頭の猪を獲させたまへ、さらば紙を解きて世の明りを見せ參らせん」と。かくして獲物ある毎にヲコゼを欺いて更に白紙を以て包み、祖先から傳來して百數十重に達したものもある。このヲコゼは一子相傳して主人が固く祕藏し、自らも如何なる內容なるかを知らぬのが例であるといふ(後狩詞記)。ヲコゼはかやうに狩の獲物の多からんことを禱る爲のみならず、備前や佐渡などの高原では、放牧した家畜を見失つた時にも、これを山の神に供へ或は示すことによつてたやすく發見すること妙なるものがあると謂ふ。以前は名古屋附近などでも盛んに三河あたりの山間へこの魚を送つたといふことであるが、但馬養父郡の奥などでは、舊正月九日山の神に各自何なりとも生きた魚を供へ、これをヲコゼと稱する風がある(近畿民俗一卷五號)のは、ヲコゼが容易には得がたい爲であるかと思はれる。かうした海魚のヲコゼに對して、山ヲコゼと呼ぶものもあつて、漁夫たちの豊漁の呪物として用ゐられる風も以前は相應に旺んであつたらしい。肥後神瀨などでは山ホコゼはアブラメの如きもので、山中の濕潤の澤に棲息するものと說いてゐるが、これは土佐で山螺を(鄉土研究四卷七號)、陸中遠野で山野の濕地に自生する細長い一種の卷貝(遠野物語)を、何れも山ヲコゼと稱するものと同じかと思はれる。三河の山中でも、朽木の株などにこの種の貝の居るものを紙に包んで携へると、幸運をかちうると信じてゐる。かやうに山ヲコゼは漁民の珍重する所とされてゐるに拘はらず、日向米良鄉で謂ふ山ヲコゼのみは、むしろ獵師たちの求めて携へんとした山の神の好物であつた。卽ちこゝでは鹿のミヽナバ(耳朶)の割れて變つたものが山ヲコゼであつた。この山ヲコゼや、鹿の腹中に在るといふカノタマなどは、之を千枚の白紙に包んでおき、獲物を授けられる毎に一枚宛解くといふ習ひが行はれて居た。その他ヲ

コゼと稱せられるものにも、物の異なる例は尠からず發見されてゐる。中部地方や豊後臼杵郡では猛毒ある一種の毛蟲をさう呼ぶ村々も多く、長門豊浦郡では茄子の葉につく米粒大の害蟲を、信州東筑摩郡の一部では山椒魚（村の調べ、三）、伊豆半島南崎の村落では刺して痛めるものは、カサゴといふ魚も一種の海藻も、みなひとしくヲコゼと稱し、周防大島ではワンビキ（蟇）がヲコゼと成ると說くのも、何れもその稱呼ばかりは山の神とヲコゼとの信仰よりは後のものであつた。

ササヲコゼ　南會津の川衣あたりで謂ふ笹ヲコゼは、笹のまたに組紐の如くになつて出るものと云ひ、これも亦海魚のヲコゼの如く山の神に供へるといふ（旅と傳說一一卷二號）。

サンスケ　津輕では杣が山稼ぎに入るとき、十二人の數を忌み、別にもう一人居るといふ意味で、木の枝で小さな人形を作り、眼口を描いたのを山小屋に置く。之を三助又は山中三助などゝ呼び、後で山神堂へ納めて置くといふ。遠州の氣多の山地には、あるクセ山では七人で仕事をすることを忌む爲に、杉の木若くは人形を八藏と呼ぶ風がある。その杉が後に人語を語り出したなどゝいふ話もある。山城の知井などではこの人形を八兵衞と呼んでゐる（山村生活の研究）。

イヌノボコミ　甲州北巨摩郡の村々など、以前は狼が山で產をしたといふと、赤飯を大桝一杯炊いて持つて行く風があり、之をイヌノボコミと謂つて居た。ボコは產兒、ボコミとは產見舞のことである。他の地方では是を狼の產見舞とも、亦ウブヤシナヒとも謂つた。山の神がお產をするといふ俗信と關係がないとは謂へない。

三三　山の怪異・俗信

ヤマノカミノハナタテ　峠路の上に旅人が小枝を折つて捧げる靈地は全國に分布して居るが、羽後の雄勝郡では之を山の神の花立と謂つて居た（駒形日記）。シバヲリサン・ヲリバナサマ・シバタテ又はハナタテバと謂つて居る土地でも、之をそこの山神への手向けと思つて居ない者がもう多いやうだが、東北には古い信仰が斯うして尙殘つて居るのである。

シバトコ　日向の椎葉で、人の變死した跡を某シバトコと、其死者の名を冠して地名として居り、路を行く者が柴を折つてさゝげる風がある。是を又シバガミとも謂つてゐる。山一重の西米良にも地名として存してをり、板谷の八重（ハエ）では金持のかぢどんを殺し、シバをかむせて遁げたものがあつて以來、この風ありと說いてゐる。

ヒダルガミ　山の峠などで行人に飢餓を感ぜしめるといふ惡靈、之を丹波・但馬・攝津などの境

でさう謂ふ。壹岐島ではヒダルゴと呼んでゐる（壹岐島方言集）。北九州でも山路を通る者が急に空腹疲勞を感じて動けなくなるのを、ダラシといふ怪物のしわざといふ。その場所は定まつて居り又よく知られてゐる。曾て其地で餓死したものがあつて、その靈が留まつて行人を惱ますのだなど〻説明せられ、何か食物を食つてその殘りを近くの籔に捨てるとよいと謂ひ、又はたゞ掌に米の字を書いて嘗めてもよいなど〻いふ。紀州・吉野などの山路では、ダリボトケ又はダリガミ、單にダリともいひ、急に疲勞空腹を覺えることをダリニツカレルと謂ふから、これも靈怪の仕業ともとは考へて居たのである。

ダニブクロ　山中に無數に蝨といふ蟲の棲息する處があり、そこに行きあはせた人が大いに惱むことがある。それを相州津久井ではダニブクロと謂つて居る。北設樂では古草鞋に天狗が小便をかけると、それがダニになると謂つて居る。

ヤマヤスミ　石見の海岸の村では、午後に山に行つて物に躓くと、ちようどくしやみなどの呪ひの樣に躓いた者がヤマヤスミと唱へる。さうすると傍の者がそれに續けて「よう休みんさつた」といふのださうである（方言と土俗三卷八號）。休むべき日に山に行くと、怪我をするなど〻いふ俗信と、關係のある呪法かと思はれる。

ヤマオラビ　筑後星野村の仁田原などで、山に斯ういふ名の怪物が居るものと傳へて居た。山に入つてやい〳〵いふと、山オラビが是に負けずにやい〳〵とおらび返し、遂に人をおらび殺す。しかし此時にわれ鐘を敲くと、山オラビの方が負けるなど〻謂つた。コダマ又は山彦のことかと思ふと、別に山彦といふものもあるのである。

ヤマシヅメ　伊豫南宇和の目黑あたりの山間でいふ語。上の山で不意に太鼓の音のすることがあり、これを聞くと直ちに神主をたのみ山鎭めをしてもらはぬと、山が荒れて怪我人が出來る。北向の山は殊に荒いといふ。

シユゴジンサマ　天狗を守護神樣と謂ふ者は三河の山地に多い。毎月七日山に入ることを忌み此日木を伐ると守護神樣に罰せられるといふ。殊に十月の七日には其御祭をする。守護神樣は賑かなことが御嫌ひといつて、山小屋では尤も靜肅を旨とする。守護神に石を投げられ、また攫はれたといふ話も稀で無い。秋冬の交、山の尾づるに鍋の尻の煤火の如き火の列を見ることがある。それも此神の火だと謂つて居る（鄕土研究二卷一二號）。

テングノスモウバ　天狗の相撲取り場とも。夏の山の茂つた中に十數坪の苔生地又は砂地のあるのを、さう謂つて人が畏敬した。羽前には殊に其例が多く、月山のバラモミ澤にも（三山小誌）、

朝日岳の上にもあつた(山岳二〇巻三號)。莊内金峰に隣する母朔山の頂上に在るものなどは、時として鷄の聲を聞き、又新たな馬の糞を見ると謂つて居た。信州蓼科高原には雷様の年取り場といふもあつた(四鄰譚叢)。

デイリガハリ　魔所と稱せられる山の樹林地に、どんなに注意して入つても入つた口からは出られないといふものがある。越後や河内などでは之を出入變りと謂つて怖れて居る。

ヤママヨヒ　攝・播國境の多井畑の山の神は近隣に聞えた神であるが、正月九日の山祭りには幣を拵へて木の枝につけ、又年德さんに供へた餅をちぎつて枝につけ、これを烏が食ふとよいとされてゐる。この日は、山迷ひがするとて、山の祭をしてからは山に入らなかつた。他地方の山醉ひ・山氣などとひとしく一種の山岳病のことかと思はれる。

ヤマヨヒ　富士ではよく言ふことであるが、南會津の伊北などでも山で具合の惡くなることをヤマヨヒと謂ふ。九州椎葉にはユキヨヒといふ語もある。

ヤマケ　遠州秋葉神社などでよく山氣に打たれるといふがある。ヤマヨヒと同じものかと思ふが、ガンギ(階段)を登れなくなることがある。

ヤマノカミノハシゴ　下北半島の田名部あたりでは、稻葉や粟の葉に雪の如くものゝかゝつたのを山の神の粢と云ひ、これが多いと畑の作物などが豊作だといはれた。松前では之を狐ムスビと謂ひ、佐渡の島では鬼ムスビといつてゐた。粟の葉にあるものを山の神の梯子ともいつて、朝夕霧の立こめる頃になるとみられた(牧の朝露)。

トビチョウシ　飛銚子。日光山の男體・女貌その他の高峰では、以前は峰修行をする行者が、折折之を見ることがあつた。所を定めず、又二三年も見ないこともある。形は小さな銕製の銚子に似て蓋も無きものゝ由。是は山鬼の好みて翫とするものなりといふ(日光山誌、三)。サルサカヅキの類であらうか。

サルノアカインロウ　今から八九十年も前のことゝ云ふ。遠州氣多の澤奥の作畑に猿が出て作物を荒したことがある。その猿、赤印籠をもち、畑へ入る時はワチ(猪垣)に置いて入る。里人之を奪はんとすれど、猿は必ずそれを忘れずにとり去る。畑主これを氣に病み、病臥するに至るといふ。爾來この山はトシ山となつた。紀州日高川の流域で、果のはつか即ち舊十二月二十日に山に行くことを忌み、此日山に入つて猿盃をみると凶事が有ると傳へて居るが、猿の赤印籠もこの類かと考へられる。但し猿盃の如何なるものかは詳かでない。

ヤマビト　他の地方で山男・山爺などの名を以て知られて居る山中の異人を、北秋田方面では

今でも山人と謂つて居る（民俗學四卷二號）。津輕との境の田代山などには住んで居るといひ、山人に葉煙草を贈りその代りにまだの木の皮を集めて貰つたといふ類の話が多く殘つてゐる。或は又之をオホヒトとも謂つて居た。大人・山人が平地の農民と交際し、殊に角力を取りたがるなどゝいふことが、河童の口碑と似て居るのは注意に値する。山の人生參照。

ヤマヲトコ　山男の話は數多く知られて居る。爰に注意して置くべきことは、此名稱は所謂標準語であつて、地方には山父・山爺・山彦等の如き、具體的な語が數多く行はれ、又山母・山姥・山姫などの名と對立して居ることゝ、其遭遇談には妖怪的分子が存外に少く、人と交際し又は交易したといふ類の、人類學的事實がかなり多いことである。奥州五戸では反響の山彦を山男といふ者がある。こだまを山姥といふ例と對立し、共に中世以來の山彦が、やはり山中の異人と考へられて居たことを推測せしめる資料である。

ヤマヲヂ　筑後の星野でも、山中に斯ういふ名の怪物が居たと傳へて居る。山ヲヂはしやがむと頭よりも膝かぶの方が上に出るほど、足の長いものだつたといふのみで、他の逸話はまだ聽いて居ない。九州も他の地方では是を山ワロと謂つて、その記錄は南谿の西遊記を始め二三殘つて居るものがある。

オホヒト　磐城山の三峯のうち、赤倉嶽を古くからあがめて岩鬼山といつたのであるが、いつの頃からか鬼神も隱れ住み、折々は怪しい者が峯を攀ぢ或は麓に下ることがあり、その身の丈は相撲の長よりも高く、やせくろんだその姿を見た人もある。一目見ても病を起す者もあり、また之になづさうて兄弟の如く親しみ酒肴などをとらせると、その返禮として山の大木を根こじにし、或は級の皮を剝ぎ、馬二三頭が負ふほどを抱へて來てくれるなどゝいふ話が多かつた（外濱奇勝）。

ヤモノモノ　近年、九州の中甑島にてのこと、柴苅にゆきし女の小池神社の附近から山の者に吹かれて海まで飛ばされてゐたといふ話がある。山人の類の如くこの怪異を考へてゐるらしい。

フルソマ　土佐香美郡槇山鄕などで、山に働く者に怖れられて居た怪物の名。深夜山中に大木を伐り倒す音をなし、やがて行くぞう〳〵といふ聲が聽える。夜が明けて見れば何事も無いのは天狗倒し又は伐木場も同じである。大昔、七人の杣人が大木の槻を倒して山中で死んだ。其の魂魄が多く殘り留まつて居るのだと謂つて、古杣の名があるのである（風俗画報、三二四號）。

インノモウレイ　五月の霧の深い頃、山で犬の啼聲を聽くことがある。薩摩の下甑島では是を犬の亡靈と謂ひ、昔猪狩に行つて山で死んだ犬の靈が、其まゝ山に殘つてゐるのだといふ。

キミサキ　一種山中の神靈の樹木に憑るもの。ミサキは西部日本で祟の多い小神の謂ひである。

キリキボウ　山中の幻覺。木を伐るやうな音をさせる怪物と信じられ、即ち伐木坊の名があるのである。大よそ山中で最も鮮明であつた或時の印象が、多く想像の中に入つて居て折々再現するのである。

テングダホシ　深山でよく經驗する異様の物音、大きな樹木の伐り倒されたと同じ響がして、後にその地に行つて視ると何の痕跡も無いといふ。

ソラキガヘシ　耳のまぼろし、天狗倒しといふものを、會津などでは天狗の空木返しといふ。斧の音とめり〳〵と倒れる音まではして、どしんと地に着く響きは聞えぬといふ。

ケボロキ　ケブルキともいひ、生保内あたりの事かと思ふが、他地方で謂ふ「空木がへし」又は「天狗倒し」の如きをさう呼ぶ（旅と傳說九卷四號）。

ヤマコトバ　山詞。狩獵その他のなりはひの爲、山小屋に暮す者が特定の里言葉を忌み、その代りに用ゐる詞である。恰も船で働く者に沖詞があり、農民に正月詞がある如きである。秋田の阿仁マタギは山詞をヤマイリコトバともいひ、會津檜枝岐の狩人はナコトバと謂つて居る。ナコトバのナは禁制を意味する語であらう。マタギの山詞は全體が寄せ集めで、古語やアイヌ語・普通の隱語などの採用の外に、また彼等の自作もあつたらしく、その分が殊に興味深いやうである。羽越にかけての獵師のなかには、ヤが山の神の語音であるからとて、ヤの音を避けて造語するとか、或はサイ・ナ・カナの接頭語若くはタタキ・カル・ネジリなどの接尾語を基としての造語法があつた（山岳三二卷一號）。かうした山言葉は既に鈴木氏の「北越雪譜」や眞澄翁の「遊覽記」にも採られてゐる如く、米をクサノミ、風をソヨ、熊をイタチなどゝいふが如きで、アイヌ語を用ゐたと思はれるものには水をワッカ、犬をセタ、心臟をシャンベなど尠くない。これを用ゐて魚をワッカムグリといふ（越後赤谷）などは新しい合成語である。山詞をもつマタギの社會に於ては、多くは一定の地域に至ると里言葉の使用を禁じ、これを犯せばその日は引返すとか、或はその者を甚しく戒めるといふ手續の存することも普通であつたが、近來はこの祕傳の山詞も漸次公にせられるものが多くなつたのは、一つには信仰の弛緩によるのかと思はれる。言語に對する我我の祖先の考へ方やその背後に働いた思想感覺を知る爲にも、之を集めて置くことは必要である。

分類山村語彙索引

アイ……六三
アイコ……（六三）
アイゴジシ……（二一八）
アイコ萩……（六三）
アイ印……（一三三）
アイソ……（六三）
アイタケ……七九
アカギモ……（三一四）・三一五
アカシカンバ……（一一六）
アカゾロ……（一一六）
アカネツソ……（一六三）
アカフ……（三〇七）・三一五
アカフク……（三三四）
アカブキ……（三三二）
アカボッケ……（二六）
アカモノ……八六
アカヲヒク……（二九八）
秋ゴリ……（一五七）
秋マキ……（九六）
アクヤ……一四七
アゲキ……一〇四
アゲソ……一四四
アゲヤマ……三八
赤コゴメ……（七〇）
アサキ……一三〇
アサキヤマ……（一二〇）
朝ゼチ……（三四一）
アサドリ……八五
アサミ……二六六
アテラ……七
アタマカタメ……二七三
アタリ……一六八
アヅキギモ……三一六
アヅキナ……六七
アッテラ……（七）
アテ……（八）・二四〇
アテギ……（八）
アテシカ……二〇二
アテ山……（八）
アトコバメ……一〇三
アトヤマ……（一九〇・一九一）
アトヲツケル……（二九八）
アナイレノオミキ……二七三
アナジルシ……二七一
アナドメ……二七二
アナドリ……二四七
アナメキ……二七二
アバ……一四二
アハイチゴ……（八八）
アハラ……二四
アビキ……三一一
アブキ……一八
アホウマキ……二八九
アマス……二一九

アマセ……（二二九）
アマドコロ……（七五）
アマナ……六七
アミダダマ……二八五・
アメコ……七四
アモシギ……一二一
アヤギ……一六〇
アラケ……四〇
アラシ……一三六・一六七
アラシオフ……（一六七）
アラシカケル……（一六七）
アラシマド……一七二
アラセ……（一六七）
アラドリ……（二二四）
アリ……三一二
アワ……（三四）
アヲケラ……（二三四）
アヲシカ……（二二三）
アヲシシ……二二三
アヲダイフ……九四
アヲネツソ……一六三
青葉の獵師……（三五五）
アヲバ流・青葉流……（二七七・三二三）
アヲモン……（六三）
アンコ……二八四
イカケジシ……二九九
イカブラ……三〇七
イカリ……（三〇三）
イカリワケ……三〇三
イカリヲヨル……（一九一）
イカルマヘ……三〇三
イコ……二〇四
イサオヒ……七九
イザキ……二六九
イシ……一八七
イシゲト……一八一
イシゴヤ……一八一
イセギ……一〇四
イソ……二五
イソビラ……（二五）
イソフキ……二八八
イタオシ……二五九
イダシ……一三六
イタダキサン……（二三二）
イタチ……（三六九）
イタドナ……（七二）
板ビラ……（二六〇）
イダマス……三〇四
イタワリ……一九七
イタヰ……二一七
イチダイギ……一二二
イチノキレ……三一〇
イチノヤ……三〇五
イチバンヤ……三〇五
イチモク……二七〇
イチモツ……二七〇
イチヤリ……三〇五
イツピキザル……二三八
イツピキモノ……二三八
イヅミカキ……二〇七

イツヲ猪……（二二六）
イドリ……一六八
イヌエビコ……九〇
イヌオトシ……二二九
イヌグマ……二〇五
イヌダマシ……（二八二）・三〇四
イヌノボコミ……三六〇
イヌヒキ……二六九
イヌヤマ……二六九
イヌヰザシ……一〇七
イネダマス……（三〇四）
イネバ……（三二〇）
イノチダマ……二八五
イバイシカ……二一一
イハイヤマ……三九
イハクラ……一五
イハシカ……二二三
イハトリ……（二二三）
イハハゼ……（八六）
イハママメ……八七
家キザ……（一二三）
イヘジルシ……一三一
イホ……一八一
イホシスダレ……（三一三）
オホビキ……（二九六）
イボリ……七七
イメクバリ……二九一
イモシバモヤ……一六一
イヨカ……二九九
イライラグサ……（六三）
イラガユ……（六四）
イリアト……二九一
イリヤマ……九八
イレキ……（一二三）
インダマシ……（三〇四）
インツキ……二八二・（三〇四）
インノモウレイ……三六七
インビチ……（二六九）
ウイノシシ……二一三
ウゲ……三一五
ウケキリ……一〇一
ウケクチ……（一〇一）
ウケコマ……一〇一
ウゲヅキ……二〇四
受とりはづし……（三二九）
ウゲホル……（一〇一）
ウケヨキ……（一四七）
ウケヲキル……（一〇一）
ウジシイハヒ……三三一
ウチジル……三三一
ウドウ……（二四）
ウサギツヅミ……二四五
ウヂ……二三七
ウチカヘシ……（八一）
ウチガラメ……三一一
内ゾシ……（三二一）
ウチバ……（二九四）
ウチハギ……三〇六
ウヂバシラ……一八六
ウチマヘ……二六七

ウチヲマツ……（二六七）
ウツ……（二三七）
ウツヅメ……二五一
ウツデツポウ……二六二
ウツナ……八五
ウツマチ……二六七
ウド……二四
ウナ……二一四
ウナトモ……二一四
ウネ……四
ウノ……（二一四）
ウバイロ……七六
ウブヤシナヒ……（三六一）
ウマイタ……一三七
ウマゴ……（一七）
海ヲコゼ……（三五二・三五八）
ウラキガヘシ……一〇〇
ウラダマ……（一二八）
ウラヤマ……三一
ウラリン……（一二五）
ウリボウ……（二一五）
ウリンボウ……二一五
ウレ……一
ウヲキリ……二七
エ
エキ……三〇
エグシ……（二八三）
エグリ……一六九
エゴ……二九
エダカキ……一九七
枝ソーリ……（一三六）
エダヤキ……一六六
エヂツコ……（五三）
エトドコロ……七五
エドリ……（一六八）
エナタ……一五一
エノサシ……一〇一
エブリガハ……一九
エメトリゴヤ……（一二九二）
エラミ……一三七
エリ……一七一
エンノコ……三五六
オ
オイセギ……（一〇四）
オウヂ……三三
オエ……一九八
オエバ……七八
オガ……一八九
オカクラ……（二八九）
オカベトナヘ……三三二
オカベル……（三三二）
オキ……二八七
オギー……（二八七）
オキエ……二四六
オキジシ……二八七
オキジシカケル……（二八七）
オキデツポウ……二六三
オクレオーカメ……（二三九）
オコジョ……（三五六）
オサド……（三五四）
オサトサマ……三五三
オサドサン……（三二七）

オサトバナシ……（三五四）
オサトモドシ……（三五四）
オサヘダマ……（二八五）
オシ……（二五六・二五八）
オシカク……（一二六）
オシキリ……二五七
オシバ……（二五六）
オシミノキ……一〇五
オス……二五六
オスバ……二五六
オセ……（二五六）
オセドリ……二五七
オソ……二五七
オソビキ……二八八
オソブエ……二八八
オソマタ……（二五九）
オダマヘ……三〇
オダメヤ……（三〇）
オチビラ……（二六〇）
オツ……（一九八）
オツス……（三五六）
オツソ……（三五六）
オツツオバ……（二五八）
オツツメル……（一六七）
オトシ……二六一
オドソ……三八
オドツチ……（六七）
オドロ……三七
オナガ……二八一
鬼ムスビ……（三六五）
オヒクチ……一〇二
オヒタキ……（三四三）
追ヒ鳥……（二六五）
オホウチ……（一七四）
オホカギ……一三七
狼オトシ……二三九・（二五七）
オホザン……（二一二）
オホズクマ……二八一
大ゾロ……（一六）
オホタマ……（三三二）
大ナジン小ナジン……（三五四）
大ナンジ……（三五五）
オホナンジコナンジ……三五四
オホヌタ……（二二二）
オホブクロ……（三三三）
オホヒト……（二六六）・三六七
オホボケコボケ……（二二）
オホミジョウ……（二九四）
オホヤマノクチ……五〇
オモテヤマ……三一
オホロクソクモノ……二一六
オマタ……（二七八）
オマタギ……二七八
オミサーキ……（九八）
オヤイヌ……二六九
オヤガシキ……（一九三）
オーヤギ……（一三七）
オヤマクダリ……三五七
オロ……五七・一二一
オロヤマ……三二

オンコロ……三五六
オンヂ……三二
オンボレ……（九四）
カイマ……二二〇
カウガイ……（三〇一）
カウノシシ……（二一〇）
カオヒ……（二六九）
ガガイ……（一五三）
カガシ……（五五）
カガミジシ……二一七
カガラ……二五
カガリ……（二三九）
ガガリ……一五三
カカリギ……一二四
カギコ柴……（二一八）
カギーコノキ……（二一七）
カキコロシ……（一九八）
カギザホ……一五五
カギサマノキ……二一七
カギヤマ……四三
カクイ……一二三
カグ木……（二二〇）
カグマ……（七〇）
カクラ……二八九
カクラヲミワル……（二九〇）
カクリ……二五一
カグリ……一三二
カケダマス……三〇四
カケデツボウ……二六二
カゲニオ……（一三）
カケバ……三一七
カゲビキ……（一一八）
カケリ……二三七
カコ……二四三
ガゴ……三一七
カコウ……五五
カゴクサ……五一
カコナ……六九
籠ビラ……（二六〇）
カコラ……（二一）
カサガタ……一九
カザコ……八〇
笠松……（一一〇）
ガザンバラ……三七
カシカメ……二二九
カジマタ……一四四
カシヨイモ……七七
カスブ……五四
カスボシ……五四
カセギバ……二二一
カタ……（二九二）
カタオロ……（三二）
カタギ……（一二〇）
カタグロ……二一五
片小屋……（一八三）
カタダレ……一八五
カタヤデオロシ……三〇八
カチギ……一六一
カヂナ……一六四
カヂヤズミ……一七〇

カヂワナ……二六二
カツキリ……（一三一）
カツコ……五四
カツチ……二〇
ガツチグリ……八四
カツチベ……二三〇
カツバ……（二七三）
カツラ……一五二
カド穴……（一四四）
カナイハ……（三三五）
カナエブリ……一六九
カナヤギ……（一五八）
カナヤズミ……一七一
カナヤマオロシ……三〇七・（三一〇）
カニフン……（九二）
カニメ……一七三
カネツクシ……一五二
ガネブ……九一
カノカ……八〇
カノシシ……二一〇
カノタマ……（三五九）
皮タチの引導渡し……（三三七）
カバ……一四五
カハイレオミキ……（一四五）
カハガリ……一三九
カハギ……一六〇
カハギトリ……（一六〇）
カハクソ……一四二
カハサゲ……（一三九）
ガハシ……二〇〇
カハジシ……二一〇
カハマヘ……三二七
カヒクチ……二四六
カブ……（三一四）
ガブ……九一
カフアゲ祝……（一七六）
カブイ……（一二三）
カフカケイハヒ……一七六
カブトギリ……三〇八
カベ……五三
カベシシ……二二三
カベトリ……三三三
カベハリ……（八六）
カマ……（三一七）
カマイホ……一八四
カマウチイハヒ……一七六
カマオチ……一七五
カマカマ……（八六）
カマザイメン……四五
カマサキ……（二一〇）
カマジメ……（九八）
カマタテイハヒ……一七六
カマデ……二一〇
カマヒドキ……二三六
カマブシン……一七五
カマブツ……（一七六）
カママツリ……一七七
カフカケイハヒ……（一二三）
カマモチ……一七七
カマヤマ……一六五
カマヨコ……（一五一）

カボシヤマ……四九
カミガリ……三三六
カミツブシ……二六四
カミゾメ……二〇六
雷様の年取り場……（二六四）
カミヨコヒギ……一二一
カミワリ……（二六四）
カムロ……（二三〇）
カメ……三〇
カメ井……二一八
カメゼック……三四一
カモ……（一四三）・二二〇
カモエ……（二三六）
カモエダ……一〇六
カヤイボリ……（一六九）
カヤフダ……五一
カヨウ……六〇
カヨヒ……一四五
傘松……（一一〇）
ガラガラキド……二四〇
カラスエビ……九〇
カラヅマイ……（二七四）
ガラニタ……（三四）
ガラビ……（九一）
カラビダチ……一二一
ガラミ……（九一）
ガラメ……九一
ガラン……（二五）
カランビシ……二五
ガリ……二四三
カリアツマリ……二七四
カリカハ……一四〇
カリコボウ……二八三
カリコミ……（一三八）
カリコミ酒……（一六九）
カリタマラヒ……五一
カリマ……（二七四）
カリメン……（二一九）
カリヤス……三一九
カルギモ……二八三
カルマ……二一九
カレ……二三
ガレ……（二三）
カンガイ……（三三六）
ガンガリ……（一五三）
カンコ……五四・一五〇
ガンコナタ……一四九
ガンゴロジ……（九四）
カンダテ……（二三五）
カンチヨ……（二一〇）
カンス……八六
ガンズリ……五二
ガンセキ……五九
ガンドウリ……一五四
カンナ……二一
カンナヂ……（二一）
カンナヂ小屋……（二一）
カンナバ……（二一）
カンニヨ……（七六）
カンニヨウ……（二一〇）

カンネウチ……七六
ガンノハラスリ……六
カンネカヅラ……七六
カンバ……七四
カンバン……（一三一）
ガンブ……（九一）
キイシ……一七五
キガマ……一五二
キグマ……一六二
木クマ師……（一六二）
キグロ……一六二
キコバ……一一
キサ……（一七〇）
キザ……一〇〇・一三三・（一四八）
キサズミ……一七〇
キザミ……（八一）
きさらぎ山……（一八二）
キジガサ……二六五
雉子鳥屋……（二六四）
キシヤウヤマ……三八
キジリ……一六七
キジリカキ……（一四一）
キジリヤクニン……（一四一）
キジルシ……一三〇
キシンド……一七二
ギスギ……六
キソモノヤ……一七九
キタウチ……三三八
キダキ……一三九
キタテ……一〇〇
キダネ……（一〇〇）
キダマサマ……三五三
木地跡……（一七九）
キヂクリ……一七六
キヂゴヤ……一八三
木地小屋……（一七八）
木地師……（一七七）
キヂバタ……一七九
キヂヤ……一七七
木地山……（一九九）
キツトダテ……二五
狐ムスビ……（三六五）
キツパシ……一八〇
キツパゾロヒ……（三四六）
キドリ……一二三
キノシタ……六五
キノバス……二一二
キノメ……七三
キバナ……（一四一）
キバナノスケダチ……（一四一）
キバナヤクニン……一四〇
キバン……一三四
キマキ……一六五
キミサキ……三六八
キモツキ……（三一四）
キモラヒ……九九
キヤマ……一五〇
共有バイ……（四〇）
ギヨク……（一三九）
ギリ……二五四

キリカジメ……二四二
キリキ……一〇一
キリキボウ……三六八
キリコ……一七〇
キリゴ……一九〇
キリコノタマ……二八四
キリコミイハヒ……九九
キリコミザカヒ……四七
キリシメ……（六〇）・二四二
キリダマ……二八四
キリハギ……四〇
キリハン……一三五
キリヤ……二八四
キリヨキ……（一四七）
キンタマハヂキ……（八六）
キンマミチ……（一三七）

ク

クキ……二
クグイ……六九
クグシ……二五二
クグス……（二五三）
クグチ……（二五三）
ククミ……一五四
ククリ……二五二
クサイ……二三三
クサカケ……（三一一）
クサガリ……（一二）
クサノ……三六
クサノミ……（三六九）
クサワキ……三一〇
グシ……二四一
クシザシ……三三四
クセチ……（三九）
クソダヌキ……（二三三）
クダ……一六六
クタシ……二四三
クダナガシ……（一三五）
クチアテシバ……（一六六）
クチシバ……一六六
クチダキ……（一六六）
クチバ……（二三四）
クチヤ……一四六
クグツ……（二五二）
クド……（一四）
クドアナ……（一七四）
クドシ……一六
クネ……一八・（一九）
クハセツケ……二六三
クハノダイカキ……一九八
クハヘラ……一九八
クビククリ……（二六二）
クビシメオシ……二五九
クビチヤマ……二五四
クビツチヨ……二五四
クヒドメ……二〇七
クブチ……二五三
クブツク……（二五三）
クブツチヨ……（二五四）
クブテ……（二五三）
タマアレ……三三九
クマイチゴ……八八
クマケラ……（二二四）
クマサカ……一五三
クマダヌキ……二三三
クマツチヨ……三七
クマノアタリ……二〇八
クマノシシ……二〇三
クマノミボシ……二〇六
クマノヒラ……（二六〇）
クマブナ……一一九
クボテ……（二五三）
クママツリ……三二三
クミヂ……二五二
クミツチヨ……（二五四）
クラ……一四
クラ探し……（二八九）
クラシシ……（一五・二二三）
クラヅキ……二二五
クラホゴシ……二九七
クラレ……一八四
クル……（一二八）
クルマゴ……（三一〇）
クレ……一二七
クレワリ……一五一
クロウチ……二八三
クロキ……一一九
クロギモ……（三一四）
クロフク……三一四
クロヤマ……三八
クロンボウ……三五七
クワシバ……八五
クワンノミ……（八六）
グンダ……（九一）
グント……九一
ケ
ケアゴ……四二
ケイジルシ……一二六
ゲエ……（四五）
ケカケ……七七
ケカチジシ……二五一
ケキリ……二一九
ケス……二二四
ケタ……八
ケダイ……一四一
ケタゴヤ……一八五
ケツカハ……（二〇二）
ケツソーリ……（一三六）
ケヅナ……二六一
ケヅリ……（一三三）
ケト……一八一
ケド……（一八一）
ケドブツ……（一八一）
ケブルキ……（三六八）
ケボカヒ……三二七
ケボシ……二〇六
ケボロキ……三六八
ケマツリ……三二八
ケヤマ……（三九）
ケラナ……二二四
ケラハゴ……二四七
ケリヅツ……三一九